

名東遺跡発掘調査概要

—名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査—

1990.3

名東遺跡発掘調査委員会

名東遺跡発掘調査概要

—名東町2丁目・宗教法人天理教団名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査—

1990.3

名東遺跡発掘調査委員会

卷頭圖版



土壤 S K01 銅鐸出土狀況



土壤 S K01 出土銅鐸

序文

徳島市の西部、四国三郎「吉野川」の最大の支流とされる「鈎喰川」の下流域に、県内屈指の遺跡としての「名東遺跡」が位置します。古より、人々の活動の場でありましたこの遺跡には、数知れぬ重宝な未知の生活痕跡が埋まり絶えています。

今回、名東遺跡を発掘調査する機会に恵まれ、その未知なる部分に、僅かながらの陽を当てることができ、さらに、調査成果を概要報告書として刊行する運びとなりました。

本書刊行におきましては、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくとともに文化財の保護、保存、活用の一助となれば幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施および概要報告書の刊行に対し、全面的な協力をいただきまして宗教法人天理教国名大教会ならびに関係各位に対しまして、深く感謝を申し上げます。

1990年3月31日

名東遺跡発掘調査委員会
委員長 田中良平

例　　言

1. 本書は、昭和62年～63年に名東遺跡発掘調査委員会・徳島市教育委員会が宗教法人天理教国名大教会の神殿建設工事に伴い実施した、名東遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和62年1月27日～昭和63年3月31日まで実施した。調査地は、徳島市名東町2丁目332, 334, 334-2, 334-3, 334-4, 335番地であり、調査対象面積は、2,000m²である。
3. 発掘調査に伴う日誌、図面、写真、台帳、出土遺物は徳島市教育委員会が保管する。
4. 発掘調査を実施するにあたり宗教法人天理教国名大教会・大成建設株式会社には、全面的な協力と援助を得た。また、発掘調査から遺物整理を経て本書の刊行に至るまでの間、下記の方々の参加、協力を受けた。御芳名を記すとともに感謝の意を表したい（順不同・敬称略）。

高木淳、黒田卓、日下ハマエ、日比宇和子、吉田トミ子、庄野ヨシコ、清井節子、岩本芳和、岩本マサ子、山岡武雄、藤田啓介、松延茂、林利行、張章仁、樺本高康、高曾根宏明、森名賢一、武市将信、長谷久和、島洋一郎、吉岡秀吾、井若浩、原田義人、井内重信、井内礼子、緒方初子、瀬戸清六、岡田龍子、竹内武雄、竹内サダエ、手越千里、早渕定次、藤本貞典、宗円重春、岩崎司、宮崎彰、早渕博之、早渕洋子、バラジュータ、澤ゆき子、椎野ちせ、幸田雅明、内輪実、中西和寿、他、多数の天理教関係者に協力いただいた。

5. 発掘調査及び本書作成に関して、下記の方々の御指導、御教示をいただいた（順不同・敬称略）。記して感謝の意を表する。

佐原眞、水野正好、近藤喬一、下條信行、岡内三眞、三木文雄、田中清美、石野博信、寺沢薰、西岡巖、天羽利夫、福家清司、高野学、橋本久和、鋤柄俊夫、松田直則、岩崎正夫。

6. 銅鐸の保存処理作業は、奈良国立文化財研究所沢田正昭氏に依頼した。
7. 写真図版の内、銅鐸の写真撮影には、浅田彰一氏に御協力をいただいた。
8. 発掘調査及び本書の執筆・編集は、徳島市教育委員会社会教育課主事勝浦康守が担当した。

目 次

序 文

例 言

本 文 目 次

I. 遺跡の立地と歴史的環境	1
II. 調査に至る経緯と経過	3
III. 基 本 層 序	9
IV. 検出遺構・出土遺物	9
1. 縄文時代晚期 (i) 不明落ち込み遺構	10
2. 弥 生 時 代 (i) 方形周溝墓	27
(ii) 銅鐸埋納土壙	39
3. 奈良～室町時代 (i) ピ ッ ト	44
(ii) 建 物	44
(iii) 檻	51
(iv) 溝 (a) 北東～南西方向の溝	52
(b) 東西方向の溝	54
(c) 南北方向の溝	58
(d) 収束する溝	60
(v) 土 壤	60
V. 小 結	63

挿 図 目 次

表 目 次

写 真 目 次

挿 図 目 次

- 図1 遺跡位置図
図2 調査地概略図
図3 調査地Ⅰ区、Ⅱ区検出遺構図
図4 調査地Ⅲ区検出遺構図
図5 自然落ち込み遺構SX01断面土層図
図6 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図7 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図8 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図9 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図10 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図11 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図12 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図13 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図14 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図15 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図16 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図17 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図18 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図19 自然落ち込み遺構SX01出土遺物
図20 1号方形周溝墓
図21 2号方形周溝墓
図22 方形周溝墓出土遺物
図23 方形周溝墓出土遺物
図24 方形周溝墓出土遺物
図25 3号方形周溝墓
図26 4号方形周溝墓
図27 5号、6号方形周溝墓
図28 方形周溝墓出土遺物
図29 方形周溝墓出土遺物
図30 方形周溝墓出土遺物
図31 土壌SK01銅鐸出土状況平面図
図32 土壌SK01銅鐸出土状況断面図
図33 土壌SK01出土銅鐸A面
図34 土壌SK01出土銅鐸B面
図35 ピット出土遺物
図36 掘立柱建物SB01
図37 掘立柱建物SB02
図38 掘立柱建物SB03
図39 掘立柱建物SB04
図40 掘立柱建物SB05
図41 溝出土遺物SD02(162), SD03(163~165), SD04(157, 159, 160, 167), SD05(158, 161, 166, 169), SD08(168), SD09(170)
図42 溝SD06出土遺物
図43 溝SD06出土遺物
図44 溝SD06出土遺物
図45 溝SD06出土遺物
図46 溝SD07出土遺物
図47 土壌出土遺物SK01(259, 262, 264), SK02(263), SK03(253, 255), SK04(254), SK05(256), SK06(258), SK07(257), SK08(261), SK09(260)
図48 名東遺跡における方形周溝墓群推定域

表 目 次

- 表 1 自然落ち込み遺構SX01出土石礫観察表
- 表 2 自然落ち込み遺構SX01出土石錐観察表
- 表 3 方形周溝墓出土石礫観察表
- 表 4 方形周溝墓一覧表

写 真 目 次

卷頭図版 土壌SK01銅鋒出土状況	P L -11 上：1号方形周溝墓
卷頭図版 土壌SK01出土銅鋒	下：1号方形周溝墓西周溝遺物 検出状況
P L -1 上：調査地Ⅰ区全景	P L -12 上：1号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況
下：調査地Ⅱ区全景	下：1号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況
P L -2 上：調査地Ⅲ区自然落ち込み 遺構SX01	P L -13 上：2号方形周溝墓
下：自然落ち込み遺構SX01遺物 検出状況	下：2号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況
P L -3 上：自然落ち込み遺構SX01断面 土層	P L -14 上：2号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況
下：自然落ち込み遺構SX01遺物 検出状況	下：2号方形周溝墓西周溝遺物
P L -4 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	検出状況
P L -5 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	P L -15 上：2号方形周溝墓西周溝遺物 検出状況
P L -6 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	下：2号方形周溝墓西周溝遺物
P L -7 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	検出状況
P L -8 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	下：2号方形周溝墓西周溝遺物
P L -9 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	検出状況
P L -10 自然落ち込み遺構SX01出土遺物	P L -16 上：3号方形周溝墓

	下：3号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況	P L - 27 上：銅鐸検出状況 下：銅鐸検出状況
P L - 17	上：3号方形周溝墓南周溝遺物 検出状況	P L - 28 上：銅鐸検出状況 下：銅鐸検出状況
	下：4号方形周溝墓	P L - 29 上：銅鐸検出状況
P L - 18	上：5号方形周溝墓	下：銅鐸検出状況
	下：5号方形周溝墓主体部	P L - 30 左：土壤SK01出土銅鐸A面 右：土壤SK01出土銅鐸A-B面
P L - 19	上：6号方形周溝墓東周溝	P L - 31 土壤SK01出土銅鐸A面
	下：6号方形周溝墓東周溝遺物 検出状況	P L - 32 左：土壤SK01出土銅鐸B面 右：土壤SK01出土銅鐸B-A面
P L - 20	上：6号方形周溝墓東周溝遺物 検出状況	P L - 33 土壤SK01出土銅鐸B面
	下：6号方形周溝墓東周溝遺物 検出状況	P L - 34 上：調査地II区掘立柱建物 下：調査地II区掘立柱建物
P L - 21	上：土器埋納土壤SK10遺物 検出状況	P L - 35 上：調査地III区全景 下：掘立柱建物SB02
	下：土器埋納土壤SK11遺物 検出状況	P L - 36 上：掘立柱建物SB02 下：調査地III区土壤墓群
P L - 22	1号，2号，4号，5号方形周溝 墓土器埋納土壤SK10，SK11出 土遺物	P L - 37 上：調査地II区溝SD01,03~05 下：調査地II区溝SD06
P L - 23	1号，2号方形周溝墓出土遺物	P L - 38 溝SD06出土遺物
P L - 24	3号，4号，6号方形周溝墓出土 遺物	P L - 39 溝SD06出土遺物
P L - 25	上：銅鐸検出状況	P L - 40 溝SD06出土遺物
	下：銅鐸検出状況	P L - 41 溝SD06出土遺物
P L - 26	上：銅鐸検出状況	P L - 42 ピット出土遺物
	下：銅鐸検出状況	P L - 43 溝出土遺物
		P L - 44 土壤出土遺物

I. 遺跡の立地と歴史的環境（図1）

名東遺跡は徳島市名東町に所在し、吉野川の一支部である鮎喰川水系の旧河川が形成した標高T.P.+7m前後の沖積微高地に位置する縄文時代晚期～江戸時代に至る複合遺跡である。遺跡としての認識は古く、1960年代に中・四国地域における弥生土器の編年を提唱した岡本健二氏の「名東町I～III式」の指標遺跡として遡り、学史的にも著名な遺跡である。名東遺跡においては、現在に至るまで徳島市教育委員会・徳島県教育委員会の数次にわたる調査が実施されているが、遺跡の様相に関しては、現在においても不明瞭な部分が多い。しかしながら、その位置付けは徳島県下でも屈指の遺跡として周知されている。

名東遺跡における縄文時代の様相に関しては、全く不明である。今回の調査において、多量の縄文時代晚期の遺物が出土し、周辺地域での人的活動の痕跡を示す非常に重要な資料として捉えられている。今後、明確な遺構検出作業が要求されるとともに、晚期の土器様相の明確化が望まれる。

弥生時代の様相も必ずしも明瞭であるとは言い難い。現在、名東遺跡における明確な集落の検出事例を示すのは、昭和52年～53年の発掘調査における住居跡等の生活諸遺構の検出が挙げられる。⁽¹⁾他方、本調査地に西接する日枝神社を中心に、弥生時代の集落跡の存在の可能性が指摘されているが、調査地における生活諸遺構の存在は確認されていない。⁽²⁾調査地周辺地域には、広域墓地が形成されたと考えられる。名東遺跡における墓域の検出は、現在、名東町2丁目157～160番地が西北限地であり、⁽³⁾名東町2丁目110～233番地に南下し、日枝神社を南西隅地とし、東方へ回り込み、本調査地である名東町2丁目322番地を南限地とし、眉山裾部に沿ってさらに東方に進み、名東町1丁目64を南東隅地とし、⁽⁴⁾北方へ回り込み同町1丁目91～94番地を北東限地とする地域で確認されている。⁽⁵⁾名東地域における旧地形を考慮した上で、概観すると、東・西に旧河道、南に旧河道・山地を控えその縁辺部にそって墓域が形成されている可能性が強い。これらの墓地が同一集団により形成されたものなのか否かの問題は残るが、生活諸遺構の存在をその中心部に求めるならば、名東地域一帯に弥生時代の大集落が予測される。

弥生～古墳時代への移行期の遺跡として著名な鮎喰遺跡が名東遺跡に北接し、鮎喰川左岸の矢野遺跡も同様の遺跡として周知されている。また、名東遺跡の背後の眉山丘陵尾根上には、全長60m、前方部幅15m、後円部径30mを測り全国一の規模を測る積石塚の前方後円墳として著名な「八人塚古墳」をはじめ、節句山1・2号墳などの古墳群が造営され

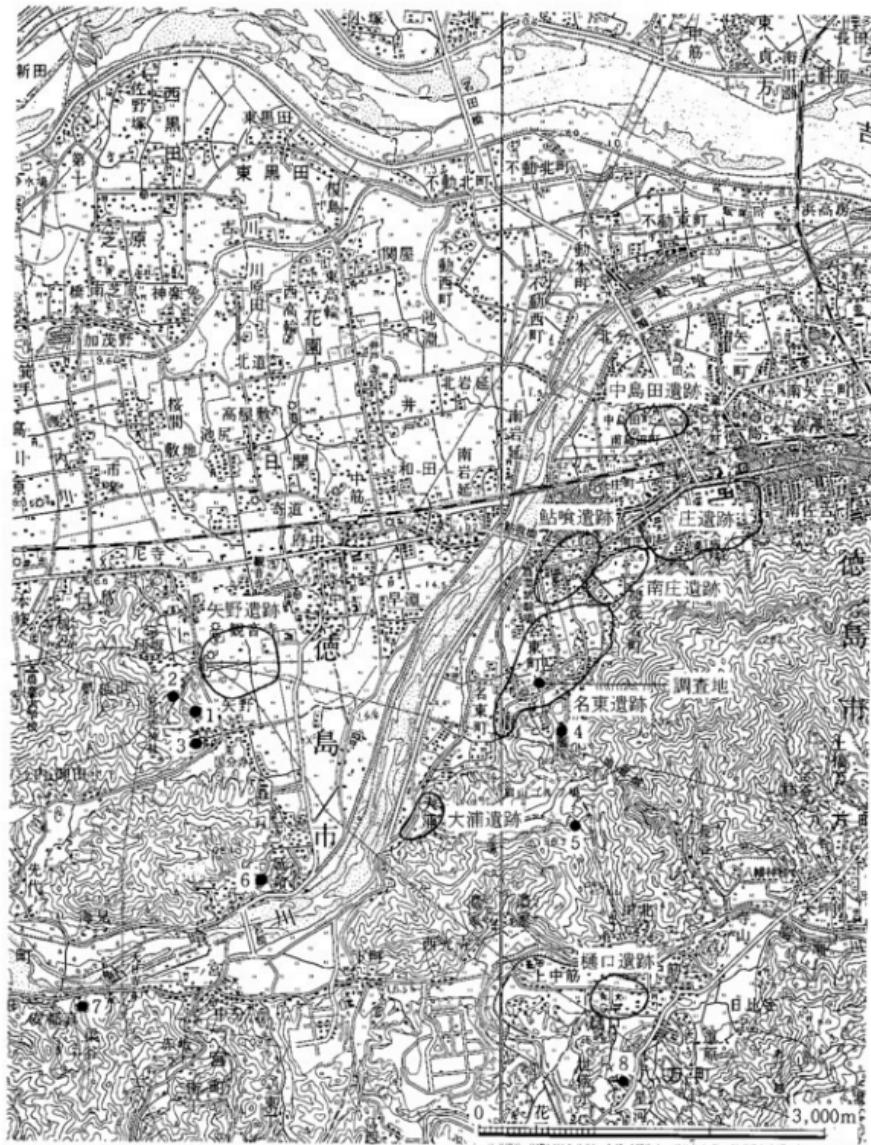


図1 遺跡位置図（国土地理院発行5万分の1図幅「徳島」「川島」使用）

1. 奥谷1号墳
2. 奥谷2号墳
3. 宮谷古墳
4. 穴不動古墳
5. 八人塚古墳
6. 源田銅鐸出土地
7. 安都真銅鐸出土地
8. 星河内美田銅鐸出土地

る。しかしながら、名東遺跡における古墳時代の平地部における人的活動の痕跡は明瞭ではない。なお、名東遺跡の北東部に位置する庄遺跡あるいは南庄遺跡においては、古墳時代中～後期の集落跡が確認されている。

奈良時代以降には、寛平八年（898）九月五日に「名東郡」設置の記事が『類聚三代格』卷第七・郡司事の条に見られるのをはじめとし、平安時代には、郡名を庄とする広域庄園の「名東庄」の存立が知られている。しかも、『高山寺文書』・安楽寿院領等庄園目録案に「阿波国名東」との記載があり、「名東庄」は院の御領とされ、南北朝動乱期に至ってもなおその存続が認められている。⁴⁶文献資料における古代～中世にいたる名東遺跡の評価は高いながらも、発掘調査における補足事例の検出例にまでは至っておらず、未解決な部分が多く残るのが現状である。

近年、名東遺跡においては、諸開発事業に伴い発掘調査件数が増加の傾向にあり、貴重な資料の蓄積がなされてきている。しかしながら、遺跡の様相に関しては、ほとんど把握されていないのが現状であり、今後の発掘調査の成果を通してより明確化されることが望まれる。

II. 調査に至る経緯と経過（図2）

昭和61年、宗教法人天理教国名大教会の徳島市名東町2丁目における神殿建替工事計画に伴う開発許可申請回議書（徳島市土木部開発課取扱）において、徳島市教育委員会は、当開発予定地が、周知の埋蔵文化財包藏地である「名東遺跡」の一角に位置することから文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく届出の指導を行った。その後、宗教法人天理教国名大教会及び工事主体者である大成建設株式会社と徳島市教育委員会の三者の協議により事前の発掘調査の必要性について合意に達した。徳島市教育委員会は、「名東遺跡発掘調査委員会（委員長 田中良平）」を組織するとともに、調査委員会は、宗教法人天理教国名大教会との間において埋蔵文化財発掘調査に関する委託契約を締結し、文化財保護法第57条第1項の規定に基づき発掘調査を実施するに至った。開発申請面積2,500m²の内、調査対象面積2,000m²を調査地I区（700m²）、調査地II区（1,000m²）、調査地III区（300m²）に3分割し、昭和62年1月27日より調査地I区の調査に着手し、継続的に調査を進行させ、昭和63年3月31日にすべての調査を終えた。

調査は、現代水田耕土層を機械除去後、人力掘削による包含層の掘削を行い、GL-50cmの黄色シルト層上面での遺構調査に努めた。

今回の調査で特に注目を集めたのは、昭和62年6月5日、遺構面検出作業中に発見され

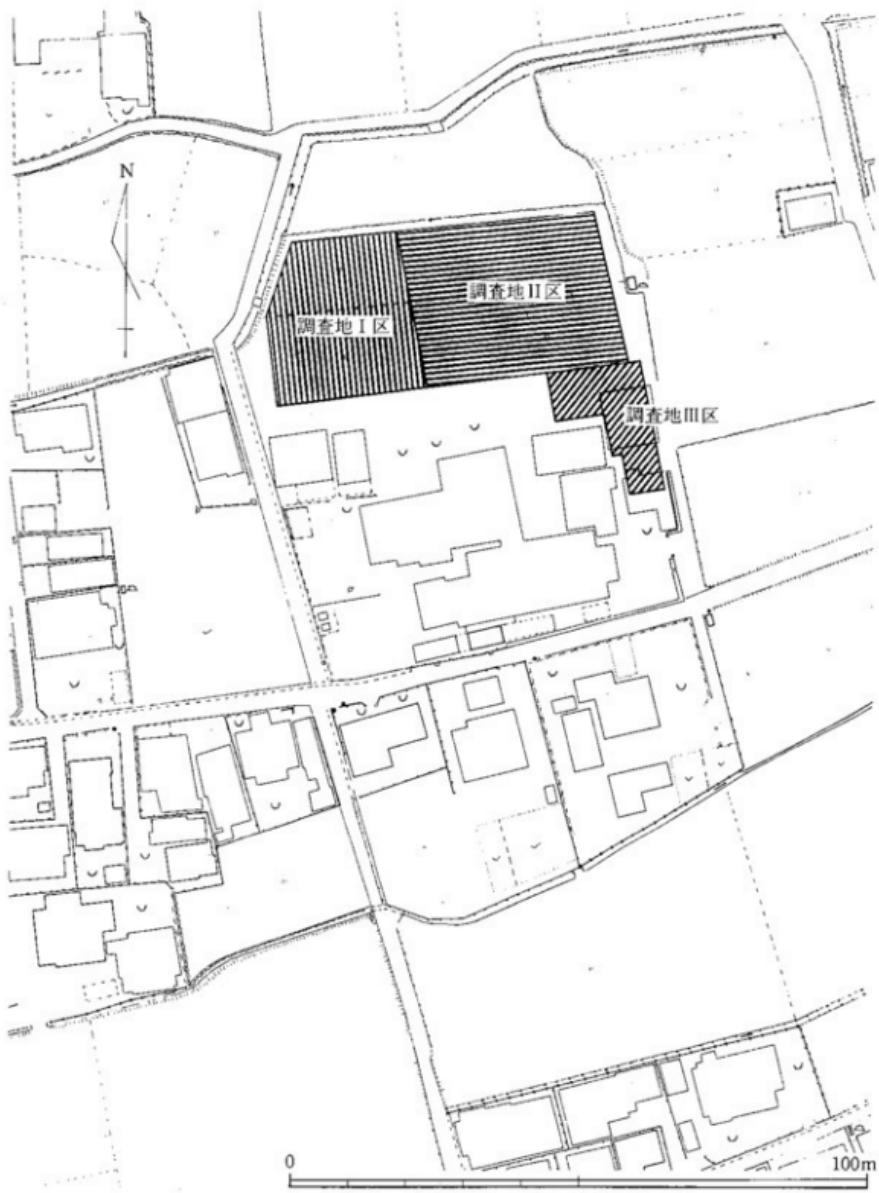


図2 調査地概略図

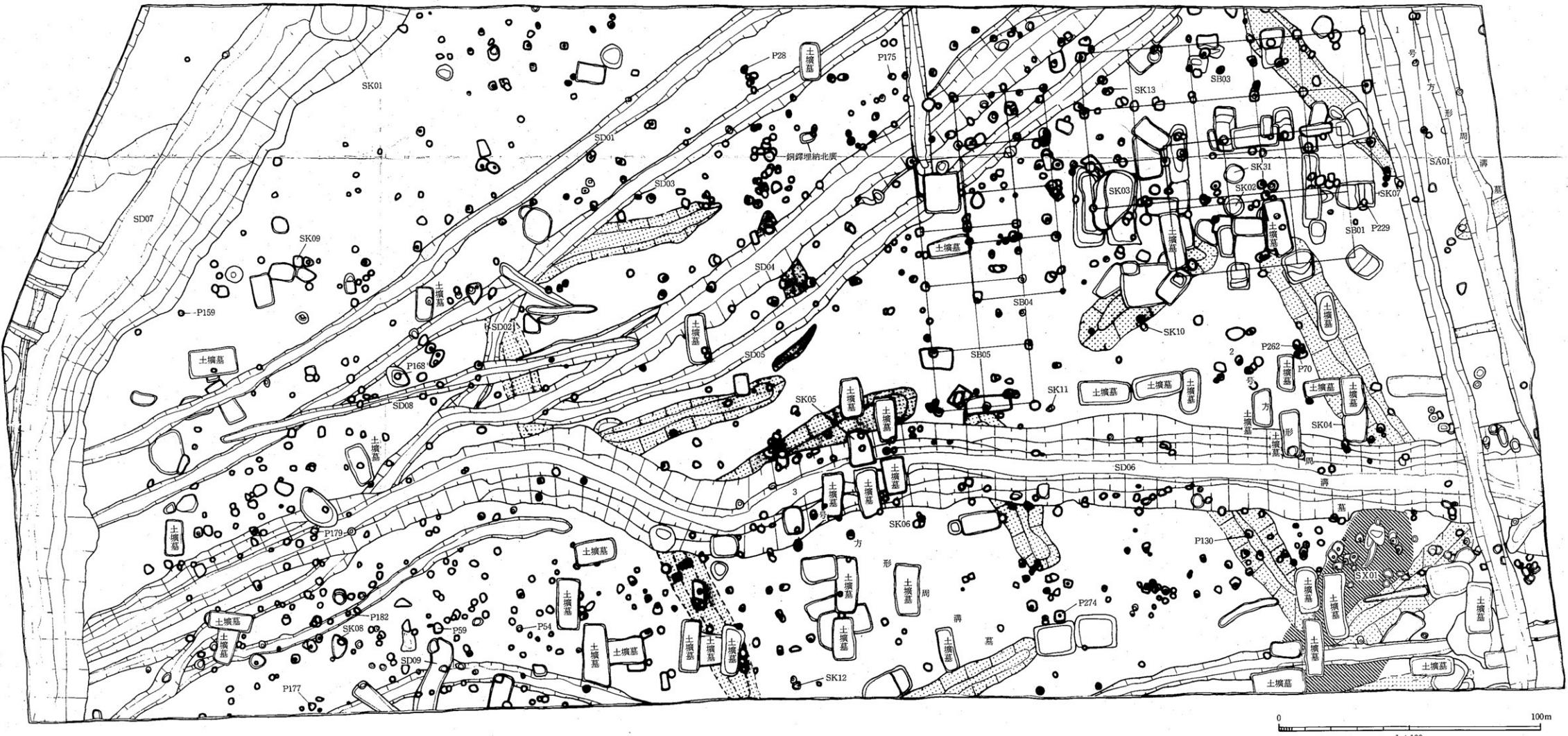


図3 調査地I区、II区 掘出遺構図



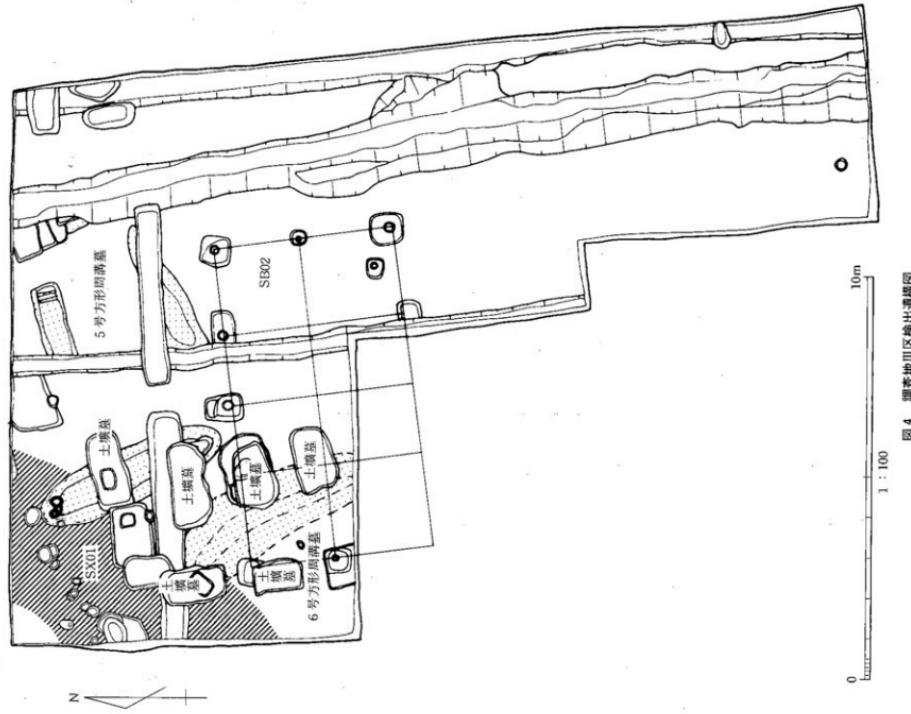


図4 調査地区検出地図

1 : 100

た銅鐸にみる。徳島県内では、昭和34年の徳島市入田町安真都銅鐸以来、28年ぶりの発見であり、出土総数は41個目を数える。当時、銅鐸を原位置で捉えた調査事例としても、稀例なものとされ、昭和60年、島根県斐川郡荒神谷遺跡、奈良県桜井市大福遺跡に次ぐものである。さらに、今回の調査では、名東遺跡における過去の調査実績にない多大な成果を得ている。縄文時代晩期の大量の遺物出土、弥生時代の方形周溝墓群の検出、平安時代の大溝出土から出土した墨書き器・巨大掘形を持つ掘立柱建物の検出、鎌倉～室町時代の建物跡、土塙墓の検出にみる中世集落の確認が挙げられ、名東遺跡の様相解明に向けて非常に豊富な情報蓄積を得ている。

なお、調査成果の一部は、「第8・9・10回埋蔵文化財資料展—阿波を掘る—」において、出土遺物の公開展示を行い、また、昭和62年・63年度（昭和62年11月5日・昭和63年11月5日）の「文化財調査報告会」（主催は共に徳島市教育委員会）を開催し調査の概要報告を行っている。

III. 基本層序

調査地周辺の現地表面は、標高T.P.+8.4mを測り現代水田耕土層下に第1～5層が堆積する。以下、上位より概説する。

第1層：暗褐色砂礫混じりシルトで、層厚10cmである。近世陶磁器を包含する。

第2層：黄褐色砂礫混じりシルトで、層厚10～20cmである。弥生～中近世に至る遺物を包含しており、中世以降、広範囲での削平が考えられる。

第3層：黒色シルトで、層厚20～30cmである。調査地I・II区では、削平をうけ存在せず、調査地III区に見られる。

第4層：明黄褐色シルトで、層厚10cmである。第3層同様、調査地I・II区では、削平をうけ存在しない。

第5層：黄色シルト層であり、遺構検出のベースとなる。

IV. 検出遺構・出土遺物

今回の調査地は、現地表面が標高T.P.+8.4mを測り、名東遺跡の範囲内でも最も高所に位置する。現代水田耕土層下約30cmの黄色シルト層上面において、縄文時代～江戸時代に至る遺構、遺物を重複して検出している。以下、主な遺構、遺物について概説する。

1. 縄文時代晩期

徳島市域において縄文時代晩期の遺物検出が極めて希薄なため、その様相は全く不明とされる。昭和60年の庄遺跡における調査では、包含層における縄文時代晩期と弥生時代前

期の遺物共伴事例が確認されているものの、その後、良好な調査事例を見ていない。今回の調査における遺物出土量の豊富さは初見のものである。

(i) 不明落ち込み遺構

自然落ち込み遺構SX01（図3～5, PL-2, 3）

調査地区内で幅4m、長さ14m、深さ1.2mを測り、断面形が深い皿状を呈する溝状の自然落ち込み遺構である。SX01の下位置には砂礫層（図5-12層）の堆積が見られ、凹地を呈することから旧河道の存在が考えられる。この旧河道の埋没過程において、旧河道凹部にオーバーラップして自然堆積した明黄褐色系の極細砂～砂質シルト（図5-9, 10層）により形成された凹地に多量の遺物が集中して出土している。下位層には、多量の炭片を包含する堆積層（図5-8層）が見られる。

出土遺物には、深鉢（1～35, 37～41, 45～86）、浅鉢（88～98）、壺（36, 42～44, 87）、底部（99～109）、石鎌（110～118）、石錐（119～121）、石棒（123～125）、磨製石斧（122）、打製石斧（図版10）がある（図6～19, PL-4～10）。

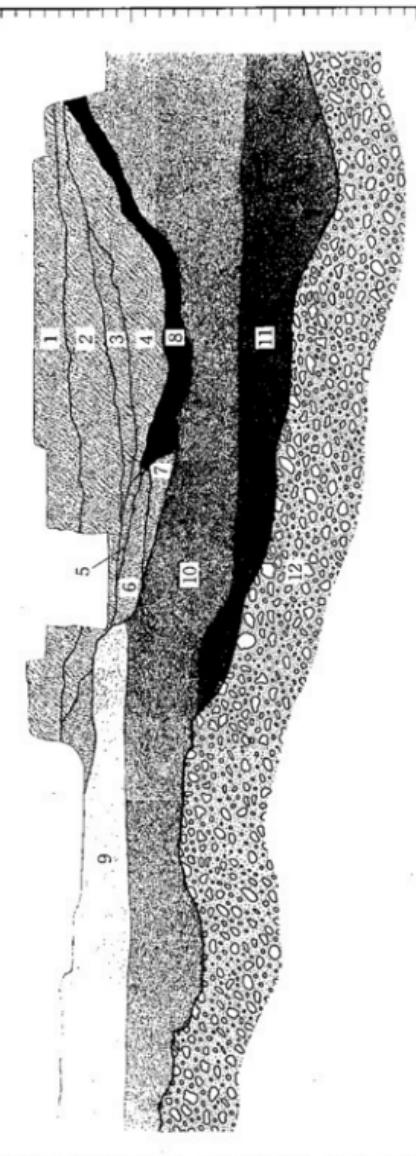
深鉢は、凸帯の条数、沈線の有無、プロモーションの相違により次の形態A～Dに細分が可能である。

形態Aは、1条凸帯のもので、最大径を胴部にもつもの（6, 51）。口縁部上端よりやや下がった位置に突帯を貼り付ける。頸部から胴部にかけての屈曲は明瞭であり、その最大径を肩部付近にもつ。突帯は上下から摘んで横方向のナデで貼り付けられ、断面形が▷形あるいは△形を呈する突帯に横長の0字もしくは0字の刻目を施す。胴部との境界を意識したためであろうか頸部には横方向のナデが施される。胴部上方にケズリは見られない。内面には横方向のケズリが施される。

形態Bは、2条凸帯をもつもの（45～48）。口縁部上端よりやや下がった位置と頸部から胴部にかけての屈曲する肩部のやや上位に突帯を貼り付け、最大径を肩部付近に持つ。突帯は上下から摘んで横方向のナデで貼り付けられており、断面形が▷形を呈する突帯には、横長の0字、小0字もしくはD字の刻目が施される。突帯に挟まれた外反する頸部には横方向のナデ、胴部上方には横方向のケズリが施される。

形態Cは、凸帯十沈線で構成されるもの（37～40）。口縁部上端よりやや下がった位置に突帯を貼り付け、頸部から胴部にかけての屈曲する肩部に1条の沈線が施される。突帯は上下から摘んで横方向のナデで貼り付けられ、断面形が▷形を呈する突帯には、横長の0字もしくは小0字の刻目が施される。突帯と沈線に挟まれた外反する頸部には、横方向の

T.P.+8.3m



T.P.+5.3m

※ 1~8がSX01埋土

T.P.+8.3m 1 にじい黄褐色砂質シルト

2 明黄褐色砂質シルト（炭片を含む）

3 明黄褐色シルト（炭片を含む）

4 灰黄褐色粘土質シルト

5 にじい黄褐色シルト質粘土

6 にじい黄褐色シルト

7 浅黄褐色シルト質粘土

T.P.+8.3m

8 明黄褐色～浅黄色極細砂～粘土質シルト（炭を多量に含む）

9 明黄褐色砂質シルト

10 明黄褐色極細砂～粘土質シルト（9→10への変化は漸移的）

11 黄褐色粘土質シルト（10→11への変化は漸移的）

12 灰色細砂～砂礫

図5 自然落ち込み過溝 SX01 断面土層図

ナデが施され、胴部は上方より横方向のケズリから縦方向のケズリに変化する。内面には横方向のケズリが施される。深鉢（86）は胴部片であるが、胴部上方に横方向のハケ状の原体が見られ頭部に文様を持つ。

形態Dは、1条凸帯のもので、最大径を口縁部にもつもの（29～32）。口縁部上端よりやや下がった位置に突帯を貼り付け、その最大径を口縁部にもつ。突帯は上下から摘んで

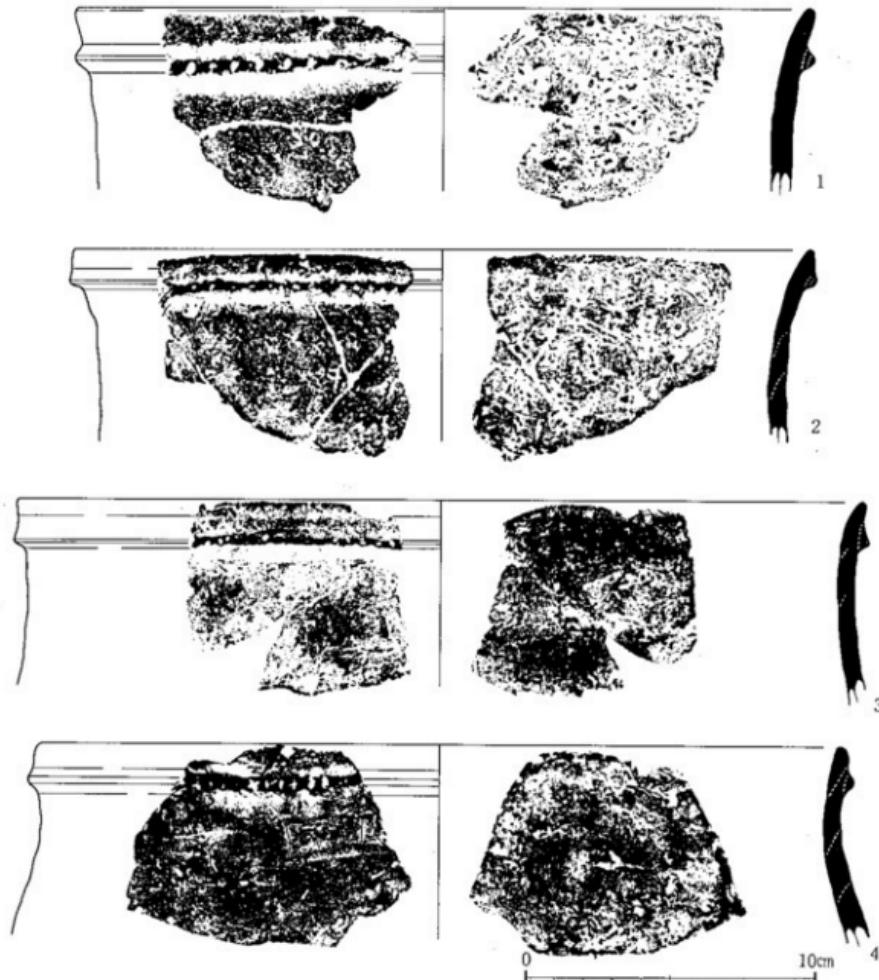


図6 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物 1:2



図7 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

1 : 4

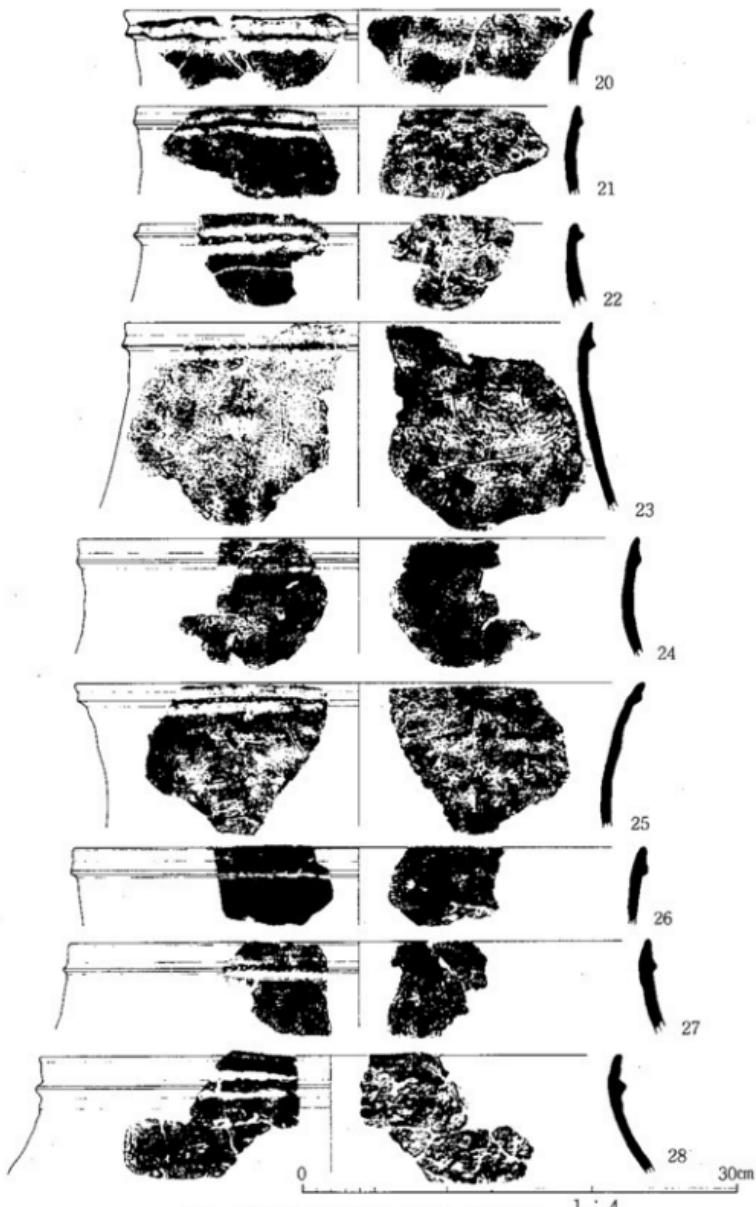


図8 自然落ち込み構造 SX01 出土遺物

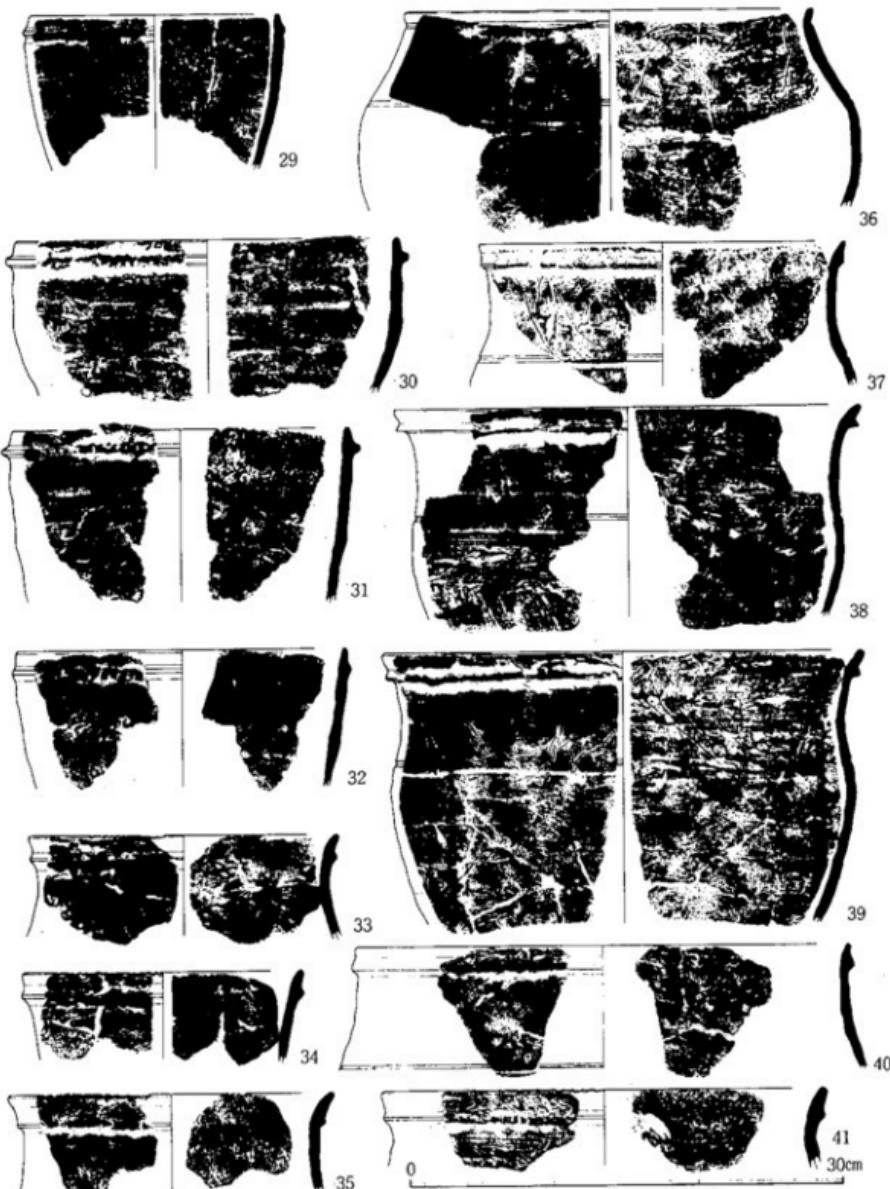


図 9 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

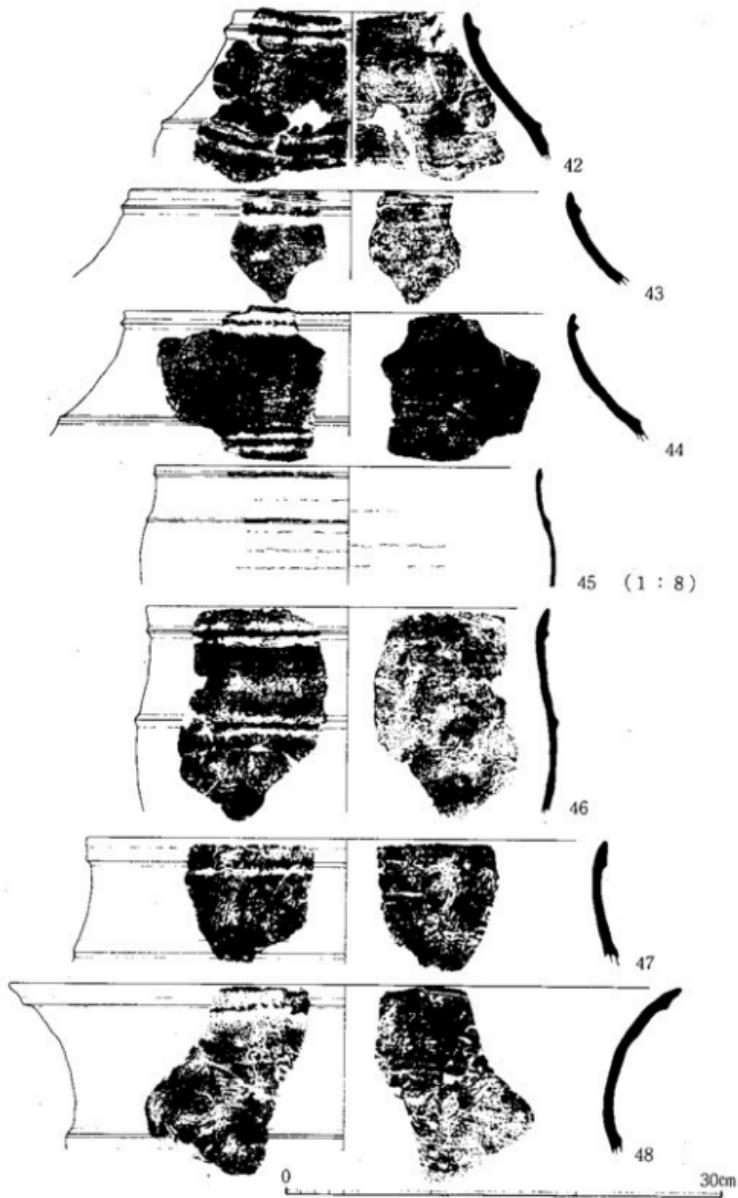


図10 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

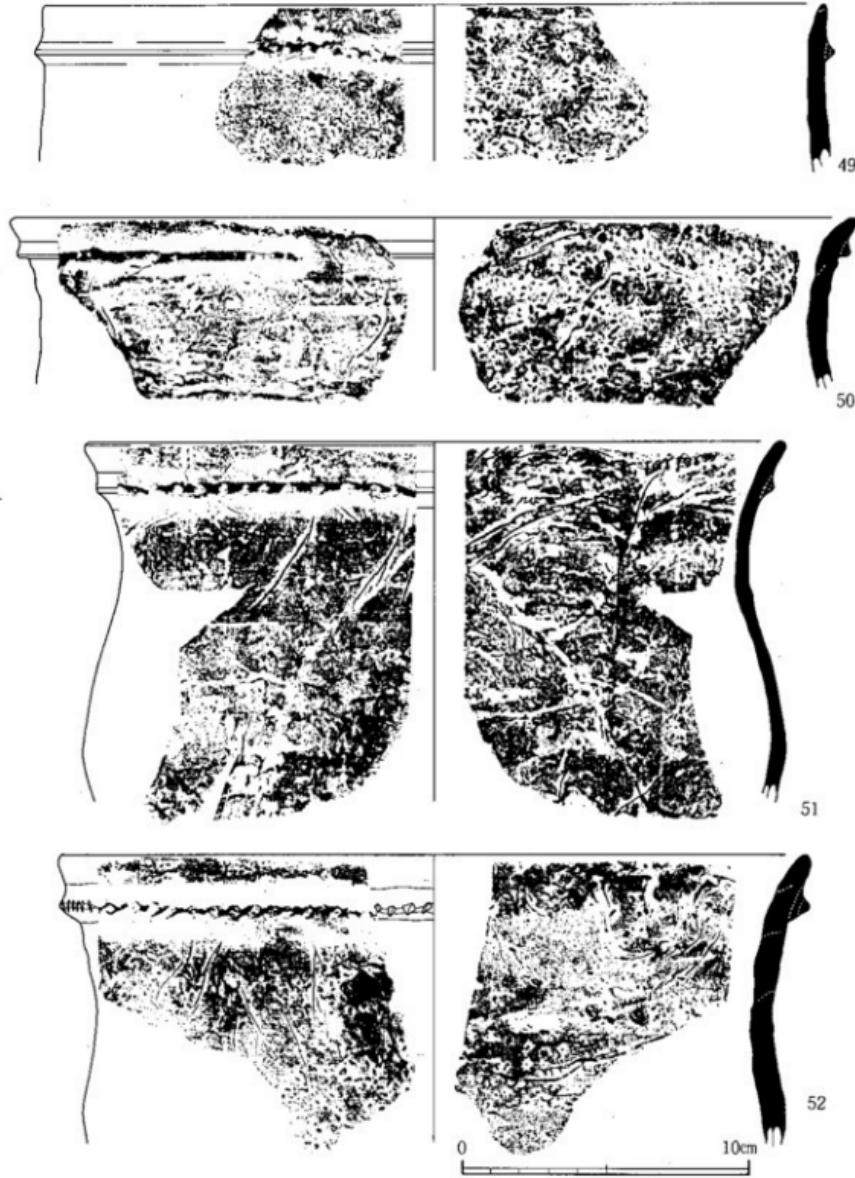


図11 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

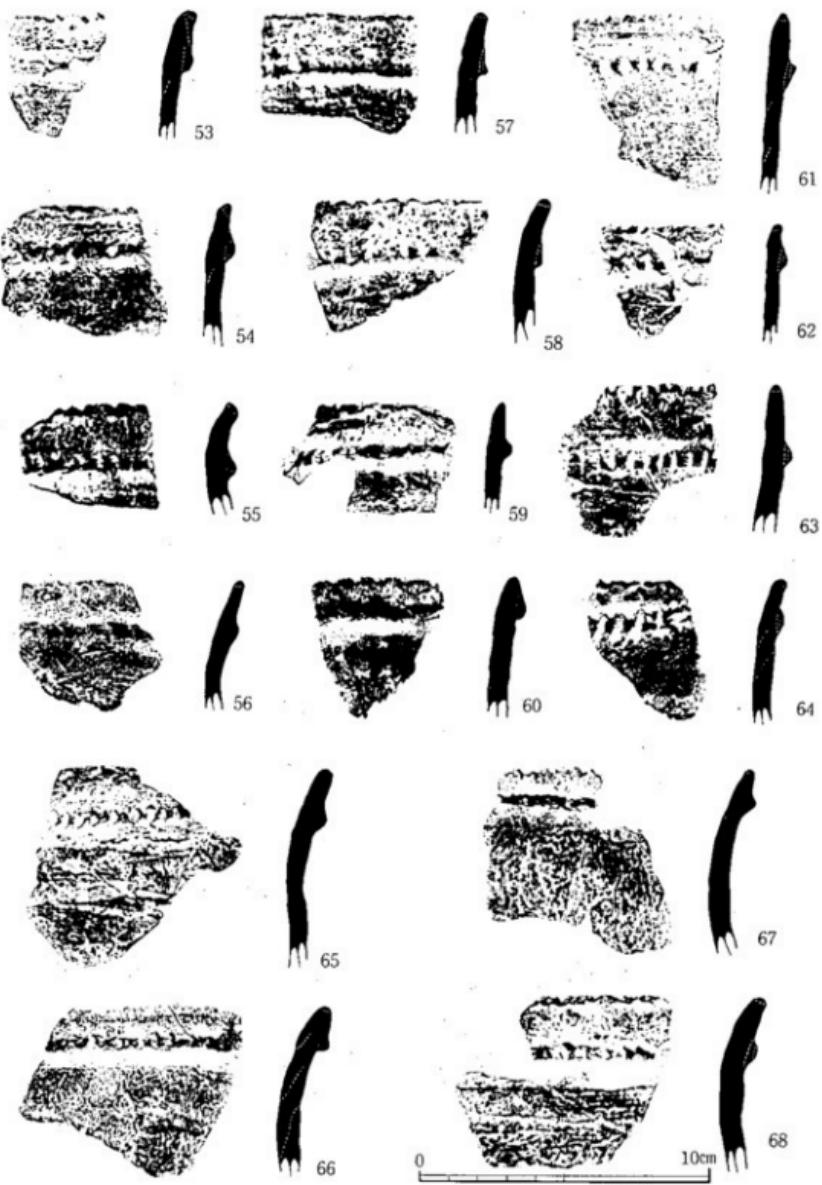


図12 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

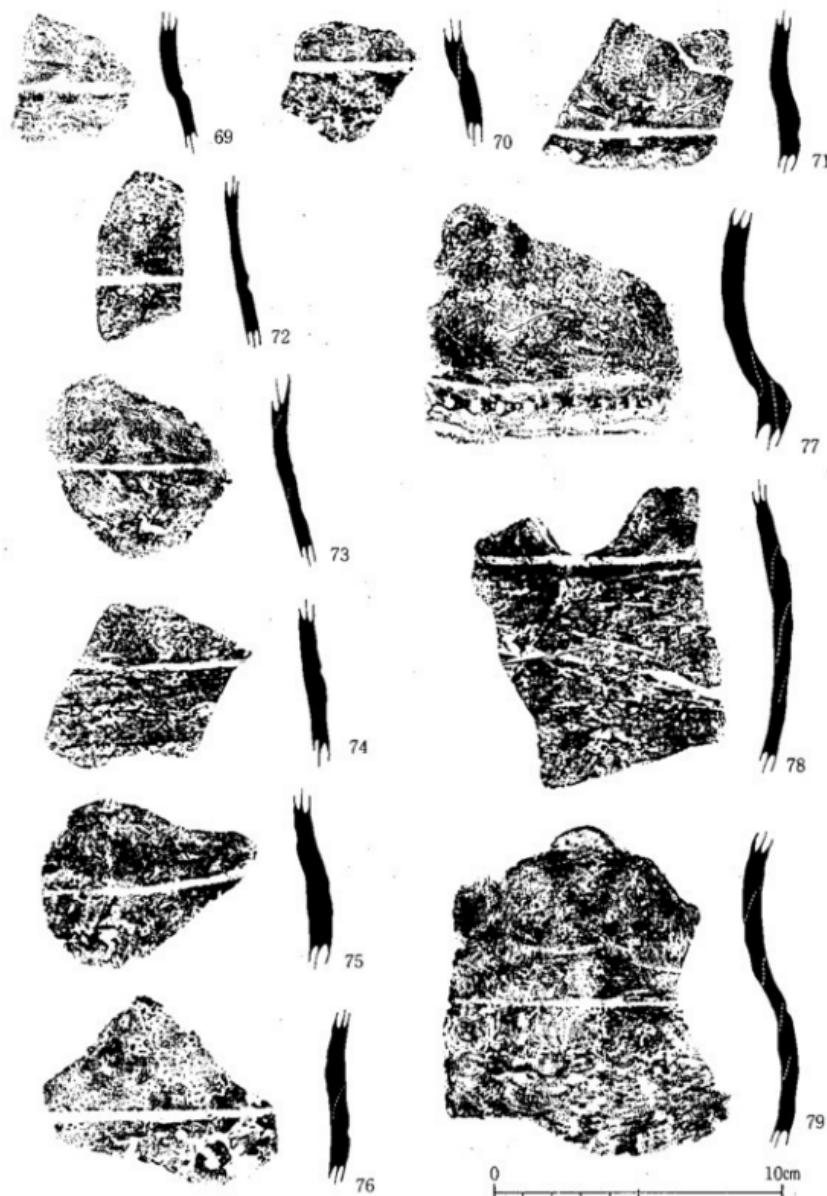


図13 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物



0 10cm

図14 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

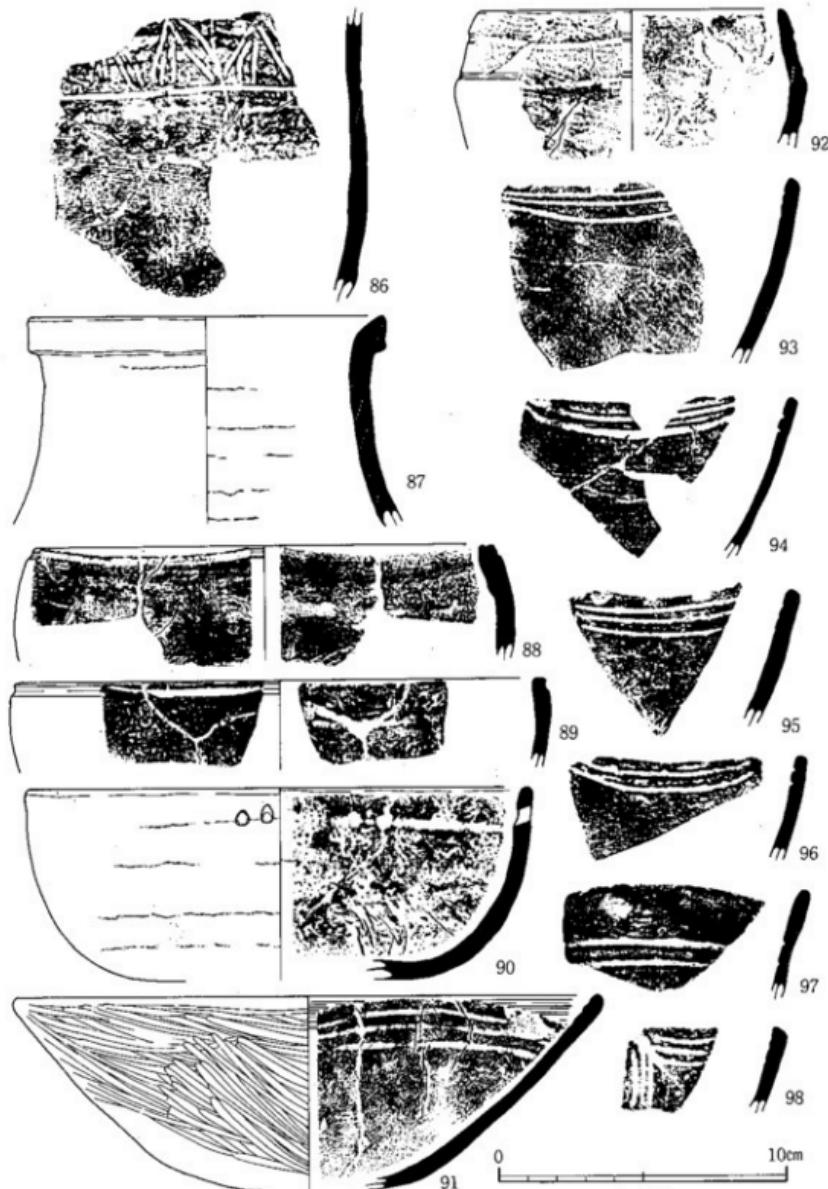


図15 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

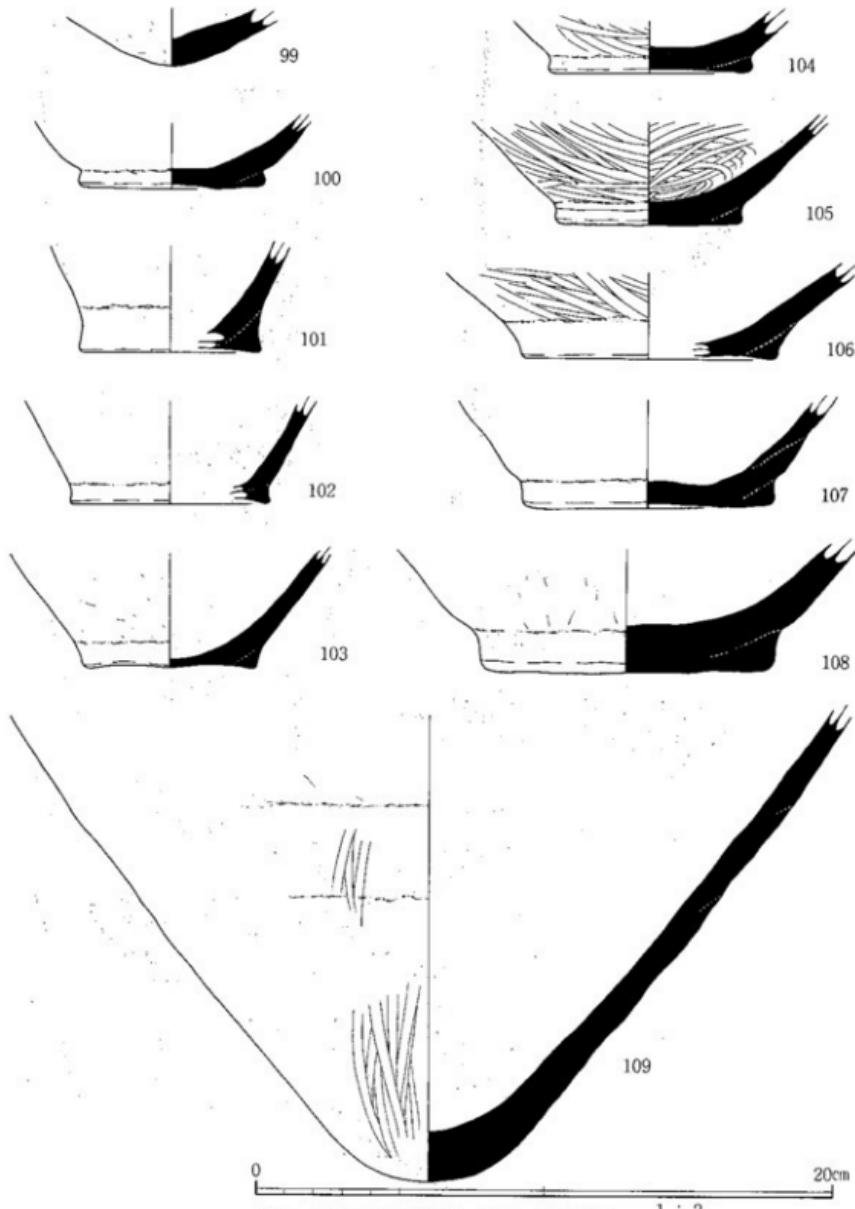


図16 自然落ち込み造構 SX01 出土遺物

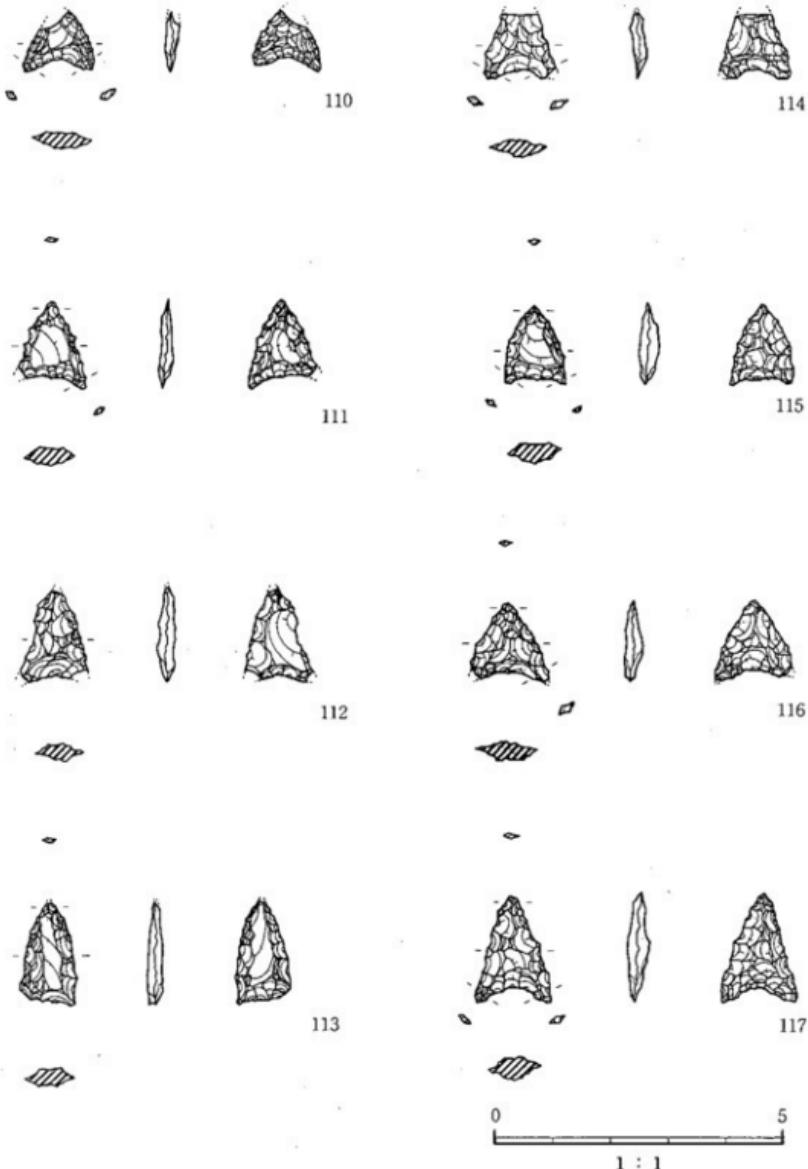


図17 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

横方向のナデで貼り付けられており、断面形が△形あるいは、D字形を呈する突帯に横長の0字もしくは0字の刻目が施される。内外面ともナデ調整である。

壺（42～44）は、口縁部上端よりやや下がった位置と内傾する頸部から胴部に至る肩部付近に突帯を持つ。突帯は上下から摘んで横方向のナデで貼り付けられており、断面形が△形の突帯に小0字もしくは0字の刻目が施される。突帯に挟まれた頸部には、横方向のナデが施され深鉢と同様の調整技法である。壺（42）には横方向のハケ状の原体が見られる。壺（36）は、口縁部上端よりやや下がった位置と内傾する頸部から胴部に至る肩部付近に沈線を持つ。沈線に挟まれた頸部には横方向のナデ調整、胴部はミガキが施される。壺（87）は、頸部がやや内傾気味に立ち上がり口縁部上端に断面形が△形を呈する無文突帯を持つ。内外面ともナデ調整である。

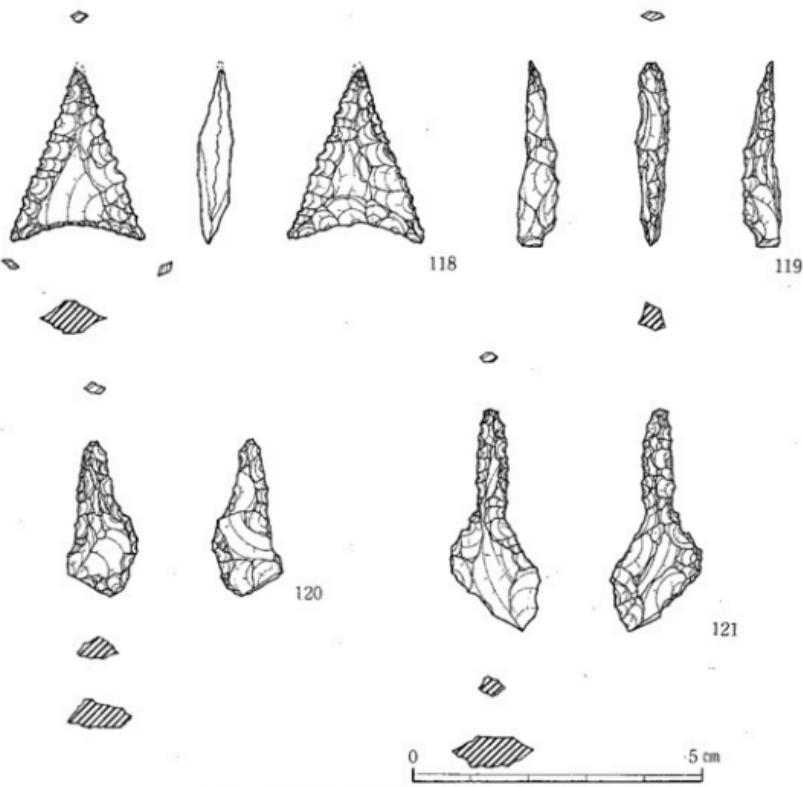


図18 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

1 : 1

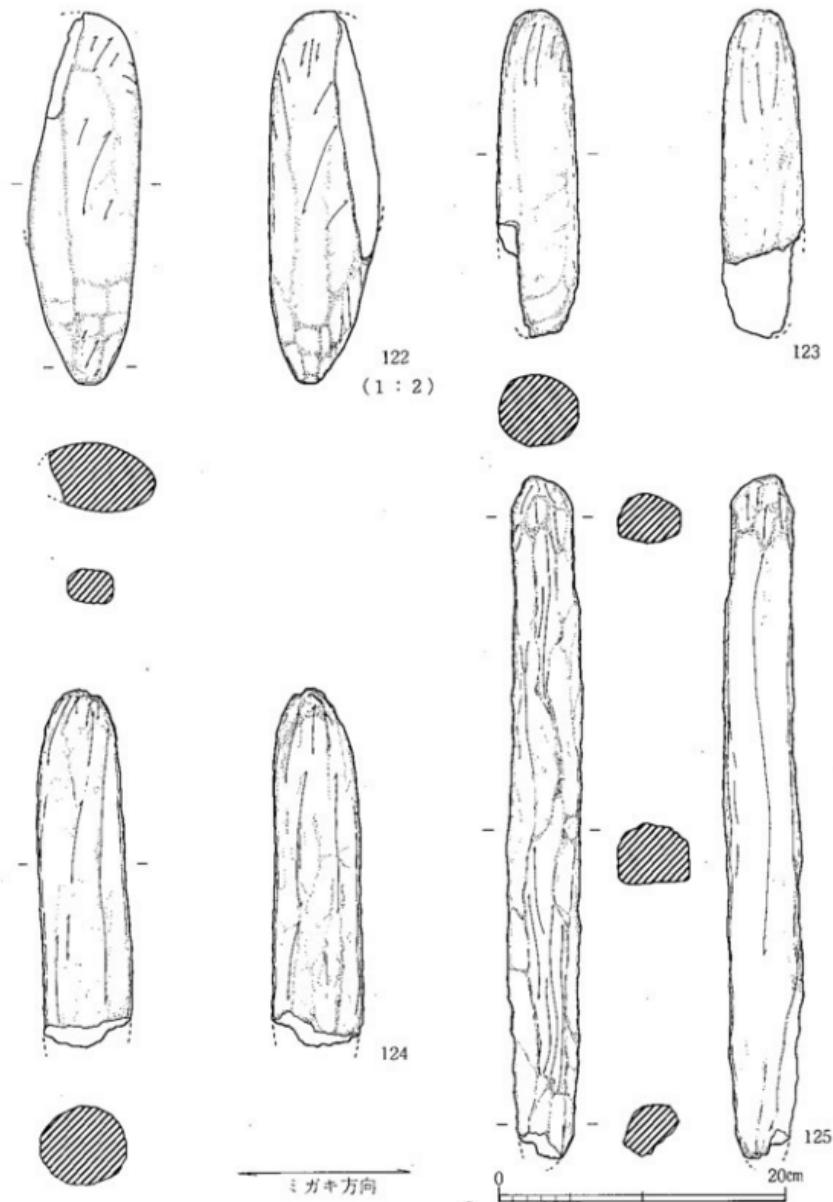


図19 自然落ち込み遺構 SX01 出土遺物

表1 自然落ち込み造構SX01出土石鎚観察表

番号	基部形	基部の細部調整	調整	中央 断面形	折損	原面	長 mm	幅 mm	厚 mm
110	極凹	薄両	片面	両凸	先	×	9.6	12.1	2.4
111	極凹	薄両	×	両凸	尖・脚	×	14.4	12.3	2.7
112	凹	薄両	片面	両凸	尖・脚	×	14.9	11.6	2.7
113	凹	薄表厚裏	×	両凸	尖・脚	×	17.2	9.8	2.6
114	極凹	薄両	両面	両凸	先・脚	×	10.9	12.4	2.8
115	極凹	薄両	片面	両凸	×	×	13.5	10.7	3.0
116	凹	薄両	両面	両凸	脚	×	13.6	13.3	2.8
117	極凹	薄両	両面	両凸	×	×	18.4	13.4	3.7
118	極凹	薄両	×	菱形	尖	×	29.2	23.0	5.5

表2 自然落ち込み造構SX01出土石錐観察表

番号	整形	尖り方	尖端部			長 mm	幅 mm	厚 mm
			断面形	両縁形	連続度			
119	表極裏厚	鈍	平凸	直+凹	2/3	24.9	12.4	4.9
120	両薄	鈍	平凸	凹+凸	1/2	30.9	5.4	6.3
121	表極裏厚	鈍	両凸	直+直	2/3	38.2	16.1	5.5

鉢（88,89）は、口縁部上端よりやや下がった位置に（92）は、胸部に沈線が施される。外面上方はミガキ、内面はナデ調整である。鉢（91）は皿状の鉢である。内面口縁部上端より下がった位置に2条の沈線が施される。外面ミガキ、内面はナデ調整である。鉢（90）は椀状の鉢である。内面口縁部上端より下がった位置に2条の沈線が施される。外面体部に楕円形の形跡が見られる。鉢（93～98）は、口縁部の平面形が方形である。⁽⁹⁾ 兵庫県伊丹市口酒井遺跡出土の山形状口縁の浅鉢と同形態である。内面に2～3条の沈線をもつ。内外面ともにナデ調整である。

底部（109）は尖底気味の丸底であり、外面にケズリが施される。底部（99）は典型的丸底底部であり、外面にケズリが施される。底部（100～108）は平底を呈する。（100～102,104,105）は側面が張り出す。（104）は内面ナデ調整、外面ミガキが施される。（105）は内外面ともにミガキが施される。（103,106,107,108）は底部側面からゆるやかに外反し立ち上がる。外面ケズリ、内面ナデ調整である。

石鎧は、9点出土している。石材はすべてサスカイトである。最大長20mm以下が主であり、（118）は例外的な大きさを示す。長さと幅の相関関係において、長幅指数0.9～1.3に属し、平面形態はほぼ正三角形を呈するものが多く見られる。厚さは、24～30mmのものが多く全体に均整のとれた形態を示す。基部形は凹形あるいは極凹形を呈し、基部を作り出す細部調整には薄形両面細部調整の割合が圧倒的に高い。調整技術には、片面あるいは両面細部調整が使用されるが、調整を施さないものが3点ある。⁽⁹⁾

石棒（123～125）は石材は緑色片岩であり、上端部を研磨により丸く仕上げる。（123）の基部は欠損後に再加工したものであろうか。

磨製石斧（122）は石材は藍閃片岩であり、両刃石斧である。刃部に対して、基部が研磨により尖形に仕上げられる。縄文時代晩期の典型的な形態を示すものであろう。

2. 弥生時代

（Ⅰ）方形周溝墓（図3, 4）

今回の調査において、方形周溝墓を6基検出している。徳島市域における方形周溝墓の墓域群としての検出例は初見のものである。

1号方形周溝墓（図20,24,28,29, PL-11,12,22,23）

調査地内において、方形周溝墓の南西部を検出している。平面形が長方形を呈し、調査地内における最大長は12mを測る。周溝は最大幅が1.4m、最深部0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色砂質シルトである。墳丘盛土及び埋葬施設は認められない。

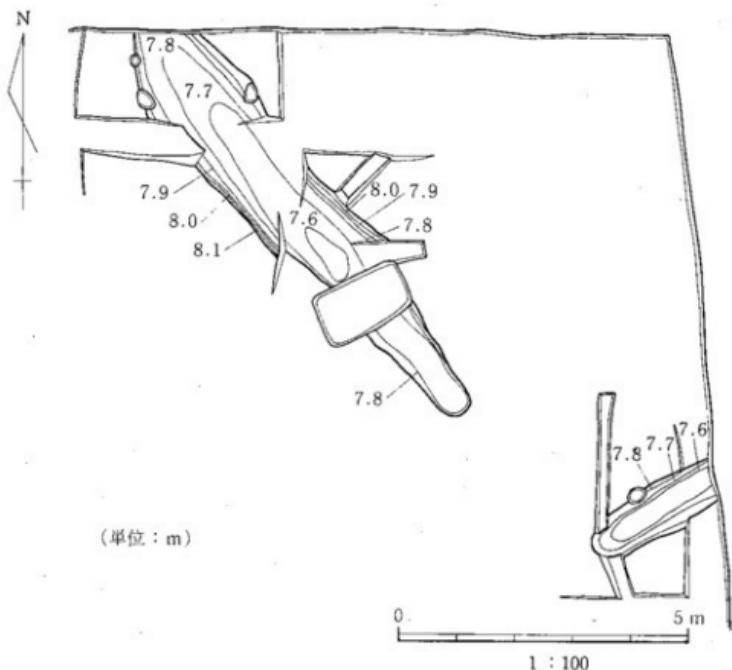


図20 1号方形周溝墓

西周溝より高杯（144）、南周溝より壺（140）、凸基有茎石鏡（147）、区画外の土器埋納土壙SK13より壺（136）が出土している。

高杯（144）は、脚端部を上方に拡張し脚端面に凹線文を施す。脚柱部外面には縦方向のヘラミガキ後、8条1組の細い沈線を2組巡らす。柱状部と裾部の境に円形透しを7孔もうける。壺（140）は、ゆるやかに外反気味に立ち上がり口縁部付近でわずかに内湾する。口縁端部を左右に拡張し、端部上面は平坦面を呈する。口縁部直下に1条、やや下がった位置に1条の凹線文を巡らし、頸部屈曲部直上に刺突文を施す。外面頭部～体部にかけて縦方向のハケ調整後、体部下位1/2に縦方向のヘラミガキが施される。壺（136）は、丸味を持つ体部上半には縦方向のハケ調整、下半には縦方向のヘラミガキが施される。体部上半に櫛描直線文と櫛描波状文が施される。頭部以上が欠損している。意識的な打ち欠きであろうか。

2号方形周溝墓（図21,22,29, PL-13~15, 21~23）

平面形は最大長13.5m、最大幅4.5mの長方形を呈し、周溝は最大長10.5m、最大幅2.1m、

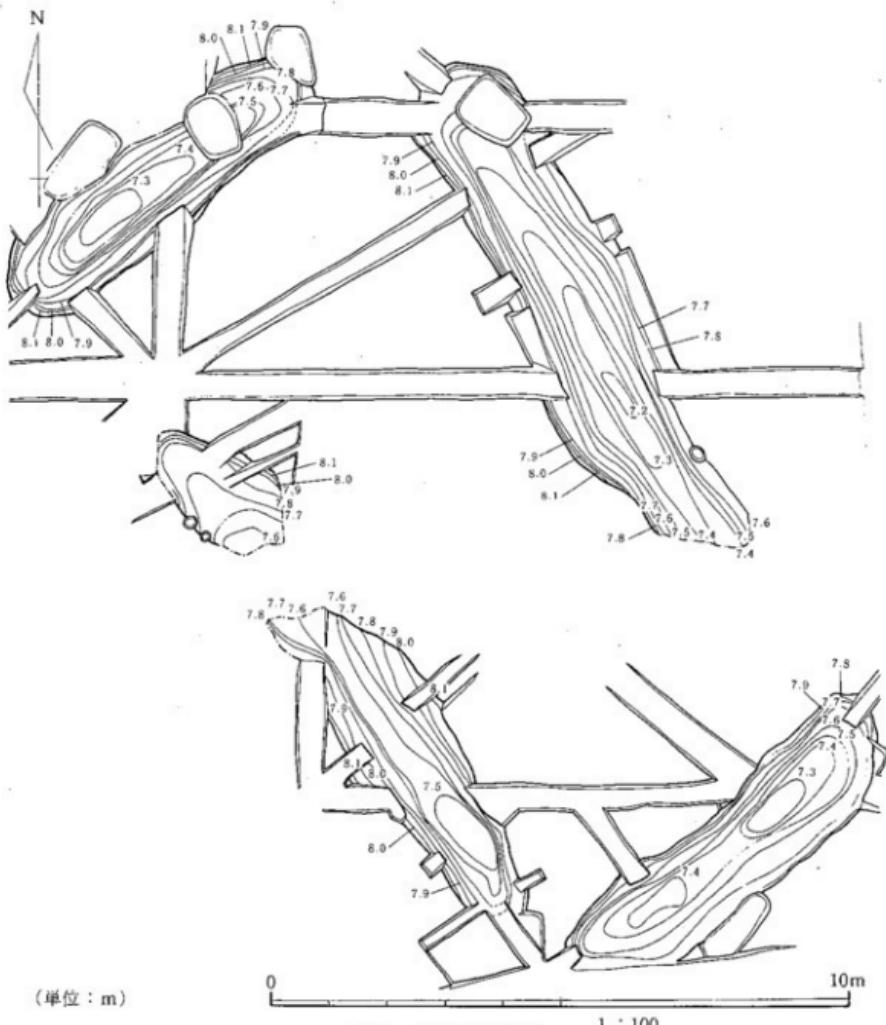


図21 2号方形周溝墓

最深部0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色シルトである。墳丘盛土及び埋葬施設は認められない。西周溝より台付鉢（130）、水差し形（132）、甕（131）、南周溝より壺（126）、凸基有茎石鏡（150,151）、凹基無茎石鏡（148）、東周溝より高杯（129）、凹基無茎石鏡（149）が出土している。また、北西陸橋部土器埋納土壙SK11より壺（128）、

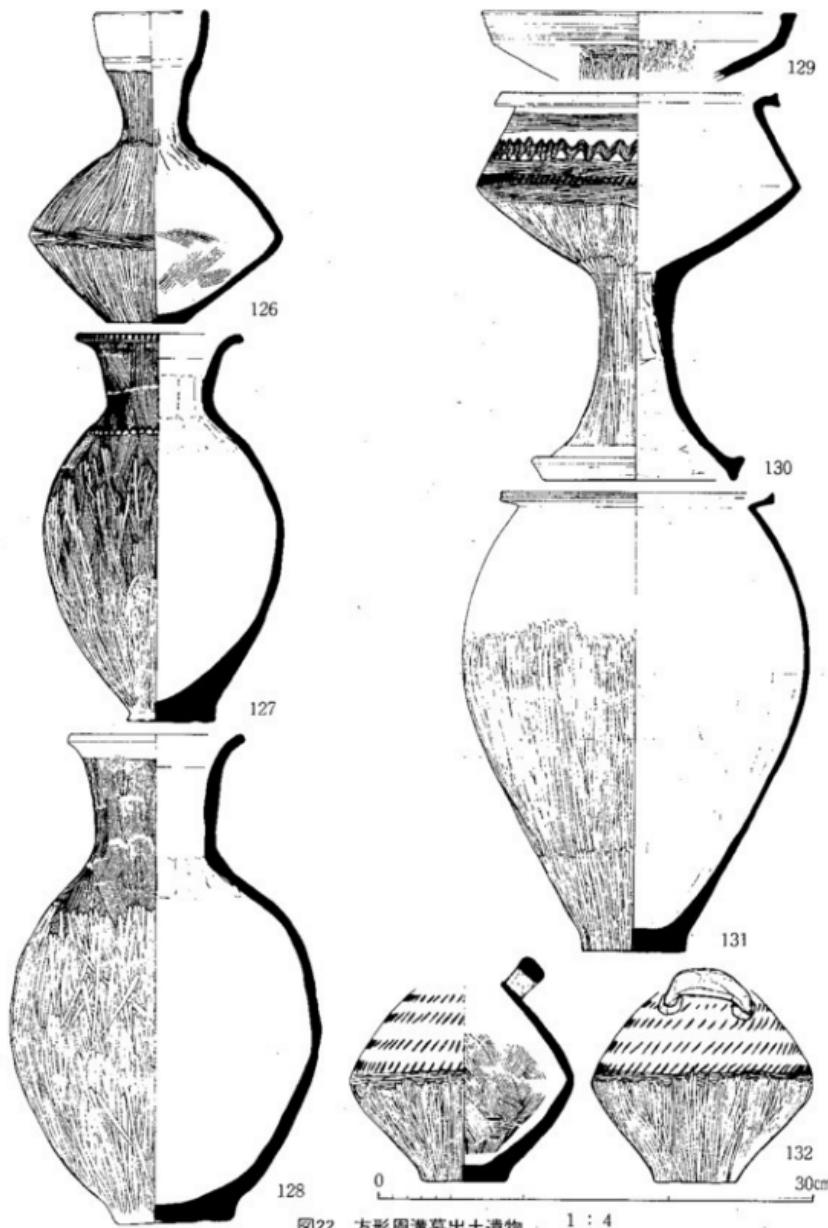


図22 方形周溝墓出土遺物

1 : 4

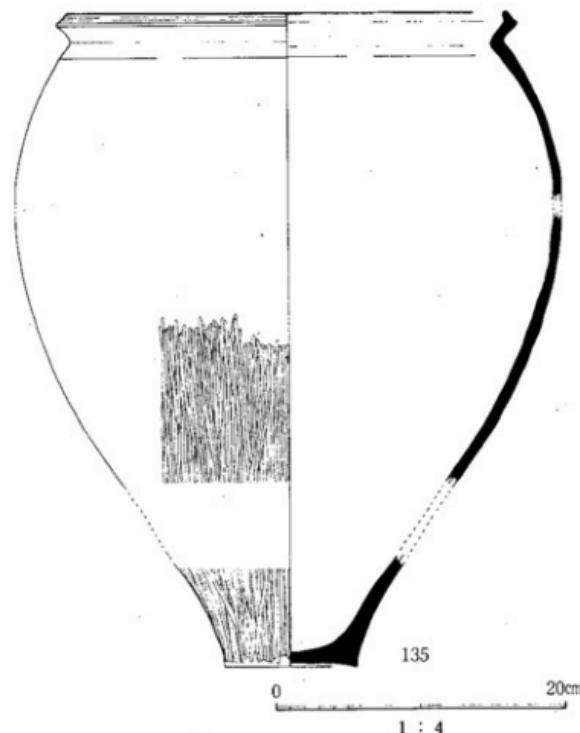
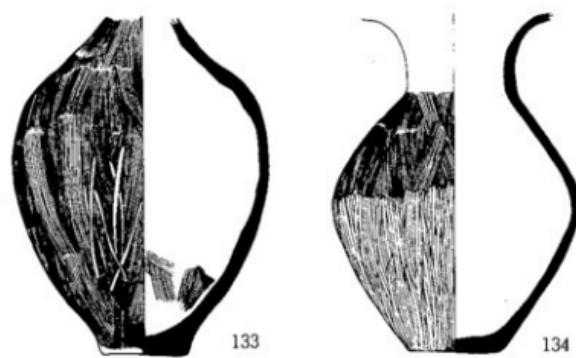


图23 方形周溝墓出土遗物

区画内土器埋納土壙SK10より壺(127)が出土している。

壺(126)は、頸部はゆるやかに外反し、凹線を1条配し、内弯気味に立ち上がる口縁部を持つ。体部はソロバン玉形を呈し、体部上半～下半への屈曲は強い。体部外面は縦十横方向のヘラミガキが施される。壺(127)は、頸部はゆるやかに外反し、端部付近でさらに外反させる。口唇部には、刻目を施し頸部屈曲部直下に刺突文を施す。体部外面は縦方向のハケ調整後、縦方向のヘラミガキが施される。壺(128)は、頸部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で外反する。口唇部は面取り気味である。頸部に縦方向のハケ調整後、口縁部を横方向のナデにより仕上げる。体部は縦方向のヘラミガキが施される。台付鉢(130)は、鉢部下半が内弯気味に立ち上がり、ほぼ90度屈曲し、体部上半は直線的に伸び上がり、短く外反する口縁部に至る。口縁端部は上下に拡張し、端面に凹線文が施される。鉢部上半には、柳描直線文・柳描波状文・刺突文が施される。脚台据部を上下に拡張し、端面に凹線が巡る。外面は縦十横方向のヘラミガキが施される。鉢底部の穿孔土器である。甕(131)は、口縁部が「く」の字状に大きく外反し、口縁端部を上方に拡張させ、口縁端面に凹線文を巡らす。体部外面は縦方向のヘラミガキ、体部内面は縦方向のヘラケ

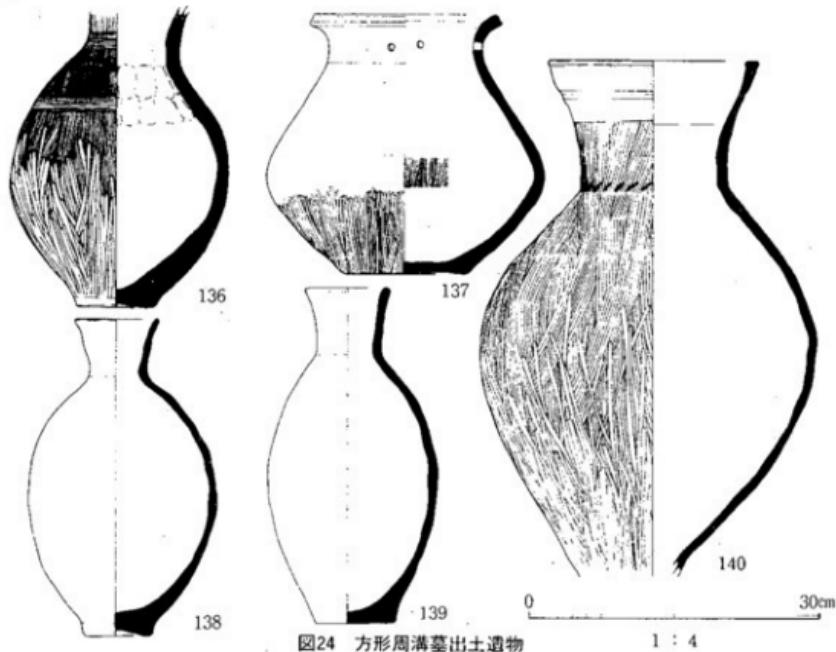


図24 方形周溝墓出土遺物

ズリが施される。水差し形（132）は、ソロバン玉形の体部を持ち、頸部以上を欠損する。肩部に横方向の半環状把手を付ける。体部外面屈曲部に横方向のヘラミガキ、体部外面下位には縦方向のヘラミガキが施され、体部外面上半に刺突文が施される。体部内面はハケ調整が施される。

高坏（129）は、坏部はゆるやかに立ち上がり口縁部は短く斜方向に立ち上がる。口縁部直下に3条の凹線を配し、口縁上端部を左右に肥厚させる。体部内外面は縦+横方向のヘラミガキが施される。

3号方形周溝墓（図22,25, PL-16,17,24）

最大長11.5m、最大幅9.3mの平面形が長方形を呈し、周溝は最大長10.5m、最大幅1.9m、最深部0.8mを測り断面形は逆台形は呈する。埋土は黄灰色シルトである。墳丘盛土及び埋葬施設は認められない。北周溝より甕（135）、南周溝より壺（134）、区画内の土器埋納土壤SK12より壺（133）が出土している。

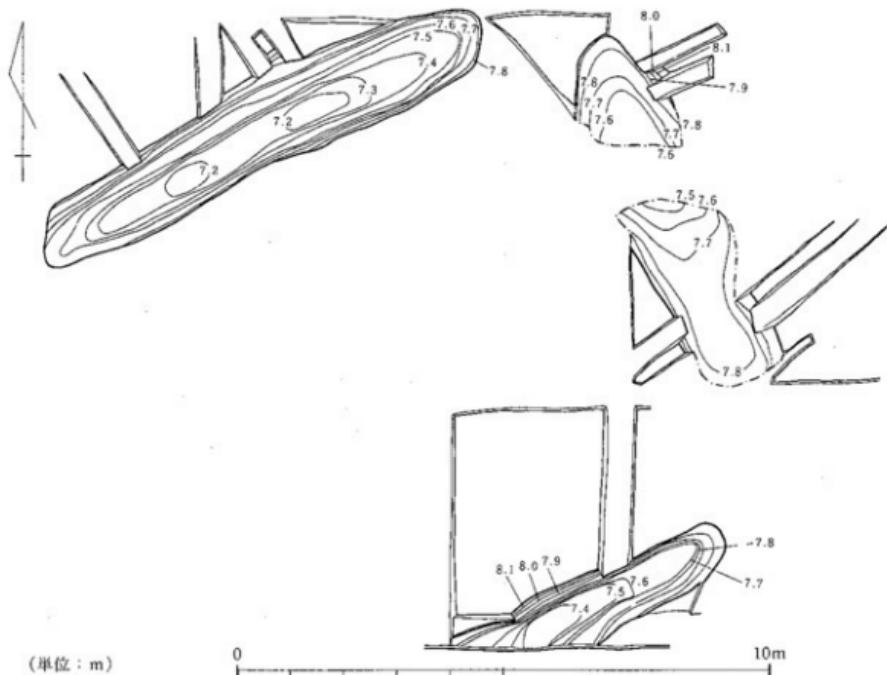


図25 3号方形周溝墓

壺(135)は、「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、端部を上方に突出させる。口縁端面には、凹線文を施す。表面が磨滅氣味で明瞭ではないが、下半部に縱方向のヘラミガキが見られる。壺(134)は、体部中央で鈍い屈曲を示し、短く直立する頸部から大きく外反する口縁部を持つ。体部外面上半は縱方向のハケ調整、体部外面下位は縱方向のヘラミガキが施される。体部は完形ながら口縁部が欠損する。意識的な打ち欠きが行われたのであろうか。壺(133)は、体部外面に縱方向のハケ調整が施された後、単発的に縱方向のヘラミガキが施される。底部内面にハケ調整を受ける。頸部以上を完全に欠損している。

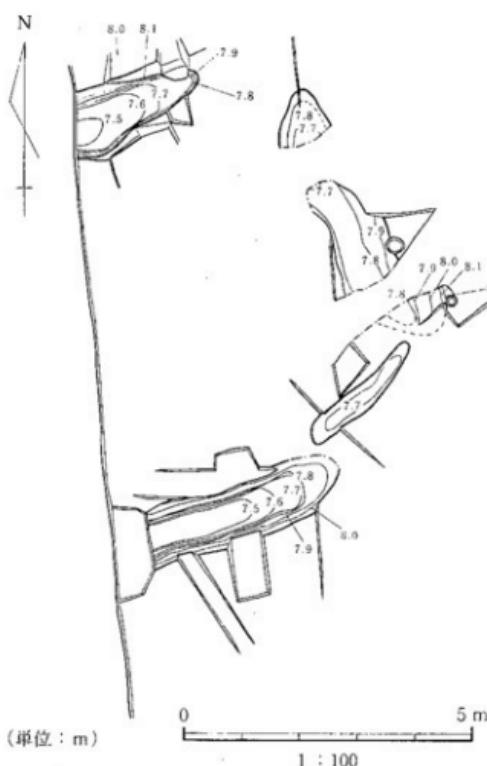


図26 4号方形周溝墓

臺（134）同様、意識的な打ち欠きが行われたのであろうか。

4号方形周溝墓(図24,26,28~30, PL-17,22,24)

調査地内において、方形周溝墓の東部を検出している。推定最大長9.5m、最大幅6mの平面形が長方形を呈し、周溝は最大長8m、最大幅1.3m、最深部0.6mを測り、断面形が逆台形を呈する。埋土は暗黄灰色シルトである。墳丘盛土及び埋葬施設は認められない。北周溝より甕(143)、壺(137, 145, 146)、凸基有茎石罐(152, 153)、西周溝より凹基無茎石罐(154, 156)が出土している。

甕(143)は、口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端面は直立し凹面を呈する。体部外面は、縱方向のヘラミガキ、体部内面はヘラケズリが施される。壺(137)

は、ソロバン形の体部に短く外反する口縁部を持つ。体部外面下位に縱方向のヘラミガキ、体部内面にハケ調整が施される。頸部に円形透しをもうける。壺(145)は、口頸部は大

きく外反し、口縁端部を下方に拡張する。口縁端面に3条の凹線文を巡らせ、櫛描文と円形浮文とを組み合わせ施文する。頸部外面は縦方向のハケ調整が施される。口縁部内面にも櫛描文と円形浮文とを組み合わせた施文方法がとられる。壺(146)は、ゆるやかに外反する頸部から大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張させ、口縁端面に3条の凹線文と棒状浮文を施文する。頸部外面下位に断面三角形を呈する3条の突帯を貼り付ける。頸部外面は縦方向のハケ、頸部内面は横方向のヘラミガキが施される。

5号方形周溝墓(図27,30, PL-18,22)

一辺5mの平面形が方形を呈し、周溝は最大長5m、最大幅1.6m、最深部0.5mを測り、断面形が逆台形を呈する。埋土は淡黄灰色シルトである。墳丘盛土は認められないが、区画内中央部に長辺2m、短辺0.7mの平面形が長方形を呈し、深さ0.2mを測る土壤を検出している。両短辺部に溝状の落ち込みが見られることから、小口板の埋設部と考えられ、木棺施設が想定される。東周溝より凸基有茎石罐(155)が出土している。

6号方形周溝墓(図27,24,28, PL-19,20,24)

セクション断面において確認された周溝墓であり、東周溝を検出している。大部分が調査地外に広がるため、平面形は明確ではない。東周溝は、長さ6m、幅1.8m、深さ0.3mを測る。周溝より、壺(138,139)、ミニチュア壺(141)、ミニチュア鉢(142)が出土している。

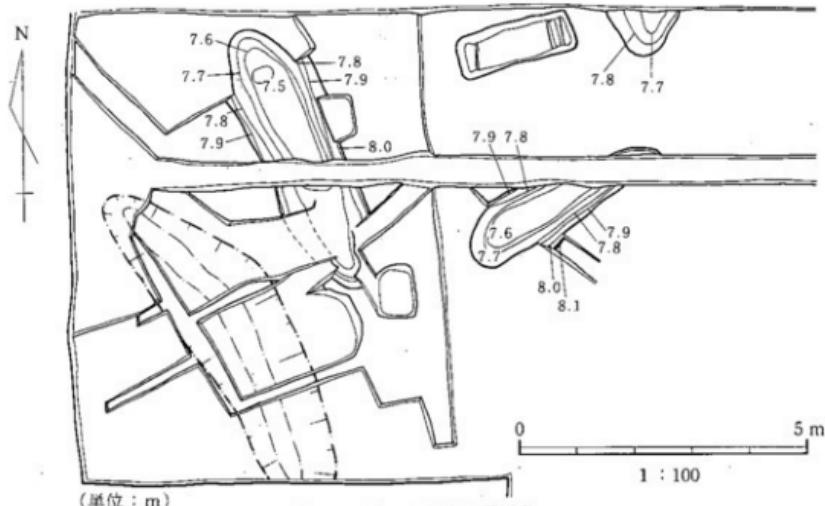


図27 5号・6号方形周溝墓

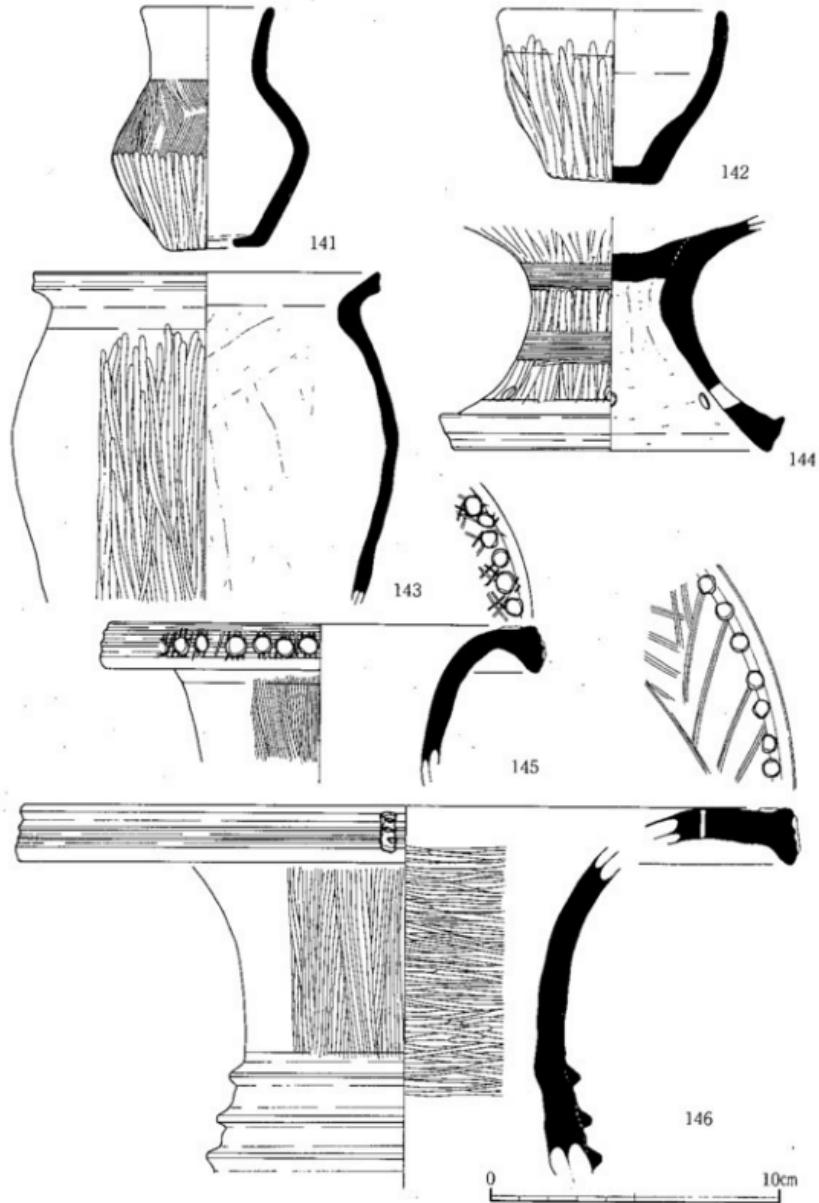


図28 方形周溝墓出土遺物

1 : 2

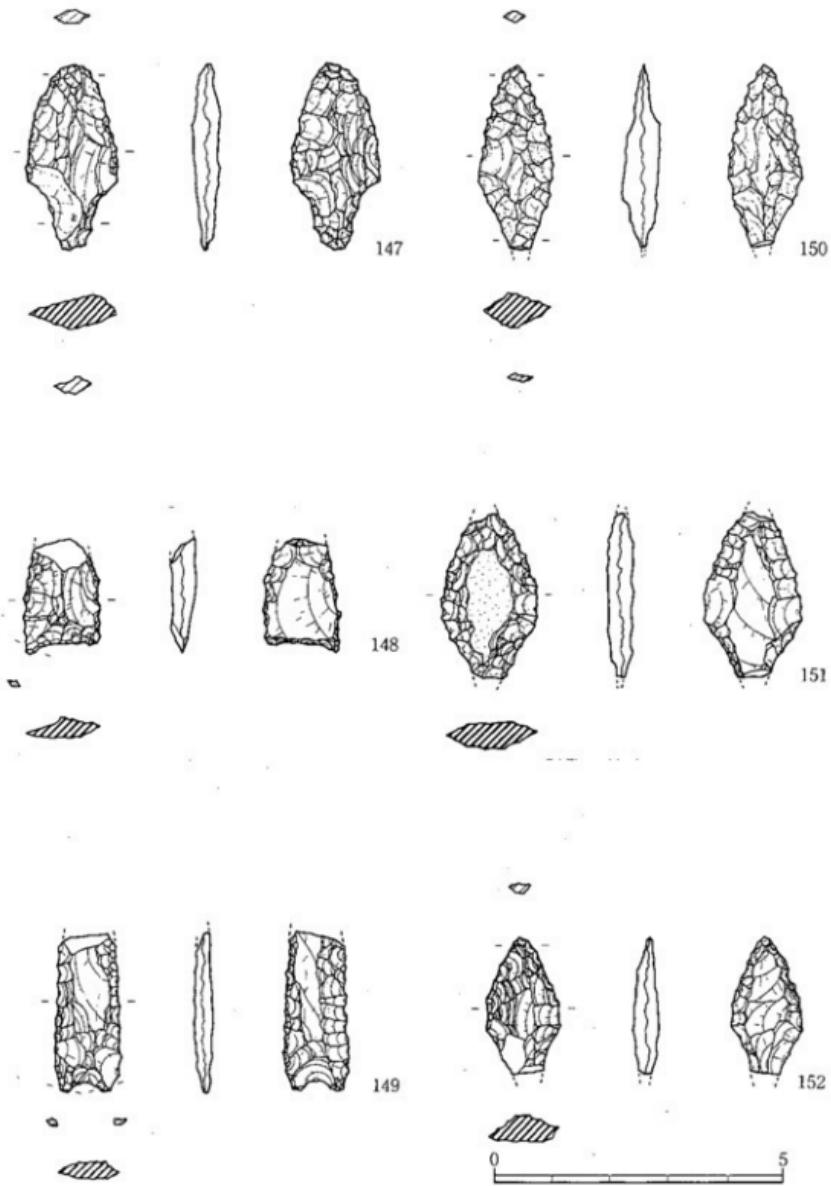


图29 方形周溝墓出土遗物

壺（138）は、卵形の体部にゆるやかに短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は丸みを持ち、底部外面中央は、凹面を呈する。内外面ともナデ調整で仕上げる。壺（139）は、卵形の体部に斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は面取る。内外面ともにナデ調整で仕上げる。ミニチュア壺（141）は、ソロバン形の体部を呈し、ゆるやかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。体部外面上半は縦方向のハケ調整、下半は、縦方向のヘラミガキが施される。底部穿孔土器である。ミニチュア鉢（142）は、体部は外反気味に立ち上がり、直立する口縁部を持つ。外面に、縦方向のヘラミガキが施された後、口縁部に横方向の強いナデが施される。

方形周溝墓から石鏃が10点出土している。基部形が凹形あるいは極凹形を呈するものが

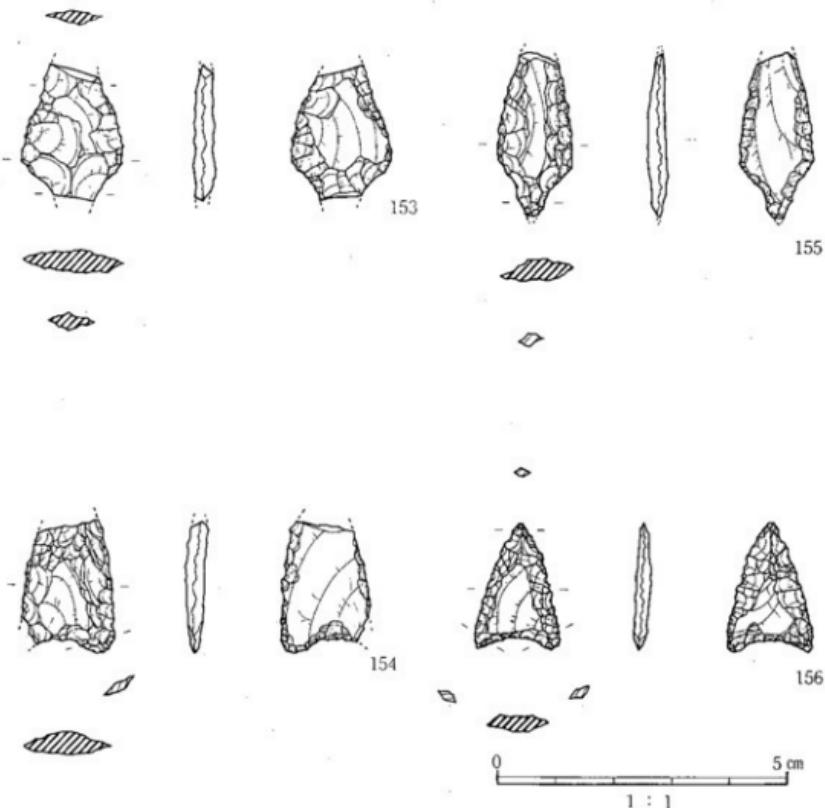


図30 方形周溝墓出土遺物

4点見られ、最大長が20mm以上が主となる。基部の細部調整には、薄形両面細部調整が施される割合が高い。また、調整が施されないものが6点認められる。調整を施さない石鎚の比率が縄文時代晩期の石鎚と比較して高まる傾向がある。

表3 方形周溝墓出土石鎚観察表

番号	基部形	基部の細部調整	調整	中央断面形	折損	原面	長mm	幅mm	厚mm
147	凸	薄両	両面	両凸	×	×	31.4	15.6	5.5
148	極凹	薄両	片面	三角形	先	×	19.4	13.8	4.0
149	凹	薄両	×	平凸	先	×	27.3	11.4	3.5
150	凸	薄両	両面	菱形	基	×	31.1	13.3	6.2
151	凸	—	×	両凸	先・基	○	28.2	16.8	4.0
152	凸	—	片面	三角形	基	×	23.7	12.4	4.3
153	—	—	×	平凸	先・基	×	23.2	17.3	3.8
154	極凹	薄両	×	平凸	先・脚	×	22.5	16.3	3.8
155	凸	薄両	×	平凸	先	×	27.6	12.9	3.6
156	極凹	薄両	×	台形	脚	×	21.4	14.6	2.7

(ii) 銅鐸埋納土壙SK01(図31,32, PL-25~29)

長辺60cm, 短辺35cmの平面形が不整長方形を呈し、深さ30cmを測る。北東隅部が後世の遺構により破壊される。扁平鉗式6区画袈裟縄文銅鐸1個が出土している。土壙埋土は、次の1~5層に細分される。1層：暗灰黄色極細砂～シルト。2層：淡黄色シルト。3層：淡黄色砂質シルトに淡黄色極細砂がブロックで混在する。4層：淡黄色砂質シルトに黄灰色が混在する。5層：灰黄色極細砂～シルト。

銅鐸は扁平鉗式6区画袈裟縄文銅鐸である。(図39,40, PL-30~33)。鐸高39.3cm, 鐸身高29.1cm, 鈕高10.2cm, 鈕幅6.2cm, 鈕孔高3.9cm, 鈕孔幅5.3cm, 舞長径12.8cm, 舞

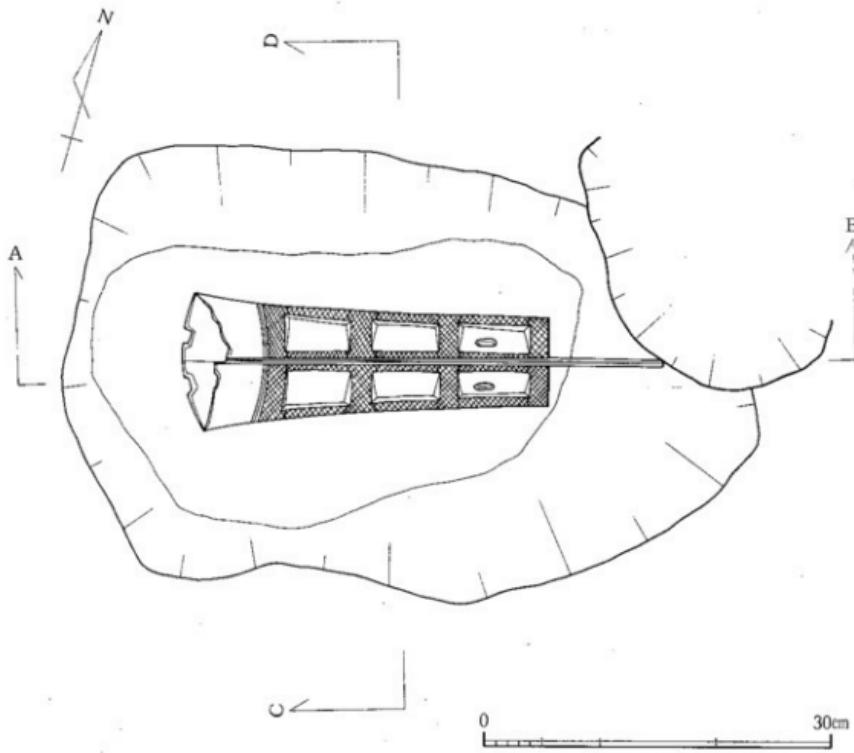


図31 土壤 SK01 銅鐸出土状況平面図

1 : 5

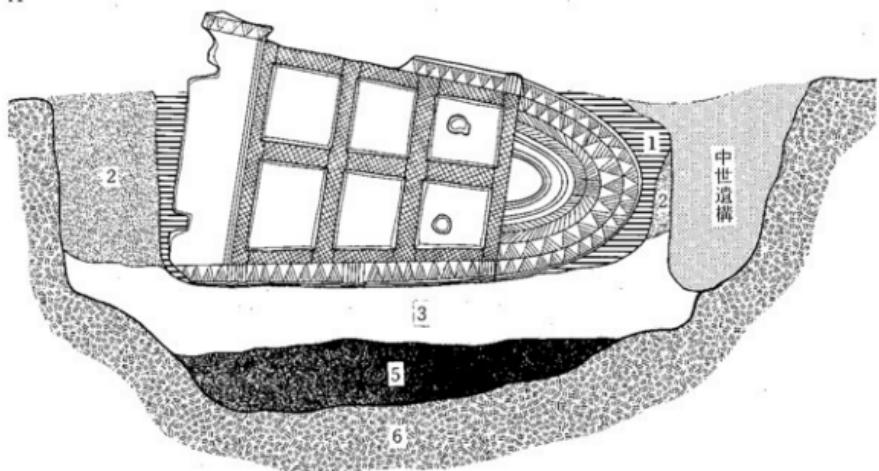
短径6.2cm、底長径19.3cm、底短径9.8cm、高さ6.8cmを測る。

鉢部の紋様構成は、基本的に外縁第1、第2紋様帶には複線鋸歯紋、菱環に綾杉紋、内縁紋様帶は無紋である。外縁第1紋様帶には23単位「R」方向の複線鋸歯紋、第2紋様帶には22単位「R」方向の複線鋸歯紋が施される。菱環の綾杉紋は上向きの山形を呈する。鐘部には、外縁第1紋様の連続で複線鋸歯紋が施され、鐘部外縁には細い1条突線の輪郭線が引かれる。また、2組1対の飾耳が左右鐘部に3対附される。飾耳部には身部に対し10条の横突線が鐘部を横切り、鐸身と一体化しており、「突線紐式」に見られるような飾耳の独立は認められない。鐸身部の6区画は研磨により約1mm没する。横帶の区画突線には細い1条突線が用いられ、また、B面の左上区画右下隅部に縦帶の区画突線が一部残存している。縦帶区画突線は横帶区画突線を切ることはない。鉢部は第4横帯直下の2条

A

T.P. + 8.3m

B



C

T.P. + 8.3m

D

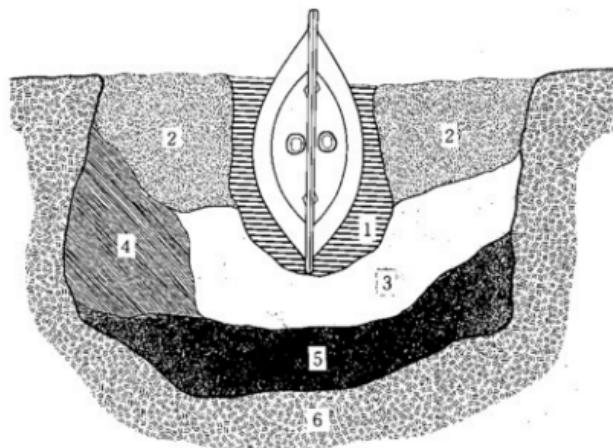


図32 土塙 SK01・銅鐸出土状況断面図

0 30cm
1 : 5

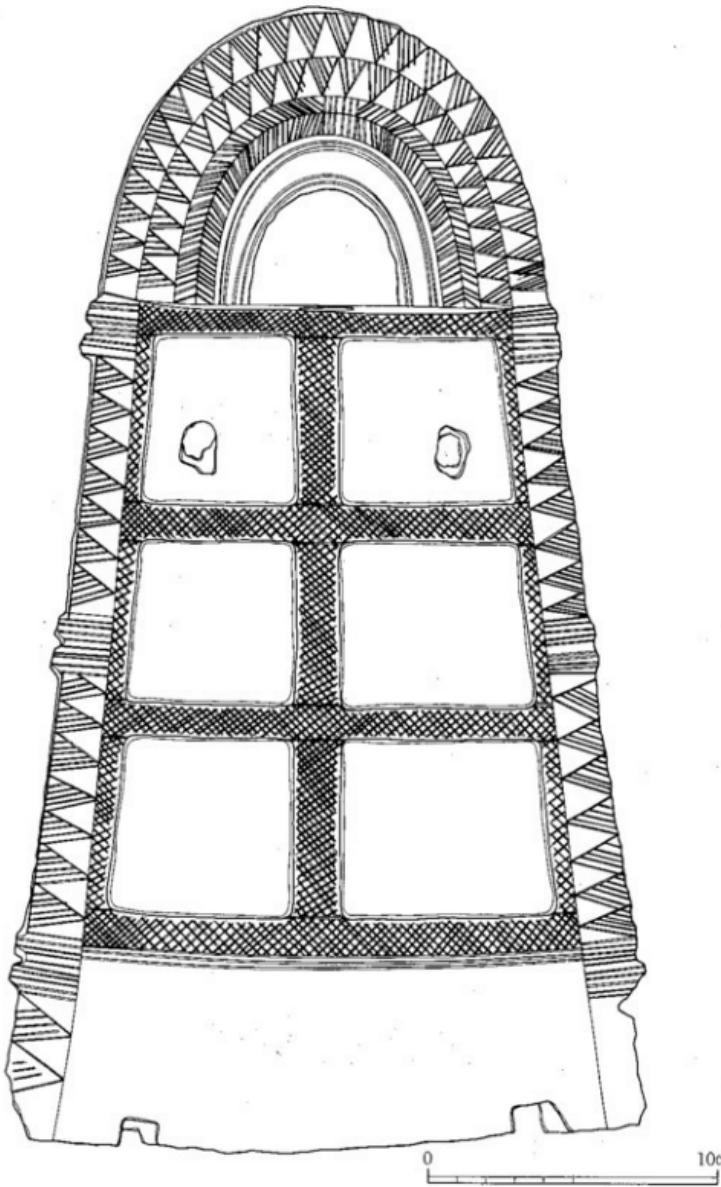


図33 土城 SK01 出土銅鐸A面

1 : 2

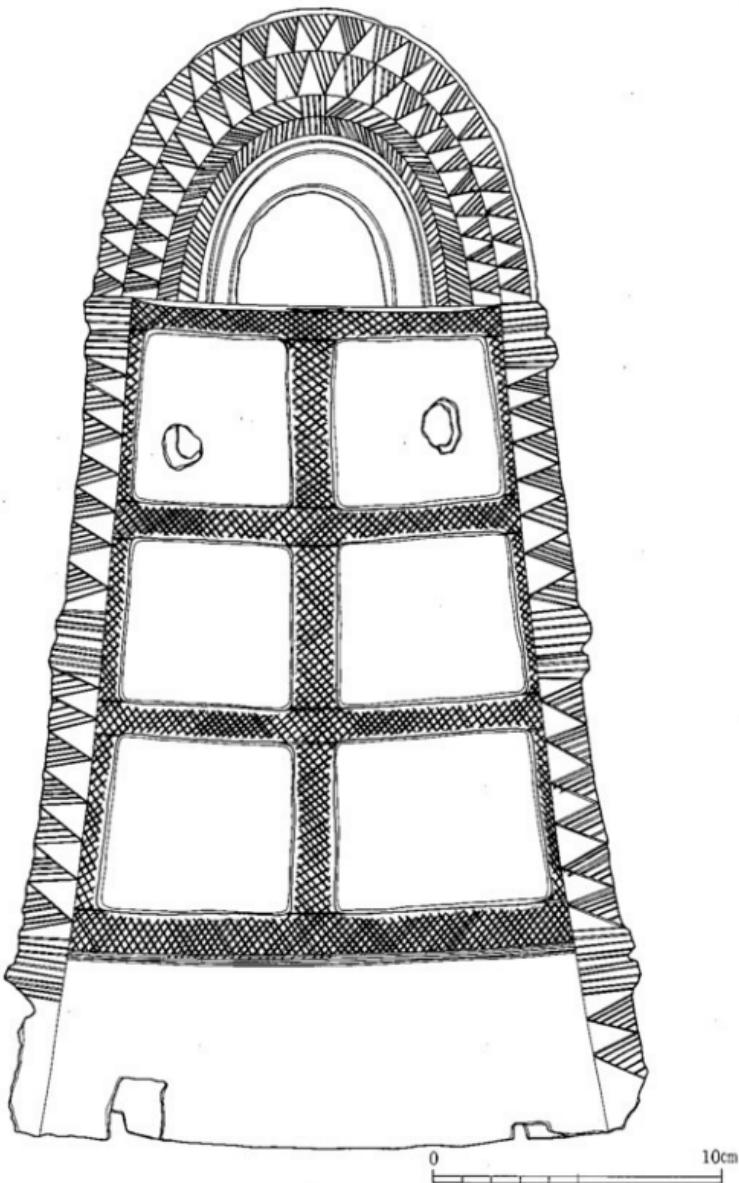


図34 土壤 SK01 出土銅鐸B面

1 : 2

区画線以下に研磨が施され、身部の6区画同様約1mm没する。下辺横帯は研磨による消失の可能性が強い。A面とB面の相違点として、菱杉紋様帶の中央の縦線がA面では6条、B面では5条、また、内縁紋様帶の内側の突線がA面では2条、B面では1条を数える。鱗部の複線鋸歯紋に関しては、A面左鱗では「R」方向、右鱗では「L」方向、B面左鱗では「R」方向であるが、右鱗では飾耳間において「L」から「R」へ変化する。さらに、鋸歯数に関しては、A面左右鱗では飾耳間において8単位+7単位であるが、B面左鱗では7単位+7単位、右鱗では7単位+6単位と左右不均整となる。

3. 古墳時代～室町時代

今回の調査において、古墳時代～室町時代に属する多数のピット・掘立柱建物・土壙・土壙墓・溝を検出している。特に、墨書き器（溝SD06出土）は名東遺跡においては、初見のものであり、巨大掘形を持つ掘立柱建物との関係から郡衙関連資料として捉えることができよう。さらに、鎌倉～室町時代における集落の一画を検出しており、名東遺跡における中世集落遺跡の拡がりが明確になりつつある。以下、主な遺構・遺物について概説する。

(i) ピット（図3）

調査地全域において、多数のピットが散在するが、建物としてまとめたピットからは時期を判別できるものがほとんどなく、建物群の時期設定には困難をきたす。また、時期を判別できるものでも、そのほとんどは瓦器使用の時期のピットである。以下に、ピット出土遺物について簡単にまとめておく（図35、PL-42）。

P168-瓦器椀（238）、P70-瓦器椀（244）、P175-土師器皿（249）、P59-瓦器椀（239）、P54-瓦器椀（245）、P177-土師器皿（280）、P179-青磁碗（240）、P28-土師器坏（246）、P182-石製鍋（251）、P262-瓦器椀（241）、P159-土師器皿（247）、P229-土師器鍋（252）、P274-瓦器椀（243）、P310-土師器皿（248）

(ii) 建物（図3、4）

掘立柱建物SB01（図36、PL-35）

桁行3間×梁行2間の東西棟建物である。柱間寸法は、東梁行が北から2.5m等間、南梁行が東から2.4m等間である。柱穴櫛形の平面形は長辺1～1.7m、短辺0.8～1.2mの長方形を呈し、深さは0.7～1mを測る。四隅の柱櫛形の方向は、その長軸を身舎中心部に向けており特異な平面形態を呈する。また、柱櫛形の構造は、すべてが身舎外側にテラスを有する2段構造である。柱櫛形に径30～40cmの柱痕跡を確認しており、企画性の高い巨

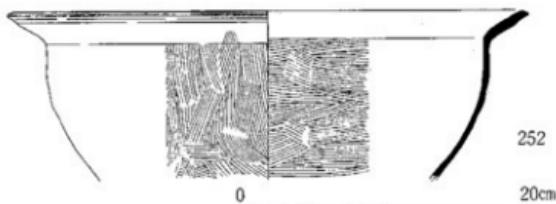
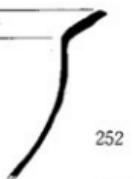
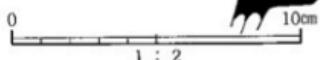
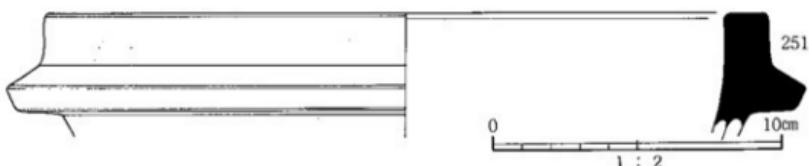
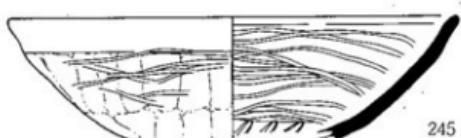
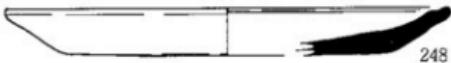


図35 ピット出土遺物 1 : 4

大掘建柱建物が考えられる。出土遺物に時期判別可能なものは認められないが、柱穴掘形の特異性及び、後述する建物SB03～05との切り合い関係、柱穴掘形埋土の相違から建物SB03～05よりは古相に位置づけられよう。

掘立柱建物SB02（図37、PL-34、36）

桁行4間×梁行2間の東西棟建物である。柱間寸法は、東梁行が北から2.1-2.4m、北桁行が東から2.1-1.8-2.1-2.1mを測る。柱穴掘形の平面形は、長辺0.9m～1m、短辺0.6mの長方形を呈し、深さは0.2m～0.4mを測る。柱掘形の構造において、掘立柱建

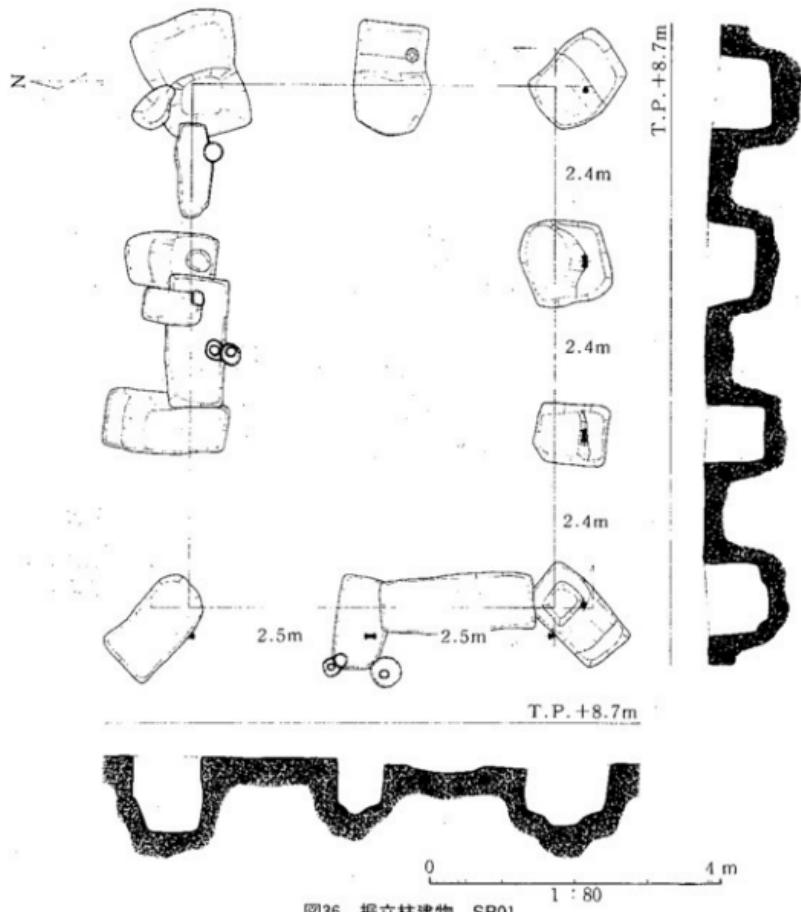


図36 掘立柱建物 SB01

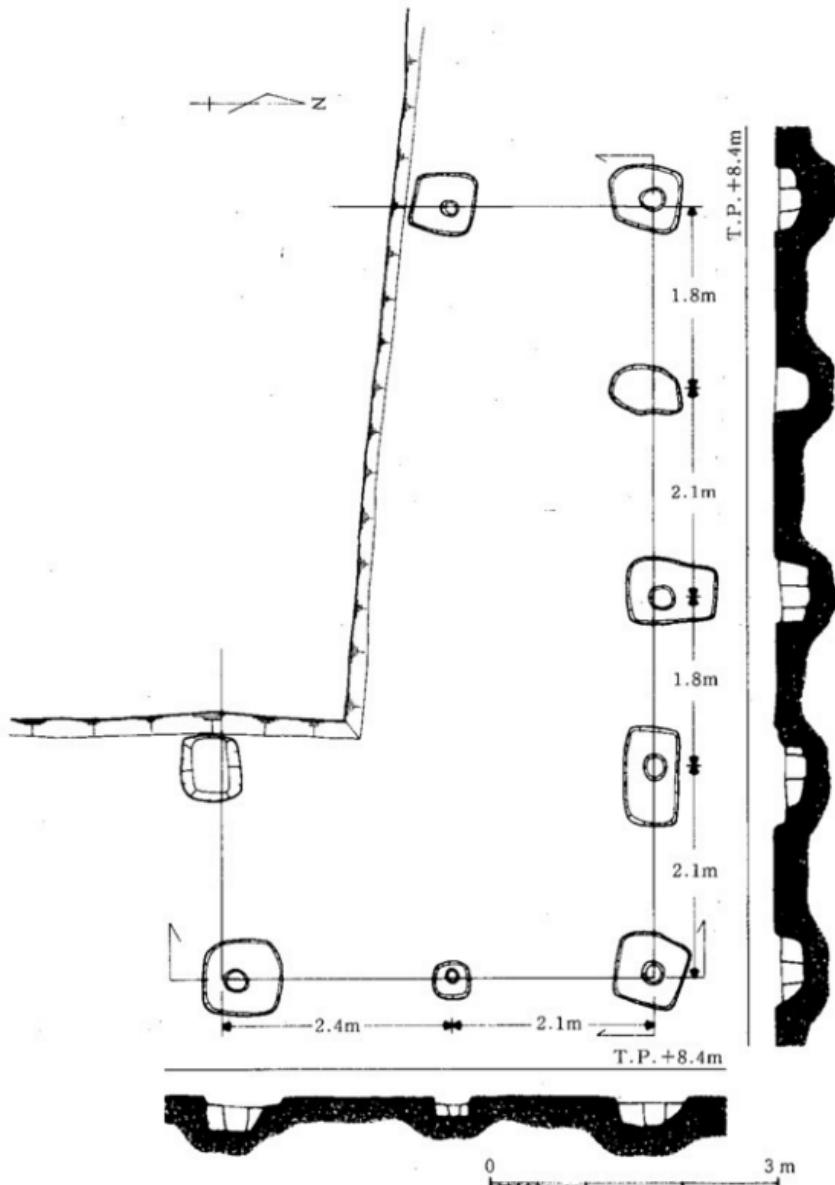


図37 挖立柱建物 SB02

1 : 60

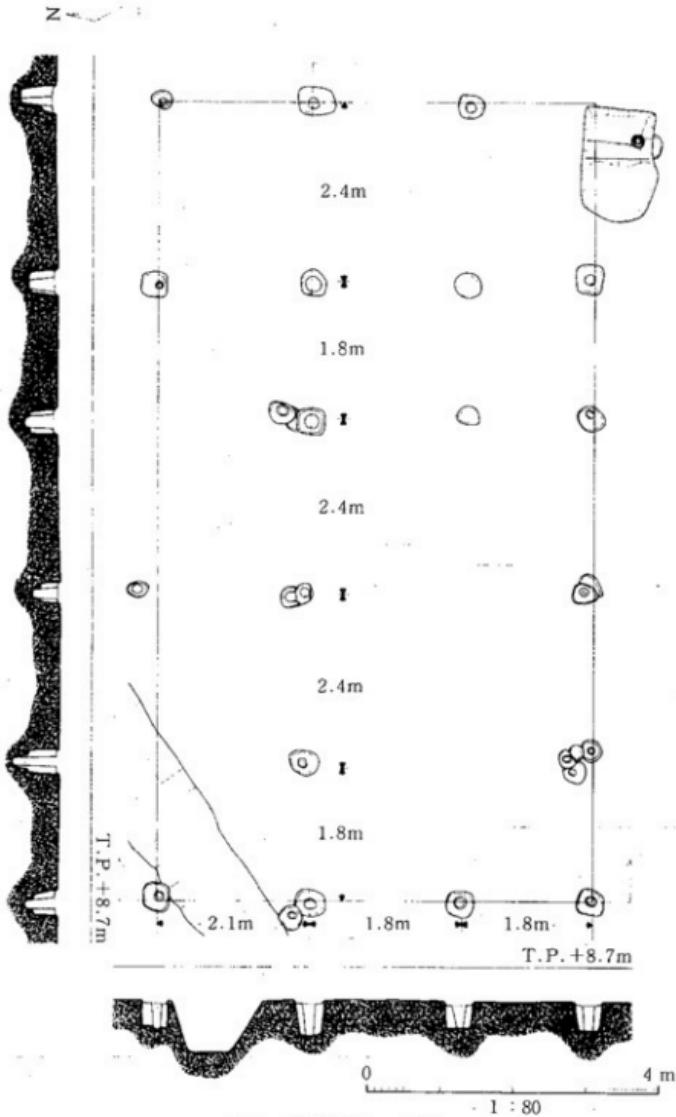


図38 掘立柱建物 SB03

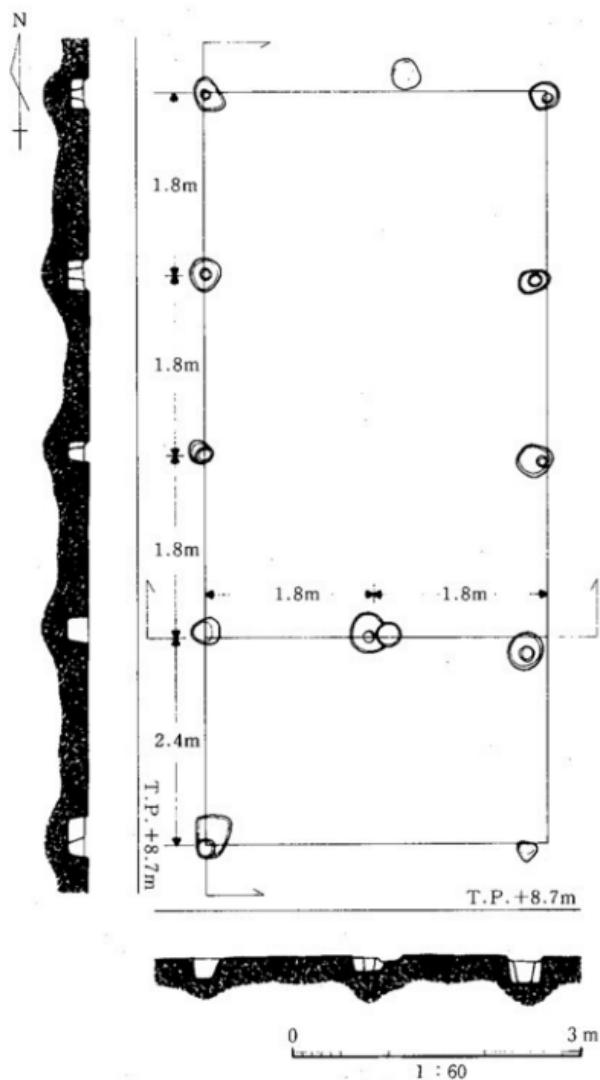


図39 掘立柱建物 SB04

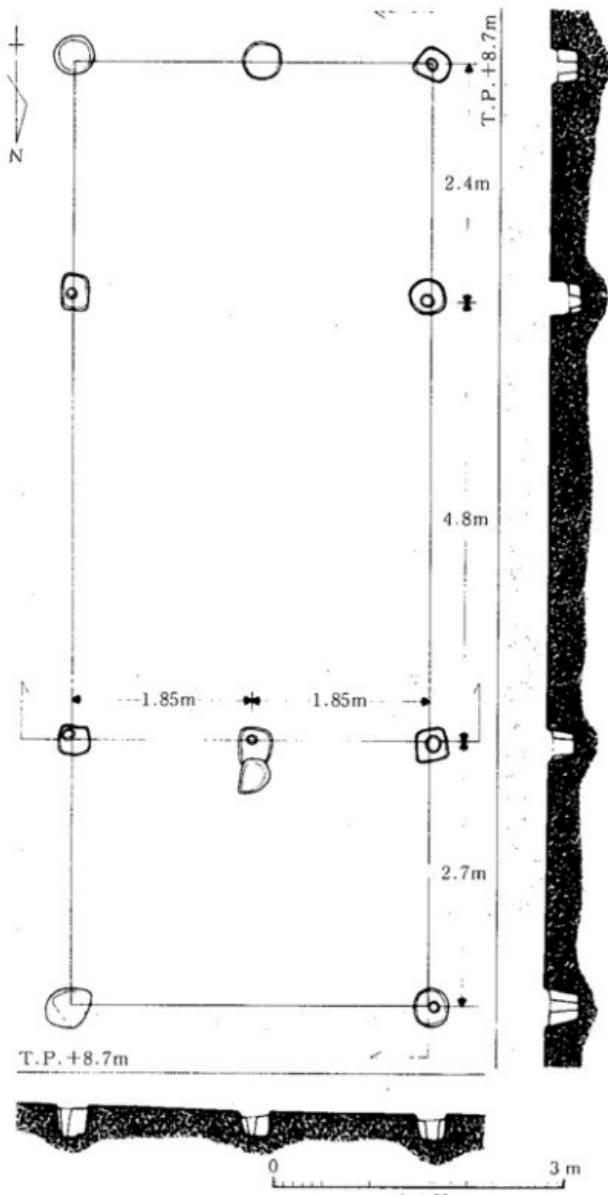


図40 挖立柱建物 SB05

物SB01と同様2段構造を有する柱掘形が存在する。柱掘形の規模においては、建物SB01の比ではないが、企画性及び柱掘形の規模に関して建物SB01と関連する建物ではなかろうか。

掘立柱建物SB03（図38、PL-35）

桁行5間×梁行3間の東西棟建物であるが、南平側の柱配置・配列に対応性が見られない箇所が多いことから、桁行5間×梁行2間の東西棟建物の南平側に梁行1間分が付設された建物であろうか。柱間寸法は、東梁行が北から1.8-1.8-2.1m、南から2列目の桁行が東から1.8-2.4-2.4-1.8-2.1mを測り、1尺=30cmとした場合の6・7・8尺の完数倍の数値が得られる。柱穴掘形は、平面形が径30~40cmの方形もしくは不整方形を呈し、深さは40~60cmを測り、2段に掘り窪めたものが多い。掘形埋土はにぶい黄褐色砂質シルトに黄色シルトがブロック混在する。出土遺物に時期判別可能なものは認められないが、瓦器使用期の建物であろう。

掘立柱建物SB04（図39、PL-35）

桁行4間×梁行2間の南北棟建物であるが、南梁行に妻柱が存在せず、また、柱間寸法が梁行1.8等間、桁行が北から1.8-1.8-1.8-2.4mを測ることから、桁行3間×梁行2間の南北棟建物の桁行南側に1間分が付設された建物であろうか。柱穴掘形の平面形は、径30~40cmの円形もしくは不整円形を呈し、深さは、20~30cmを測る。掘形埋土は、黄褐色砂質シルトに黄色シルトがブロック混在する。出土遺物に時期判別可能なものは認められないが、瓦器使用期の建物であろう。

掘立柱建物SB05（図40、PL-36）

桁行3間×梁行2間の南北棟建物であるが、南梁行に妻柱が存在しないことから、桁行2間×梁行2間の南北棟建物の桁行南側に1間分が付設された建物であろうか。柱間寸法は、東桁行が北から2.4-4.8-2.7m、梁行は1.85m等間である。桁行北から2間目の柱間寸法が過大である。何に起因するものであろうか。柱穴掘形の平面形は、径30~40cmの円形もしくは不整方形を呈し、深さは20~30cmをはかる。掘形埋土は、黄褐色砂質シルトに黄色シルトがブロック混在する。掘立柱建物SB04と同形態の建物構造を持ち、しかも建物空間が重複を見せることから建物SB04との時間差をもつ存在が考えられる。

（Ⅲ）柵

柵SA01（図3）

長さ6.9mを測る南北柵である。柱穴掘形は、径30cmの円形もしくは不整円形を呈し深

さは、20cmを測る。柱間寸法は、北から1.8-2.7-2.4mを測る。前述した掘立柱建物SB 03の東妻側に位置し、建物方向と一致し、また、掘形埋土が同様なことからこれに付属する柵と思われる。

(iv) 溝 (図3.)

(a) 北東～南西方向の溝 (図3)

溝SD01

上幅0.7m、下幅0.3m、深さ0.7mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。

溝SD02

上幅0.7m、下幅0.4m、深さ0.4mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。出土遺物には須恵器蓋(162)がある。

須恵器蓋(162)は、天井部と口縁部の境界に浅い凹面を持ち、口縁端部は丸くおさめる。陶邑TK209型式にあたる(図41、PL-43)。

溝SD03

上幅0.9m、下幅0.4m、深さ0.5mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。出土遺物には土師器坏(165)・土師器皿(163,164)がある(図41、PL-43)。

溝SD04

上幅2.2m、下幅0.4m、深さ0.9mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。南西部で溝SD02に切られる。出土遺物には、須恵器蓋(157)・坏(159,160)・土師器坏(167)がある。須恵器蓋(157)は、天井部を平らに成形し、口縁端部を下方へ短く摘み出す。天井部外面に回転ヘラケズリが施される。坏(159,160)は、底部と体部の屈曲が明瞭であり、体部は、斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面および内面は横方向のナデ調整である。土師器坏(167)は、底部と体部の境界が丸みを持ち、体部は直線的に伸び、口縁部付近で外反する。口縁端部は内面に脱厚し、内面口縁端部直下に凹線が生ずる。体部内面には、斜放射状暗文が配される。体部外面には横方向のナデ、底部外面はヘラミガキが施される。「平城宮期」に相当する形態であろう。(図41、PL-43)。

溝SD05

上幅0.9m、下幅0.3m、深さ0.7mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。南西部で溝SD06に切られる。出土遺物には、須恵器蓋(158)・坏(161)・高台付坏(166)・壺(169)がある。

須恵器蓋(158)は、口縁部にかえりを持つ。かえりは口縁端部より下方に突出する。

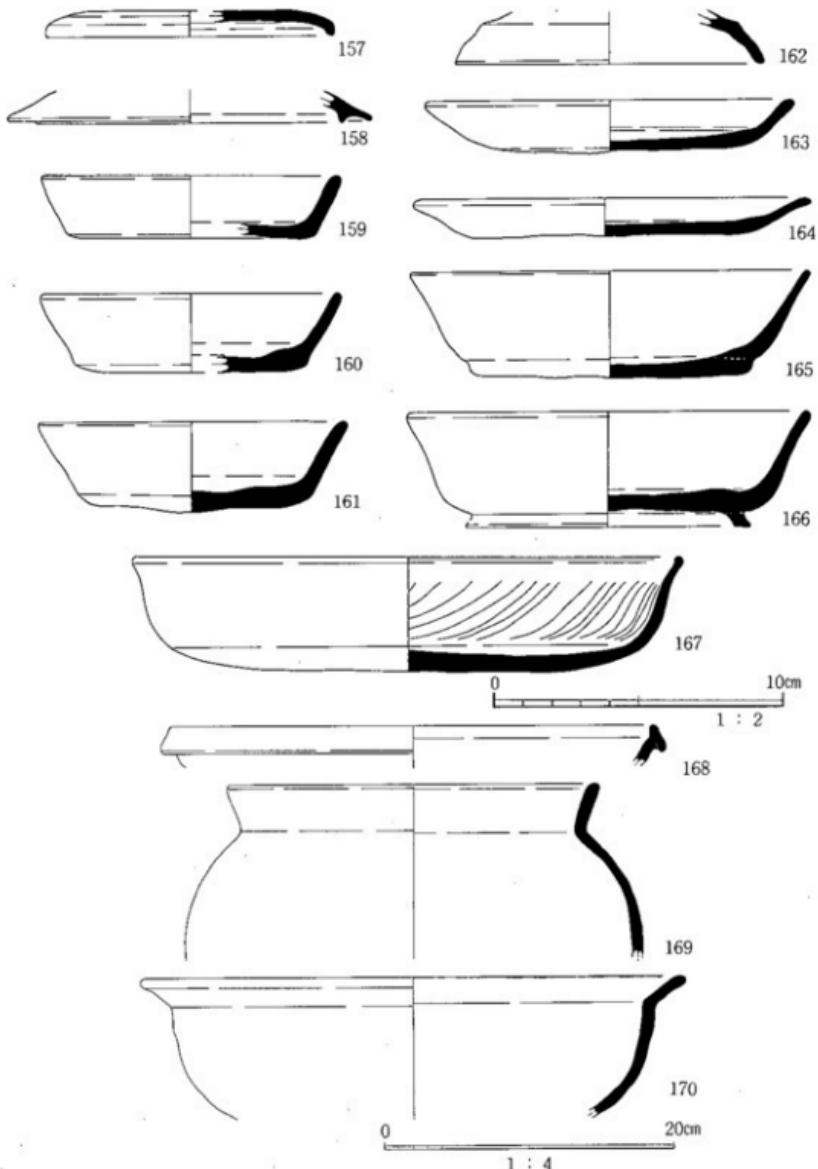


図41 溝出土遺物 SD02 (162), SD03 (163~165), SD04 (157, 159, 160, 167),
SD05 (158, 161, 166, 169), SD08 (168), SD09 (170)

陶邑TK217型式にあたる。坏（161）は、底部からゆるやかに外反する口縁部を持ち、口縁端部を丸くおさめる。体部外面および内面は横方向のナデ調整、底部外面はヘラ切り未調整である。高台付坏（166）は、底部と体部の境界は丸みを持ち、体部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部との境界より内側にわずかに外方向に踏ん張る高台を貼り付ける。陶邑TK217型式にあたる（図41、PL-43）。

(b) 東西方向の溝

溝SD06

上幅3m、下幅0.4m、深さ1.1mを測り断面形が逆台形を呈する大溝である。溝埋土は人為埋没土（上層）と自然埋没土（下層）に大別できる。自然埋没の過程においては、4次にわたる水成堆積層が認められる。上層埋土はにぶい黄橙色シルト層、下層埋土はにぶい黄色～浅黄色シルト層であり、水成堆積部には、灰色粘土質シルトが堆積する。

出土遺物には土師器椀（171）・坏（172～188, 194, 197～205）・皿（191～193, 195, 196, 206～215）・台付皿（219, 222）・足高高台（221）・奈良三彩？（218）・黒色土器椀（190）・須恵器蓋（189）・短頸壺（216）・鉢（220）がある（図42～45、PL-39～41）。

土師器椀（171）は、底部から屈曲し斜め上方に直線的に伸びる体部を持つものに、高台を貼り付けた形態を示し、須恵器高台付坏の形態を引くものであろう。体部内外面に横方向のナデ調整が明瞭に残る。土師器坏は、そのプロボーションが非常にヴァラエティーに富む。底部から体部への屈曲が丸味を持つもの（172, 174）、鋭く屈曲し斜め上方に直線的に伸びるもの（175, 176, 182, 201）、底部から外反しながら口縁部に至るもの（173, 178, 181, 194, 202, 204）、体部が内湾気味に立ち上がるもの（185, 186）がある。口縁端部の形態は単調に丸くおさめるものが大部分であり、口縁端部を内側に肥厚させる形態を持つもの（180, 183）もあり、古相を示すものであろうか。土師器皿は、体部が斜め上方に直線的に伸びるもの（208）、「て」の字状に屈曲するもの（195, 196, 211）がある。口縁端部の形態には、単調に丸くおさめるもの、口縁端部を上方に肥厚させ内面に沈線を巡らすもの（206, 212, 214, 217）がある。土師器皿（207）は、外面底部に「大」の字の墨書土器である。蓋（218）は、奈良二彩、もしくは奈良三彩であろう。黒色土器椀（190）は、内外面共にヘラミガキが施される黒色土器B類である。須恵器蓋（189）は、天井部は平らに成形され、天井部と口縁部の境界に段を生じ、口縁端部を下方へ短く屈曲させる。短頸壺（216）は、色調が橙色を呈するが、焼成不良の須恵器である。

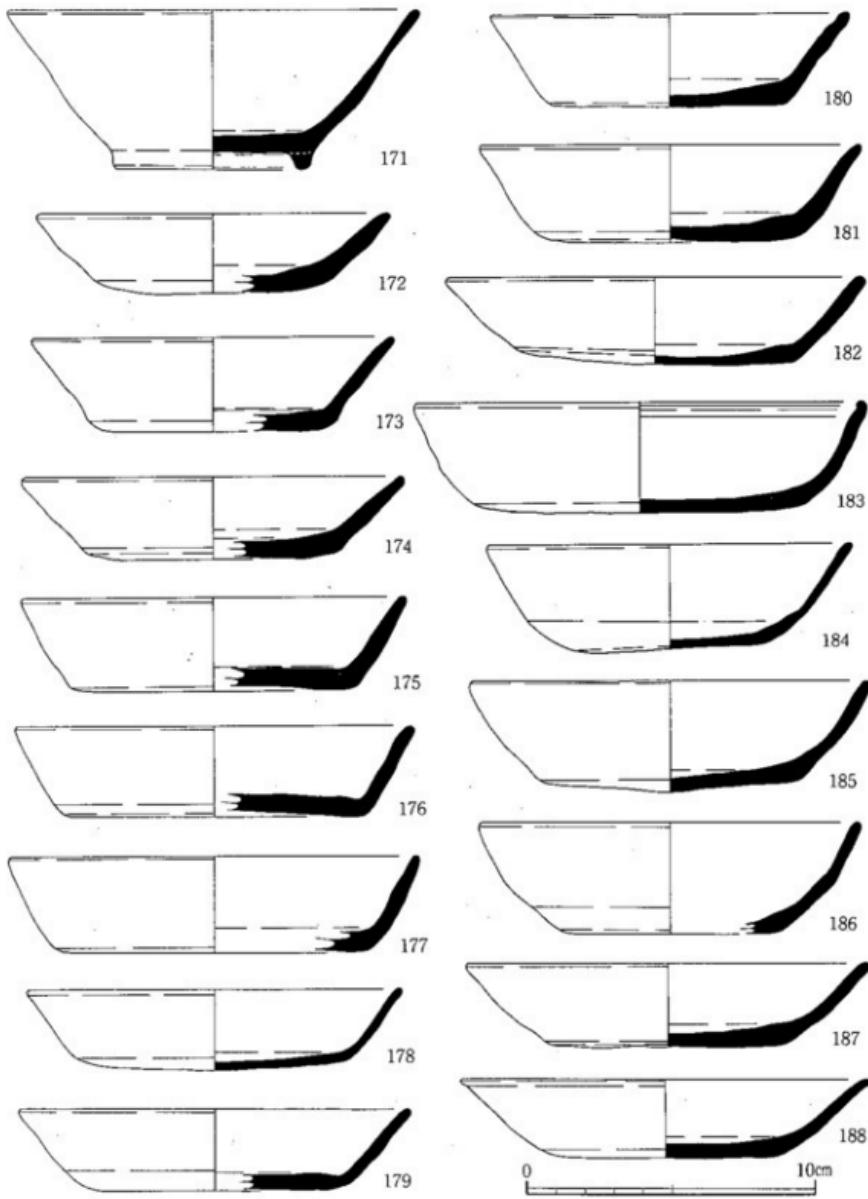


図42 溝SD06 出土遺物

1 : 2

0 10cm

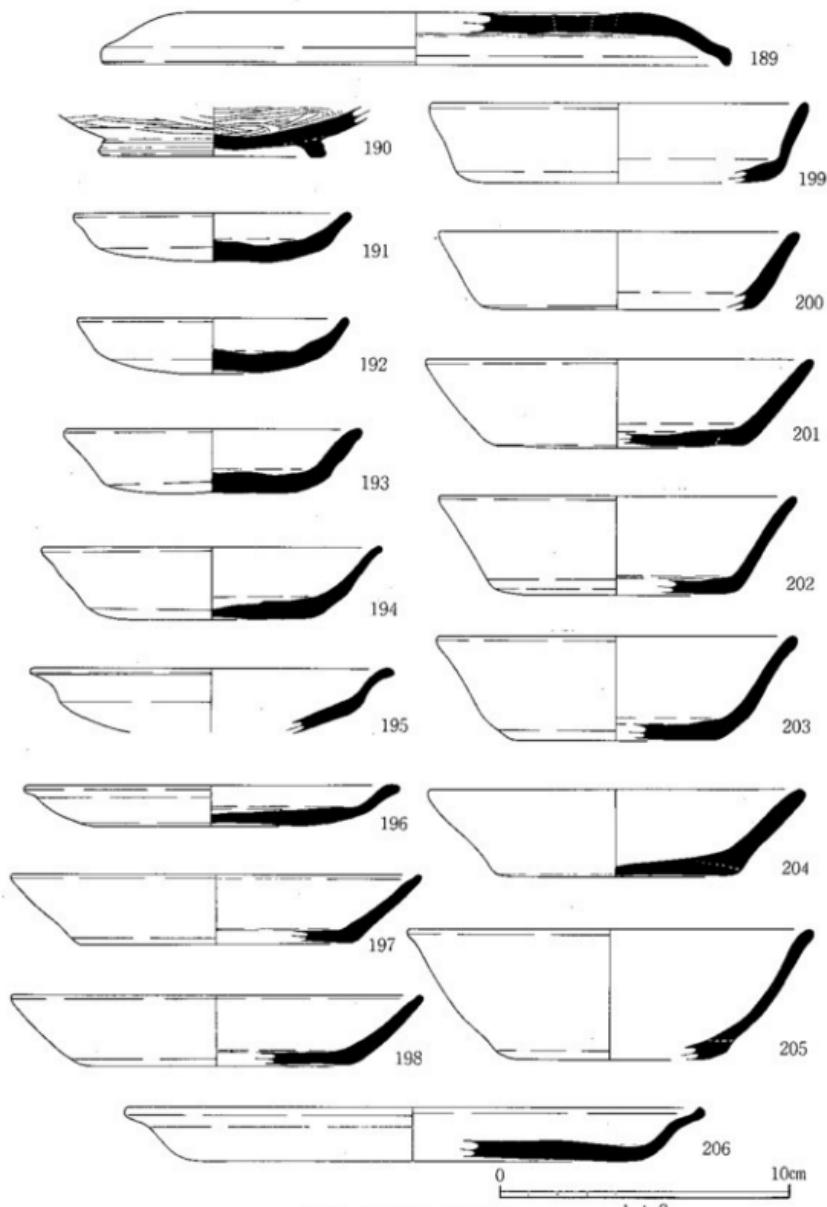


図43 溝SD06 出土遺物

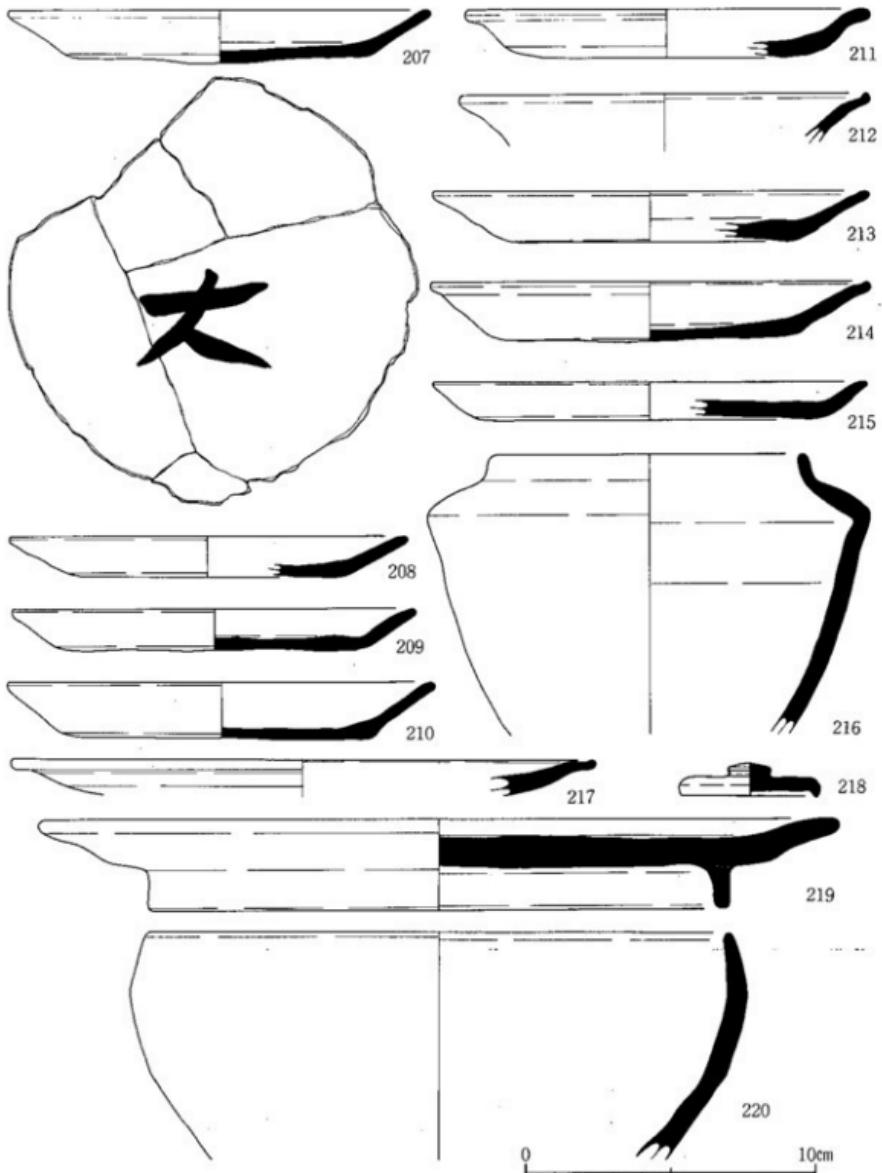


図44 溝SD06 出土遺物

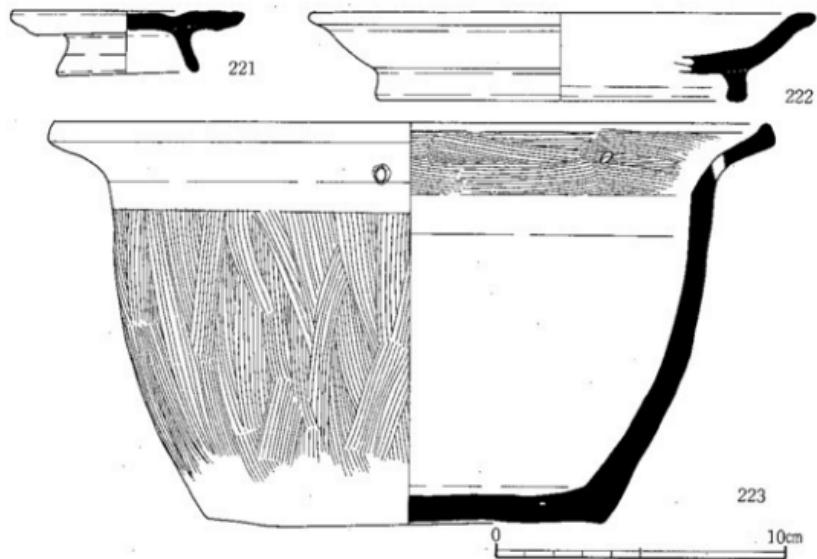


図45 溝SD06 出土遺物

(c) 南北方向の溝

溝SD07

上幅4.3m、下幅1m、深さ0.8mを測り断面形が逆台形を呈する溝である。現存用水路が西接して並走しておりその方向性から旧溝と考えられる。

出土遺物には、瓦器椀(224)、瓦質羽釜(229)、土師器三足羽釜(227)、瓦質甕(232)、土師器鍋(228)、土師器鉢(231)、須恵器甕(亀山産)(234,235)、須恵器練鉢(東播系)(230)、須恵器甕(233)、常滑甕(236)、備前壺(237)、青磁碗(225)、陶硯(226)がある(図50、PL-43)。

瓦器椀(224)は、体部が内弯気味に立ち上がり、底部には底平化した高台が貼り付けられる。体部器壁とくに口縁部付近の器壁が厚い。在地産の瓦器椀であろうか。須恵器甕(234,235)は、亀山焼である。²⁶ 口縁部は大きく外反し、口容部にはナデ調整により凹部が生ずる。外面は格子目タタキが施された後、口縁部に強い横方向のナデが施されるが、タタキ痕を完全に消しえない。(234)は、体部内面にハケ調整を受ける。壺(233)は、色調が赤褐色を呈するが、焼成不良の須恵器である。口縁端部内面に1条の沈線を巡らせる。体部外面に羽状のタタキが施される。備前壺(237)は、SK02出土の備前壺(263)との接合資料となる。

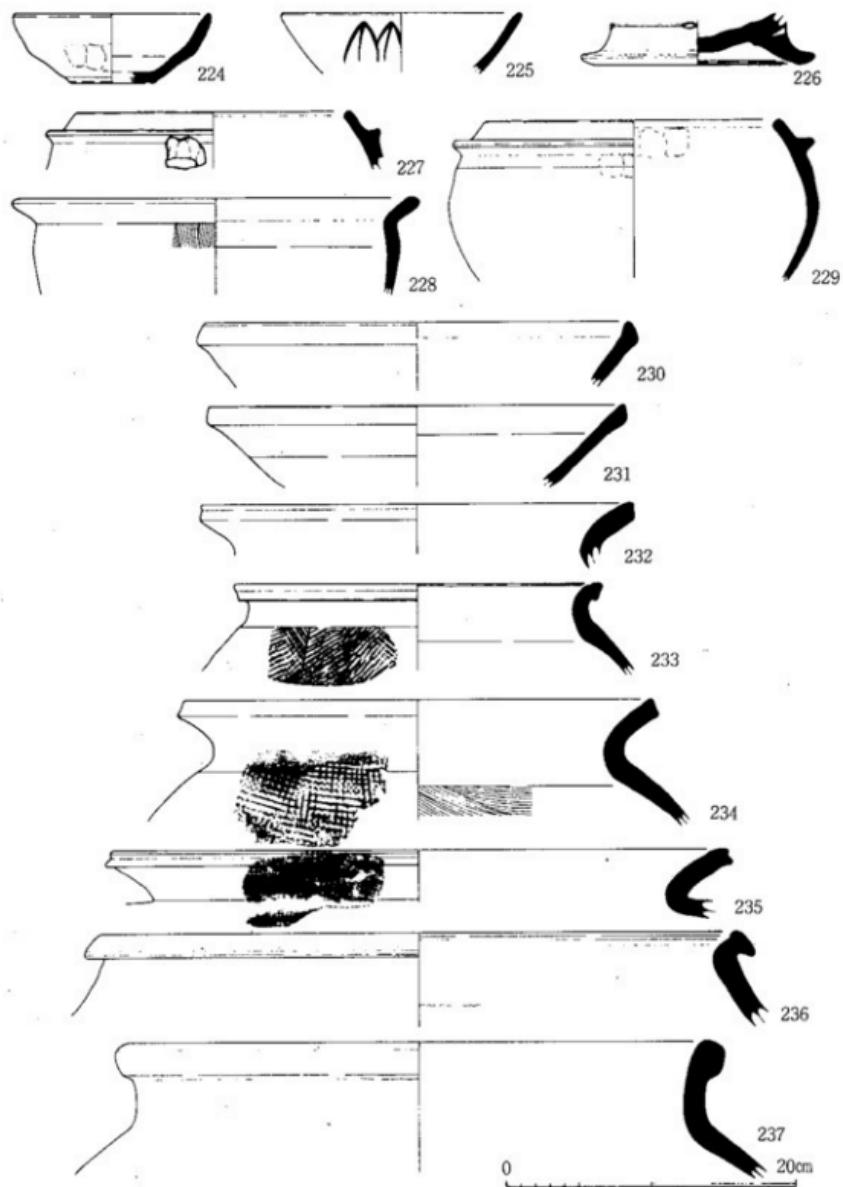


图46 满SD07 出土遗物

1 : 4

0

237

20cm

(d) 収束する溝

溝SD08

長さ3.5m、幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面形がU字状を呈し、両端で収束する溝である。土壙墓に近接して配されており、墓に機能する溝であろうか。

出土遺物には、須恵器練鉢(168)がある。須恵器練鉢(168)は、東播系であり口縁部を上下に拡張させる形態をとる(図41)。

溝SD09

長さ2.5m、幅0.8m、深さ0.3mを測り、断面形が逆台形を呈し、一端が収束する溝である。出土遺物には、土師器鍋(170)がある(図41)。

(V) 土 壤(図3)

土壙SK01

調査地区内において全体の約1/2を検出しており、平面形が、径1.6mを測る不整方形を呈し、深さ0.6mを測る。溝SD01により破壊されている。埋土は、灰黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物には、須恵器練鉢(262)・土師器鍋(264)・土師器壺(259)がある。須恵器練鉢(262)は、東播系であり、底部から斜上方にわずかに内湾気味に立ち上がり口縁部直下で外反し口縁端部を上方に拡張する。内外面ともに強いナデ調整を受け、内面はさらに、不定方向のナデで仕上げる。底部外面には、回転糸切り痕が見られる(図47, PL-44)。

土壙SK02

平面形が、径0.7mを測る円形を呈し、深さ0.5mを測る。掘立柱建物SB01に近接し、しかも、SK02の北側に同形態の土壙SK31が並置されていることから、建物に関して同機能を果たした土壙であろうか。

出土遺物には、備前壺(263)があるが、西方に位置する溝SD07から出土している備前壺(237)との接合資料になる(図47, PL-44)。

土壙SK03

平面形が、長径2.5m、短径1.3mの不整長円形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトと黄色シルトが混在する。

出土遺物には、瓦器碗底部片(253, 255)がある。瓦器碗(253)は高台径4.8cm、(255)は4.6cmを測り、断面三角形の退化した高台を持つ。また、内面底部に平行線暗文が施される(図47, PL-44)。

土壙SK04

平面形が、長径1.6m、短径1mの長方形を呈し、深さ0.3mを測る。土壙SK00に北側を破壊される。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトと黄色シルトが混在する。土壙壁面が垂直であり、床面が平坦であることから土壙墓と考えられる。

出土遺物には、瓦器椀底部片（254）がある。瓦器椀（254）は高台径4.5cmを測り、断面逆台形を呈する高台を持つ。内面底部にヘラミガキが施される（図47、PL-44）。

土壙SK05

平面形が、長径1.4m、短径0.9mの長方形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色砂質シルトと黄色シルトが混在する。土壙壁面が垂直であり、床面が平坦であることから土壙墓と考えられる。

出土遺物には、瓦器椀底部片（256）がある。瓦器椀（256）は高台径4.0cmを測り、断面逆台形を呈し、踏張った形態の高台を持つ。内面底部に斜格子暗文が施される（図47、PL-44）。

土壙SK06

平面径が、長径1.4m、短径0.9mの長方形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトと黄色シルトが混在する。土壙壁面が垂直であり、床面が平坦であることから土壙墓と考えられる。

出土遺物には、瓦器椀（258）がある。瓦器椀（258）は、口径10.2cm、器高2.4cmを測り高台を持たない。内面体部には、退化した匂線状ミガキが数条施される。終末期の「和泉型瓦器椀」である（図47、PL-44）。

土壙SK07

平面形が、長径1m、短径0.7mの長方形を呈し、深さ0.2mを測る。掘立柱建物SB01の柱穴掘形と重複する。埋土は灰黄褐色砂質シルトと黄色シルトが混在する。土壙壁面が垂直であり、床面が平坦であることから土壙墓と考えられる。

出土遺物には、瓦器椀（257）がある。瓦器椀（257）は、口径15.7cm、器高5.0cm、高台径7.2cmを測る。内外面とも表面磨滅が著しく調整は不明である。「和泉型瓦器椀」である（図47、PL-44）。

土壙SK08

平面形が、長径1m、短径0.6mの不整長円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトと黄色シルトが混在する。

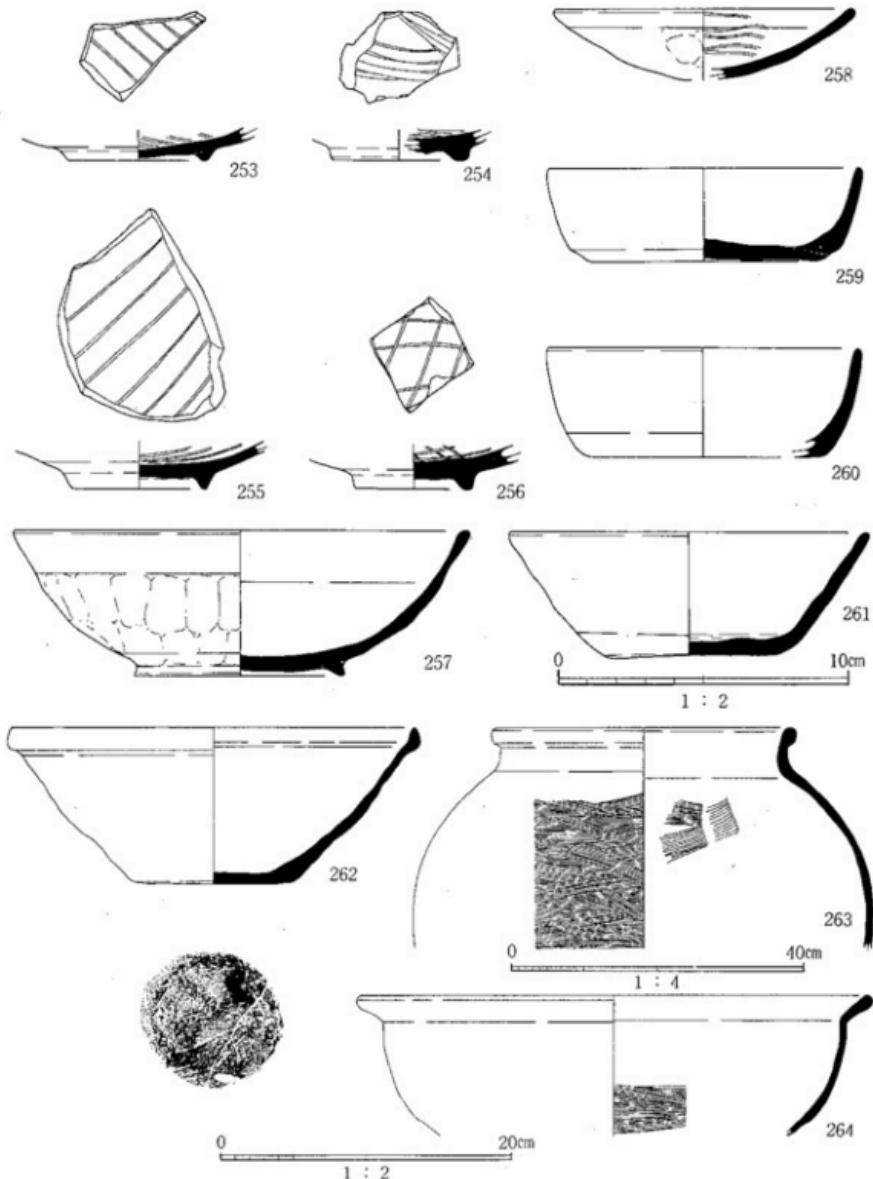


図47 土塙出土遺物 SK01 (259, 262, 264), SK02 (263), SK03 (253, 255), SK04 (254),
SK05 (256), SK06 (258), SK07 (257), SK08 (261), SK09 (260)

出土遺物には、土師器杯（261）がある（図47、PL-44）。

土壙SK09

平面形が、径0.4mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰色シルトと黄色シルトが混在する。

出土遺物には、土師器杯（260）がある（図47、PL-44）。

V. 小 結

最初にも述べたように、名東遺跡に対する評価には未だ確立されたものはない。現在においては、発掘調査の成果から得られる個々の情報の蓄積段階であり、これらの情報を総合的に取り纏め得るにはまだまだ時間が必要とされる。このような状況の下、今回の発掘調査においては、非常に貴重な幾つかの新知見を得ている。

自然落ち込み遺構SX01の凹地を形成する明黄褐色系の極細砂～砂質シルト層は、名東遺跡において、從来、最終遺構面（地山）とみなしてきた感があるが、遺物の包含が認められることから、今後、縄文時代の土器を含む遺物包含層としての理解がもとめられる。また、出土遺物は、その分布の集中性から人的破棄の可能性が強く考えられるが、SX01の使用空間としての「場」の問題に関しては不明である。

自然落ち込み遺構SX01出土の土器群は一括資料である。深鉢は形態および突帯の施文状況により細分が可能である。2条突帯を持つ深鉢形態Bは、肩部の突帯貼り付け箇所が胴部屈曲部よりや上方に位置するが、いわゆる「船橋式」の範疇に含まれるものであろう。1条突帯の形態Aは、1条突帯から2条突帯への時間的移行が認められていることを考慮すれば、古い要素を持つ資料とされる。また、底部においては、丸底、尖底の形態が残存し、平底底部の製作においても、丸底に輪状の粘土紐を貼り付けることにより平底化する技法を用いており、平底への移行が遅れている状況を示している。一方、口縁部から直線的な体部を持つ形態Dや、突帯に代わり沈線を採用している形態Cは弥生時代前期の甕の形態および沈線施文に通じる新しい要素として理解できる。おそらく、「夜臼式」の影響をうけて成立したであろうこれらの形態の深鉢は「板付I式」において完成されるべき技術、形態の諸要素の一部をすでに持ち得ているものと考えられる。

石鏡は、最大長を20mm以下に保ち、基部形は縄文時代の伝統的な形態である凹形もしくは極凹形に仕上げられる。調整には、両面もしくは片面調整が用いられているものの、すでに調整がほどこされないものが存在する。方形周溝墓出土石鏡において、調整を受ける割合が逆転現象を示しているように、調整を施さない技術は弥生時代の特徴とされ、石鏡

製作技術においても新要素が取り込まれていると考えられる。

徳島市域の遺跡においては、縄文時代の遺物検出例がほとんど皆無に等しい。今後、明黄褐色系の極細砂・砂質シルト層（最終遺構面）の問題を踏まえた上で、良好な状況下での遺構、遺物の検出が望まれる。

今回の調査において、弥生時代の方形周溝墓が多基確認されて、以後、名東遺跡における方形周溝墓の検出例は増加の傾向にあり、すでに17基が確認されている（図48、表4）。今回検出された方形周溝墓は、長辺5～10m、短辺4～8mの平面形が長方形を呈し、幅1.3m～2.1m、深さ0.5m～0.8mの周溝により区画されるものであり、四隅が陸橋部として途切れる形態を示す。墳丘盛土および埋葬施設は後世の削平のための残存しない事例が殆どである。畿内摂河泉においては類をみないこの形態の方形周溝墓は、滋賀県近江八幡市勤学院遺跡⁽²⁰⁾、兵庫県姫路市八幡遺跡⁽²¹⁾、揖保郡太子町川島遺跡⁽²²⁾において確認されている。東部瀬戸内沿岸的な様相として、今後、徳島県下においても普遍的な形態と成り得るものと考えられるが、最近の発掘調査の成果を考慮するならば、四隅陸橋部を有するこの形態の方形周溝墓に少なからず疑問視される調査事例があり、今後の調査において検討されるべき問題である。

今回検出された方形周溝墓出土土器は層位的出土資料ではない。また、単一遺構でありながら、ある程度の時期幅を考慮する可能性が十分に考えられる遺構の性格上、時期判定は容易なものではない。

広口壺（127）の体部は卵形を呈し、口縁端面に刻目を施す。また、壺（136）の体部も卵形を呈し、体部上半～頸部にかけて櫛描直線文と波状文を組み合わせる文様構成をとる。これらは、細部にII様式の伝統を保持しながらもIII様式を指向している資料として理解でき、方形周溝墓出土土器の中でも古相に位置付けられよう。2号方形周溝墓出土の甕（131）は頸部屈曲が鋭く、端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線を施す。台付鉢（126）は、口縁端部に凹線文が施されるものの櫛描文が卓越しており、III様式（新）の様相を示す資料であろう。水差し形（132）は体部屈曲がシャープさに欠け丸味を持つ。また、把手は貼付式であり、IV様式の範疇に属する資料であろう。壺（126）は、名東遺跡——名東西都市下水路発掘調査VII区SX01出土——の壺（58）と同型式である。IV様式終末からV様式への移行段階期の資料であり、方形周溝墓出土土器の下限新相を示すものである。3号方形周溝墓出土の甕（135）は、胴部最大径が上半に移行し、口縁部径を上回っている。口縁部を上方に拡張し、内傾する口縁端面に凹線文を施す。III様式（新）段階であろうか。

図48 名東遺跡における方形周溝墓群推定域図



番号	調査地	検出状況	形態	規模(m)	特徴	土器	石器	備考	参考文献
1	名東下木62	北・西溝			周溝途切れる○	○	○	管玉	西周溝底部土器供献(穿孔) 名東遺跡概要1989
2	国名大教会62~63	南・西溝			周溝途切れる○	○	○	石鏃	南・西周溝土器供獻 名東遺跡概要1990
3	2	全周溝	長	12.0×6.5	四隅途切れる○	○	○	石鏃	区画内・陰鷹部に土器供獻 "
4	3	北・東・南溝	長	12.0×9.5	周溝途切れる○	○			北・東・南周溝底部土器供獻 "
5	4	北・東・南溝	長	9.0×6.0	周溝途切れる○			石鏃	"
6	5	西・南・東溝	方	5.0×5.0	周溝途切れる○			木棺直葬1基 2m×0.8m	"
7	6	東溝断面確認				○	二・三・鉢	ミニチュア壺(穿孔)	"
8	天溝内63~1	北溝							朱報告
9	2	全周溝	長	11.5×6.5	四隅途切れる○			西周溝中世井戸により破壊	"
10	3	東・西溝	長	9.0×5.5	溝2条の区画墓	○	把手台付鉢 (穿孔)	東周溝底部に土器埋納土塙 (灰片混在)	"
11	4	全周溝	長	9.0×5.5	四隅途切れる○	○			"
12	5	北・東・西溝	長	8.0×6.0	周溝途切れる○			木棺直葬1基 2m×0.9m	"
13	6	北・東溝			周溝途切れる?			断面にて盛土確認・四隅途切 れる形態に疑問	"
14	7	北・南溝	長		溝2条の区画墓				"
15	名東下木63	1			取束する溝				"
16		2			取束する溝○				"
17		3			取束する溝				"

図48 名東遺跡における方形周溝墓一覧表

壺（134）は、太頸の広口壺であり、体部がソロバン形に横に軽く張る。ヘラミガキの方向が縦方向の一方のみで仕上げられ、中期全般にわたり特徴的に見られる縦+横方向の組み合わせによる手法ではない。⁽²⁴⁾ III様式（新）段階より古期に位置付けられようか。また、壺（138,139）は全く装飾を持たず、その形態も一連の出土土器においては特異である。方形周溝墓という遺構の性格上から生ずる独特的な形態なのであろうか。このように、各方形周溝墓間における時期差はもちろんのこと、2号方形周溝墓出土土器の様相のように周溝墓個々においてもかなりの時間差が存在するものと考えられる。⁽²⁵⁾ いずれにせよ、これらの弥生時代の土器に対する明確な見解は現在のところ出されておらず、統一された編年観も確立していない。今後、層位的出土例を備えた集落内における土器との比較検討作業が必要とされる。

この方形周溝墓群の一角に位置する土壙SK01より扁平鉢式6区画袈裟襷文銅鐸が出土している。土壙SK01の出土遺物に時期判別可能なものがなく、しかも、両者の検出遺構面が同じであり、遺構の切り合い関係も認められないことから、方形周溝墓群と銅鐸埋納の時間的前後関係に関しては不明である。⁽²⁶⁾

次に、土壙SK01断面土層図に基づき銅鐸埋納行為の復原を試みてみる（図32）。

①埋納土壙の掘削が行われる。②土壙の底部に層厚5cmの灰黄色極細砂～シルトが敷かれる。③2～4層の土で埋納土壙中央部に、長辺43cm、短辺12cmの平面形が長円形を呈し、深さ17cmを測る土壙が埋め戻しにより形成される。すなわち、埋納土壙内に銅鐸埋納の為の土壙が2次的に作出される。なお、2～4層の土は、色調・土質から、埋納土壙掘削時の排土の再利用と考えられる。④銅鐸の籠を上下にした状態で埋納される。この時、埋納土壙中央部に作出された空間部の底部が平坦であった為、銅鐸の形態上必然的に鉢下がりの状態になる。⑤1層で空間部を埋め戻し埋納を完了する。

このように、銅鐸の埋納行為の復原を試みたが、奇妙なことは、埋納行為の初期と最終段階で異質の土が使用されること。また、銅鐸埋納土壙の形成が2次的であること。さらに埋土への灰の混入、埋納土壙付近が炭片で汚染されていることである。これらのことから、埋納行為全般にわたって何らかの役割を果たしたものとするならば、弥生時代人の文化の観点からみることが求められ、実に複雑な問題を孕んでいる。

名東遺跡の銅鐸発見以後、静岡県浜松市前原Ⅶ遺跡、岡山県岡山市高塚遺跡、愛知県名古屋市朝日遺跡、大阪府八尾市跡部遺跡、静岡県細江町穴ノ谷遺跡において原位置での銅鐸の出土報告がなされている。中でも、朝日遺跡においては、名東遺跡と同様、方形周溝

墓に近接して発見されており、奈良県桜井市大福遺跡の出土例を含めて墓地と銅鐸の関連出土例として興味深い。これらの事実は、従来の銅鐸の「まつり」に対する考え方の一考を投じるべきものであり、新たに銅鐸文化を復原的に想像する作業が必要とされる。

銅鐸のA面とB面との相違は、製作時における簡略化、手抜き工程を考慮するならば、A面の鋳型製作後にB面の鋳型製作が行われたものと考えられる。また、銅鐸の諸特徴の中で注目すべきは研磨による著しい形態変化である。これが、意図的な形態変化を目的としたものであると解釈するかの如何にかかわらず、ある「特徴性」を反映しているものと考えられる。その位置づけにはより細かな検討が必要とされるであろう。同範鐸は知られていないが、形態的類似例として、大阪府八尾市都塚山出土銅鐸、香川県木田郡半礼町源氏峰ノバタ出土銅鐸がある。

溝SD01,03~05は北東～南西方向に並走する溝であり、出土遺物よりおむね飛鳥・藤原～平城期にかけて存在した溝と考えられる。これらの並走する溝を一掃し、東西方向に走る大溝SD06が掘削される。SD06出土の土師器壺、皿の調整手法の特徴は体部内外面とともに横方向のナデが施され、底部外面にもナデ調整が施されるが、ヘラ切りもしくはヘラ起こしの痕跡を残す。また、焼成は完全な土師器焼成である。瓦器を全く含まず、黒色土器B類、足高台皿の存在は、阿波国府跡神明地区溝SD02あるいは庄遺跡篠大体育馆出土資料よりは新相の10世紀中頃に位置づけられるものであろう。掘立柱建物SB01,02の時期設定は困難であるが、柱穴掘形の規模・構造に特異性が認められ、桁行方向を同じくする溝SD06墨書き土器の出土と兼ね合わせるならば、寛平八年（898）九月五日の名東郡設置に伴う郡衙関連遺構を想定させる。

鎌倉～室町期の集落遺構は広範囲に確認されており、農村集落の様相を帯びる。掘立柱建物SB03~05の柱配置、柱間寸法は不均整であり、決して高精度の建物であるとは言い難い。しかしながら、名東遺跡においては、この不均整な構造を有する建物が一般的とされる。また、建物周辺に位置する多基の土壙墓は、中世農村集落における葬送墓制の様相を明確に示しているものと考えられる。居住区内に墓地を取り込む「屋敷墓」の形態は名東遺跡において、一般的に認められる現象である。すでに12世紀後半から「屋敷墓」が確認されているが、今回の調査では、その存続が15世紀代まで下ることを示しており、依然として旧態墓制が慣行されている。その背後には、集落の散村化から集村化への移行が遅れていることが考えられるが、今後、名東遺跡における中世集落形態の検討が必要とされるであろう。出土遺物は、瓦器壺、土師器壺、皿、土師器鍋、羽釜、瓦質羽釜、甕、須恵

器練鉢（東播系）、須恵器甕（亀山焼）、備前焼、常滑焼、青磁碗とその大部分が畿内～瀬戸内海沿岸地域からの搬入土器で占められる。供膳形態の中心を成す椀は、一貫して「和泉型」瓦器碗が使用され、終末段階に至るものさえ搬入される。平安期とは、異なり、鎌倉期以降における窯業生産は活発な活動を示さず頽廃的な様相を示すことが窺われる。⁽³⁶⁾ 畿内・瀬戸内海沿岸地域を含めた商業圏内における商品流通の活性ならびに海上交通の繁栄による影響が極めて大きな要因として左右しているものと考えられる。

このように、今回の調査においては、非常に重要な資料を得ている。しかしながら、名東遺跡に対する研究はまだ端を発したばかりであり、数多くの検討事項が残されている。解決すべき問題は山積みされており、それに対する基礎作業としての資料整備が何よりも必要とされている。今後、これらの資料に対する有効な分析法をもって、名東遺跡の解明に向けての作業が必要とされる。

（註）

- (1) 徳島市教育委員会「徳島市文化財だより」No.1, 徳島, 1978年。
- (2) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開一序論一」, 『徳島県博物館紀要』第5集, 徳島, 1974年, PP29～47。
- (3) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』1, 徳島, 1989年。
- (4) (3)に同じ。
- (5) 徳島市教育委員会『第10回埋蔵文化財資料展一阿波を掘る一』, 徳島, 1989年。
- (6) 角川日本地名大事典編纂委員会『角川日本地名大事典』36徳島県, 東京, 1986年。
- (7) 龍山雄一「縄文と弥生の出会い—庄遺跡の発掘調査からー」, 『徳島市史だより』第12号, 徳島, 1986年, PP 6～7。
- (8) 泉拓良「縄文時代」, 『図説発掘が語る日本史』4近畿編, 東京, 1985年, PP50～83。
- (9) 用語および使用細部調整用語については、山中一郎「森の宮遺跡出土の石器について」難波宮址顕彰会刊『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』, 大阪, 1978年, PP124～147に従うものとする。
- (10) (9)に同じ。
- (11) 用語については、佐原眞「銅鐸について」, 『西浦銅鐸』, 大阪, 1979年, PP22～31に従うものとする。
- (12) 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯跡群』I, 京都, 1966年。
- (13) (11)に同じ。

- (14) 篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」、『中近世土器の基礎研究』III、大阪、1987年、PP93~96。
- (15) 家根祥多「縄文時代」、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書』II、大阪、1982年、PP142~157。
- (16) 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年研究—板付遺跡を中心とした福岡県早良平野の場合一」、『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』、東京、1980年、PP117~192。
- (17) 家根祥多「近畿地方の土器」、『縄文文化の研究』4 縄文土器II所収、1981年、東京、PP238~248。
- (18) 山中一郎「石器遺物」、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書』II、1982年、大阪、PP158~185。
- (19) 埋蔵文化財研究会「西日本における方形周溝墓の諸問題」、滋賀、1982年。
- (20) (19)に同じ。
- (21) (19)に同じ。
- (22) 昭和63年~平成元年の名東町1丁目における発掘調査において、溝がコーナー部において途切れない形態の方形周溝墓を検出している。ただし、周溝底部のコーナー部における立ち上がりは明確である。
- (23) (3)に同じ。
- (24) 龍山雄一氏の御教示による。
- (25) 編年観については、寺沢薰・森岡秀人『弥生土器の様式と編年』近畿1、東京、1989年を参考にした。
- (26) 勝浦康守「徳島県名東遺跡」、『日本考古学年報』40、東京、1987年、PP507~512の記述を基に作成した。
- (27) 愛知県教育委員会「埋蔵文化財愛知」No.8、愛知、1989年。
- (28) 萩原儀正・石野博信「奈良県大福遺跡」、『日本考古学年報』38、1985年、東京、PP508~510。
- (29) (10)に同じ。
- (30) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II、奈良、1977年。
- (31) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』II、奈良、1962年。
- (32) 徳島市教育委員会『第9回埋蔵文化財資料展—阿波を掘る—』、徳島、1988年。
- (33) 徳島県教育委員会「庄遺跡徳大藏本団地（体育馆地点）地区発掘調査現地説明会資料」

(34) 飯田義資編『名東郡史』、徳島、1974年。

(35) (3)に同じ。

(36) 徳島市内においては、中島田遺跡においても普遍的に認められる状況である。

図 版



調査地Ⅰ区 全景

北東より



調査地Ⅱ区 全景

西より



調査地Ⅲ区 自然落ち込み遺構 S X01

南東より



自然落ち込み遺構 S X01 遺物検出状況

南東より



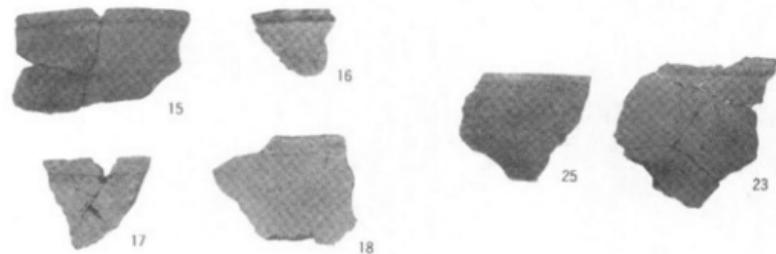
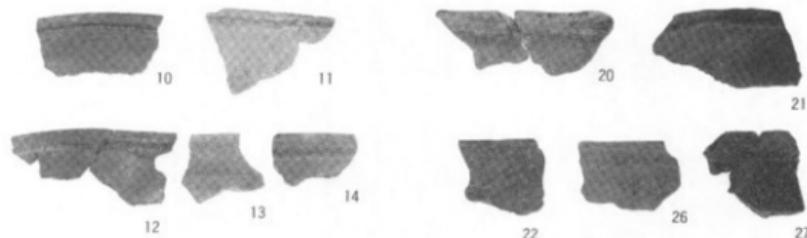
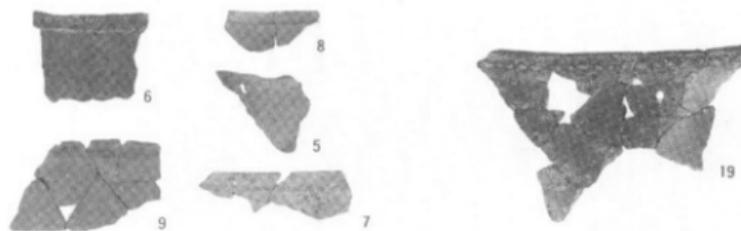
自然落ち込み遺構 S X01 断面土層

北東より



自然落ち込み遺構 S X01 遺物検出状況

南東より





24



28



33



34



35



37



29



30



36



31



32



38

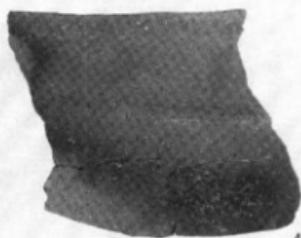


40

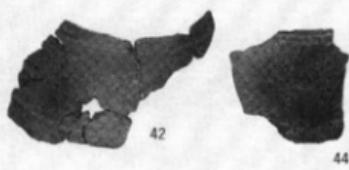
41



39

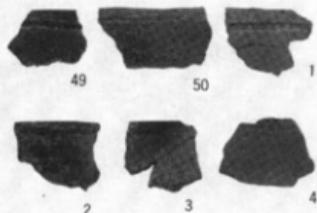


45



42

44



49

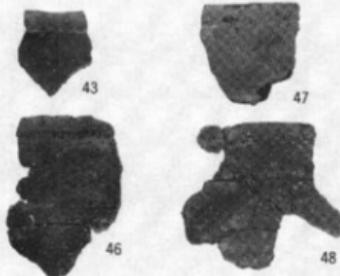
50

1

2

3

4



43

46

47

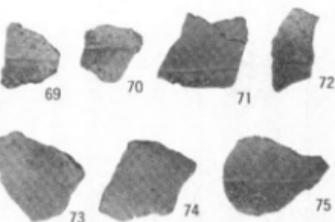
48



51



52



69

70

71

72



73



74



75



53

57

61

54

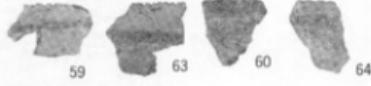


58

62

55

56



59

63

60

64



76



82



78



80



65

67

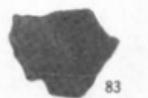


66

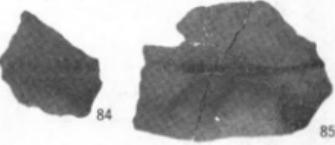
68



77

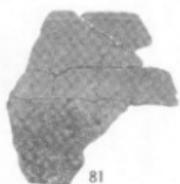


83



84

85



89



94



95



96



97

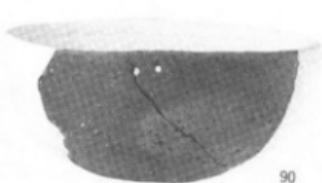
98



86



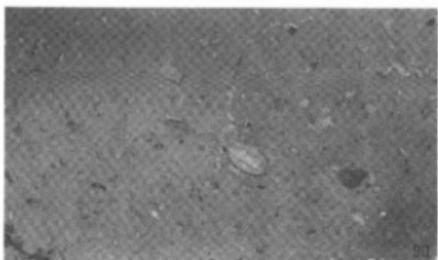
87



90



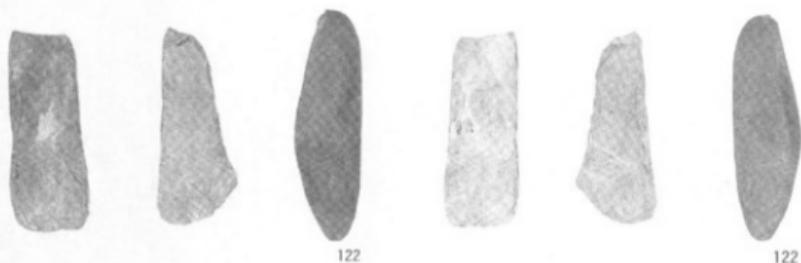
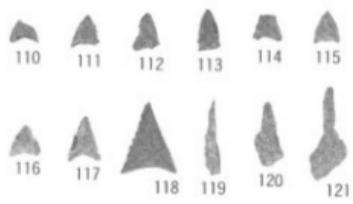
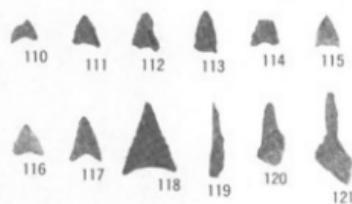
86



90



91

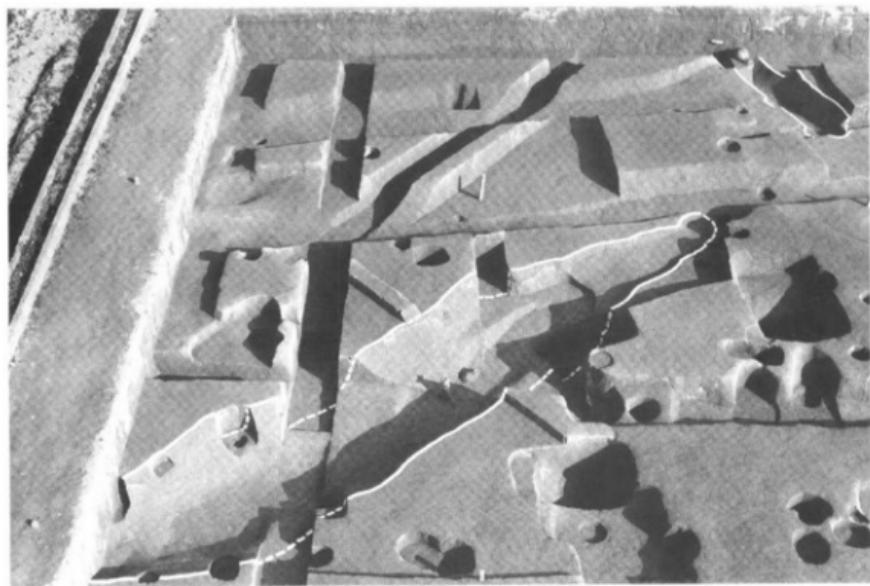




125

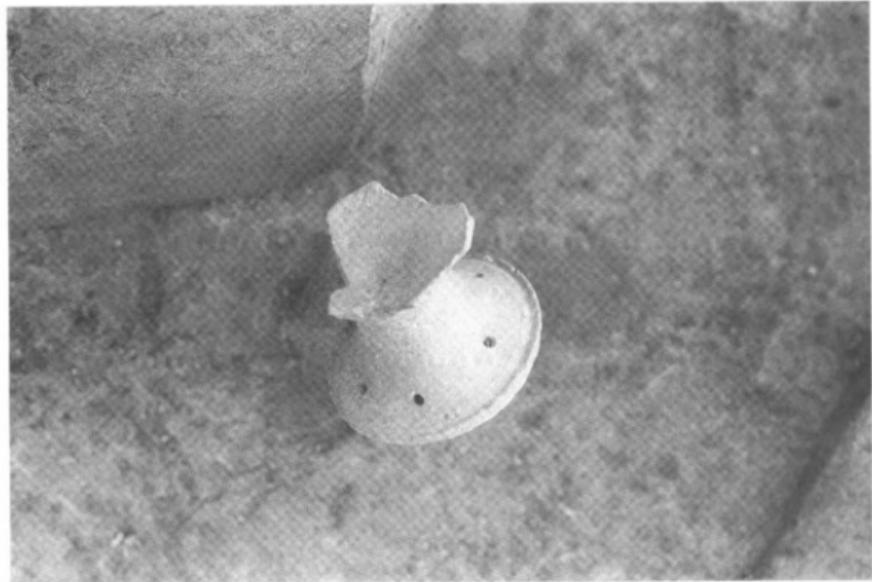


125



1号方形周溝墓

西より



1号方形周溝墓西周溝遺物検出状況

南より



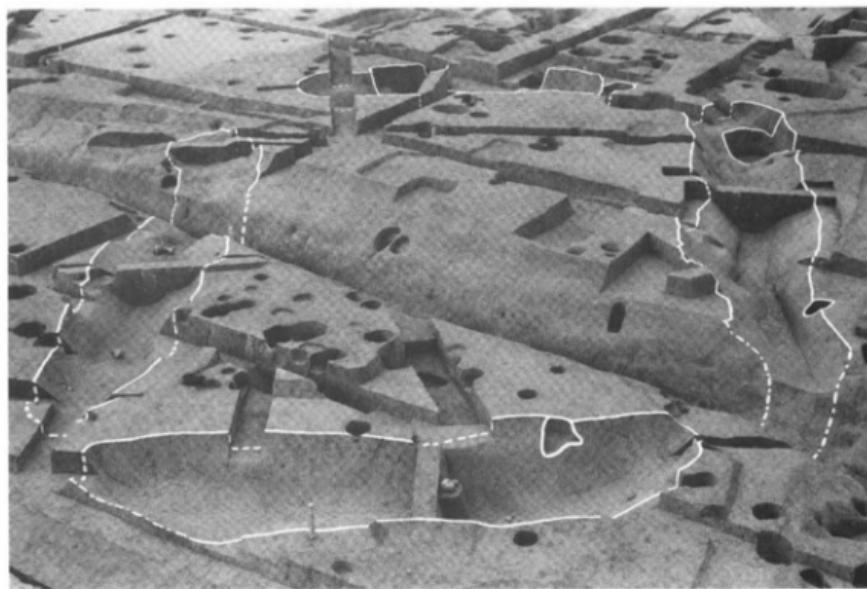
1号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

西より



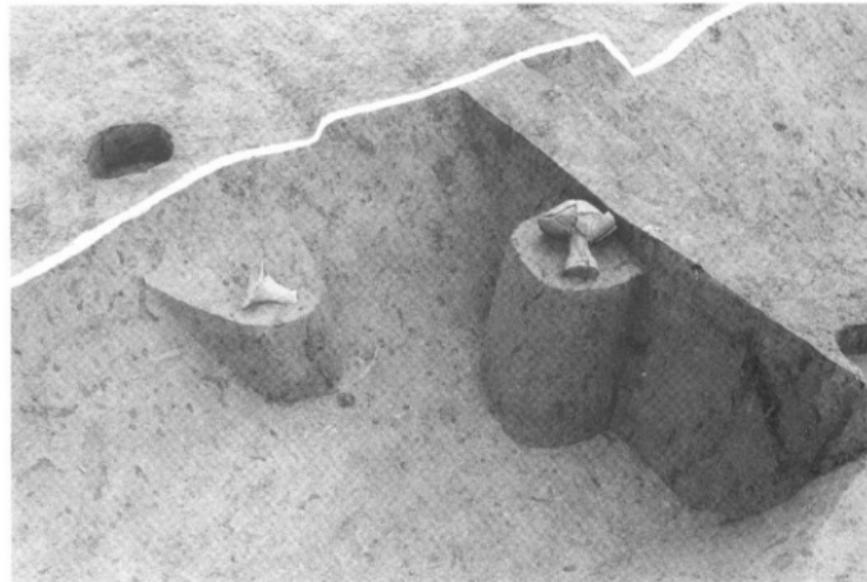
1号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

北より



2号方形周溝墓

南東より



2号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

北東より



2号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

北東より



2号方形周溝墓西周溝遺物検出状況

北西より



2号方形周溝墓西周溝遺物検出状況

北東より



2号方形周溝墓西周溝遺物検出状況

北より



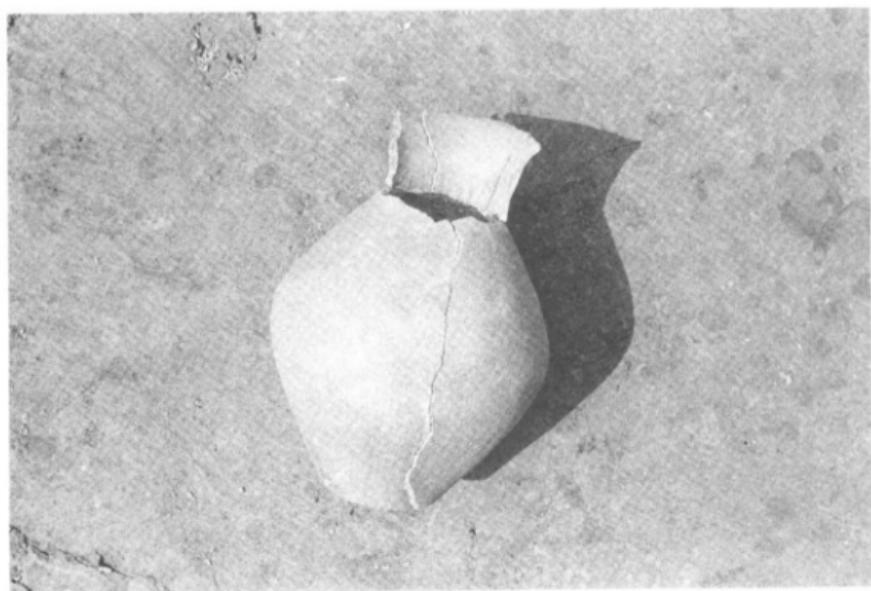
3号方形周溝墓

南西より



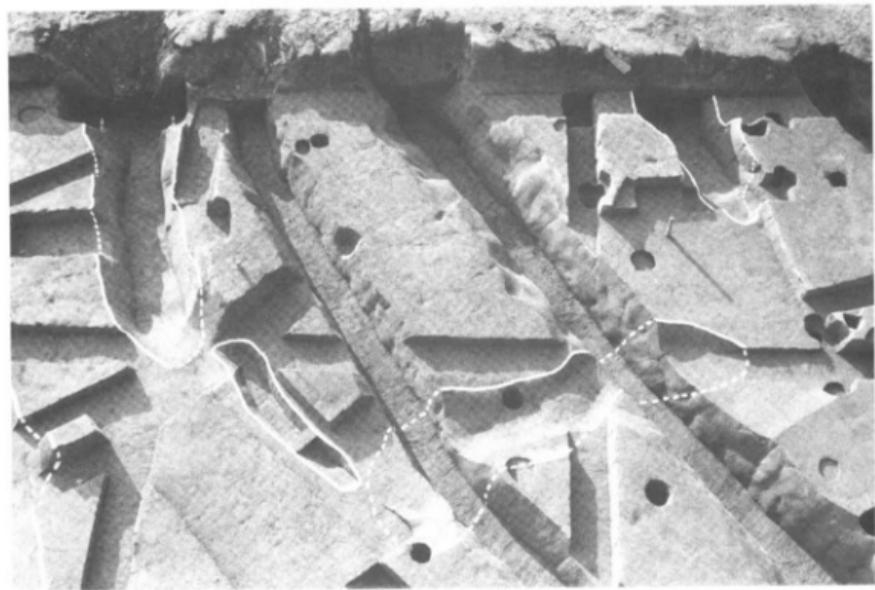
3号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

西より



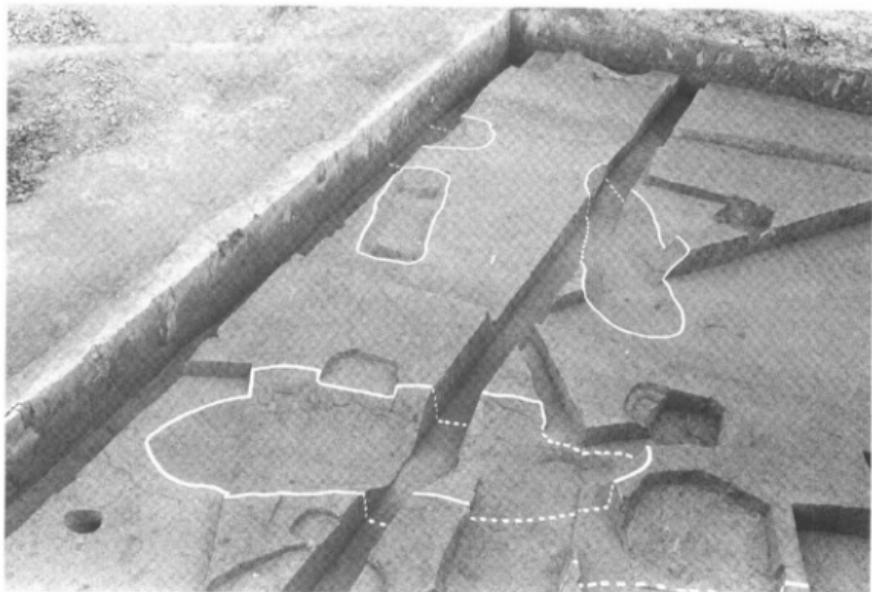
3号方形周溝墓南周溝遺物検出状況

南より



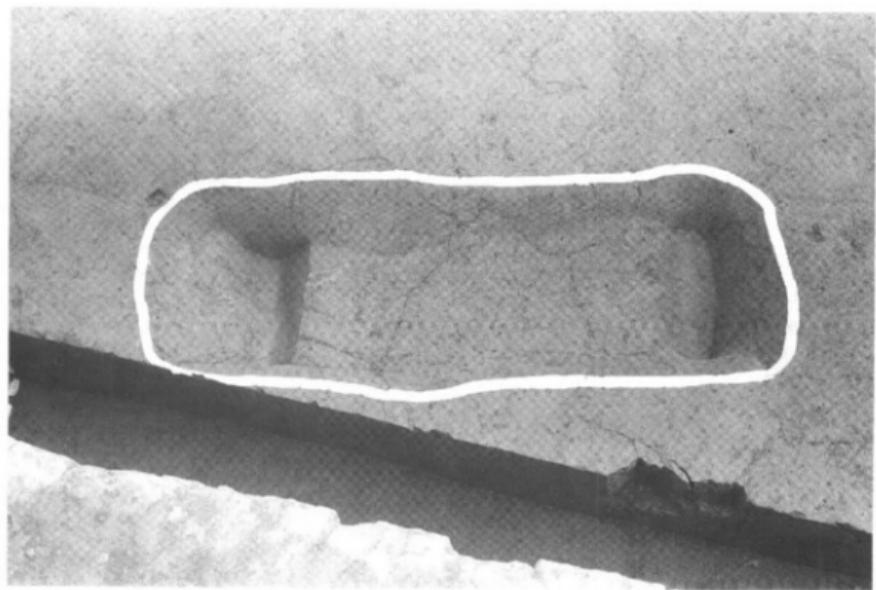
4号方形周溝墓

東より



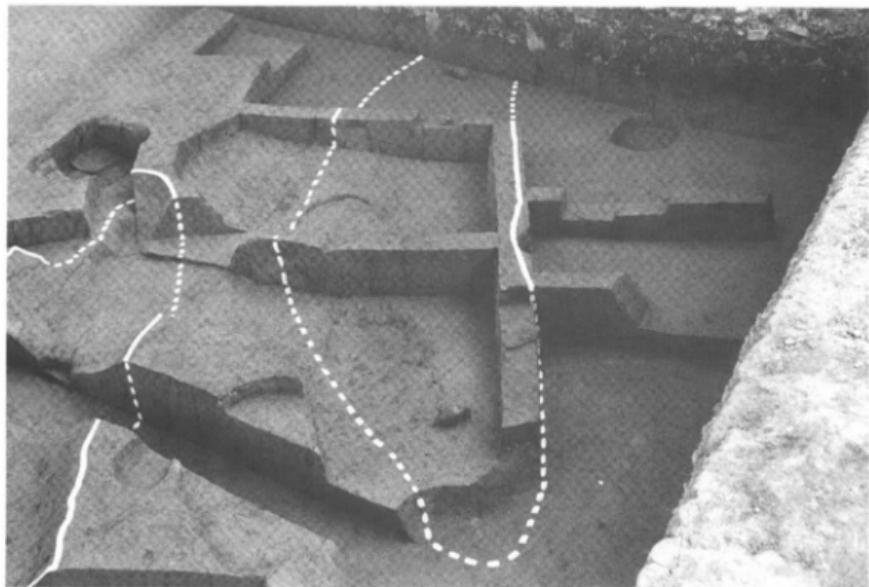
5号方形周溝墓

西より



5号方形周溝墓主体部

北より



6号方形周溝墓東周溝

北より



6号方形周溝墓東周溝遺物検出状況

北西より



6号方形周溝墓東周溝遺物検出状況

西より



6号方形周溝墓東周溝遺物検出状況

南より



土器埋納土壌 S K 10 遺物検出状況

東より



土器埋納土壌 S K 11 遺物検出状況

北より



147



150



148



151



149



152



153



155



154



156



147



150



148



151



149



152



153



155



154



156

1号, 2号, 4号, 5号方形周溝墓, 土器埋納土壤 S K10, 11 出土遺物



144



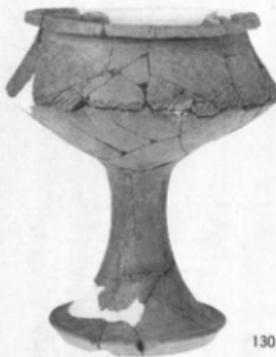
132



140



126



130



131

1号, 2号方形周溝墓出土遗物



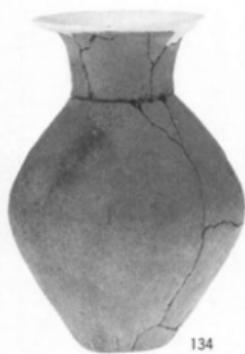
141



142



143



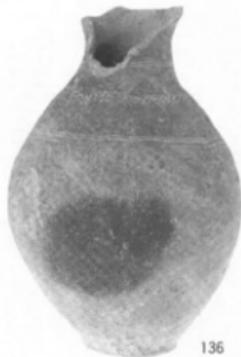
134



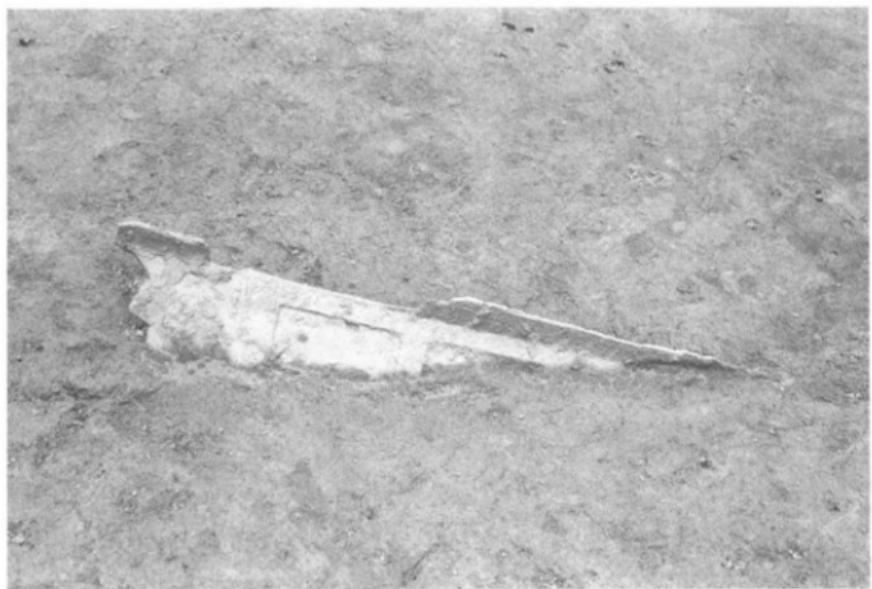
139



138



136



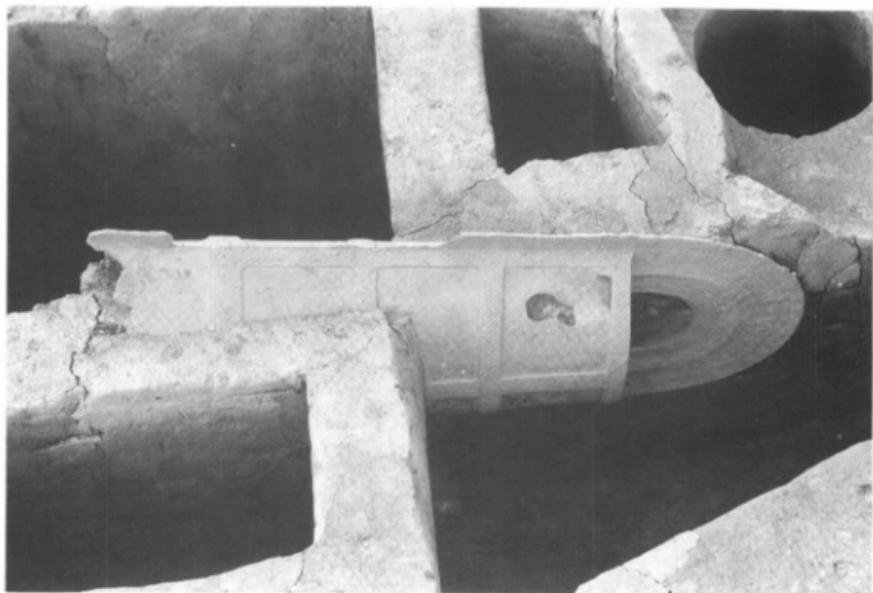
銅鐸検出状況

南より



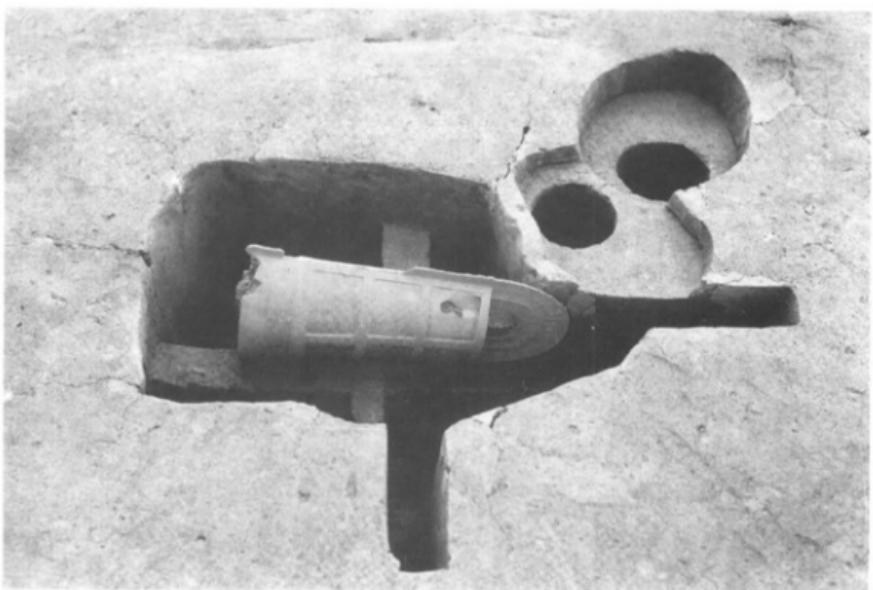
銅鐸検出状況

北西より



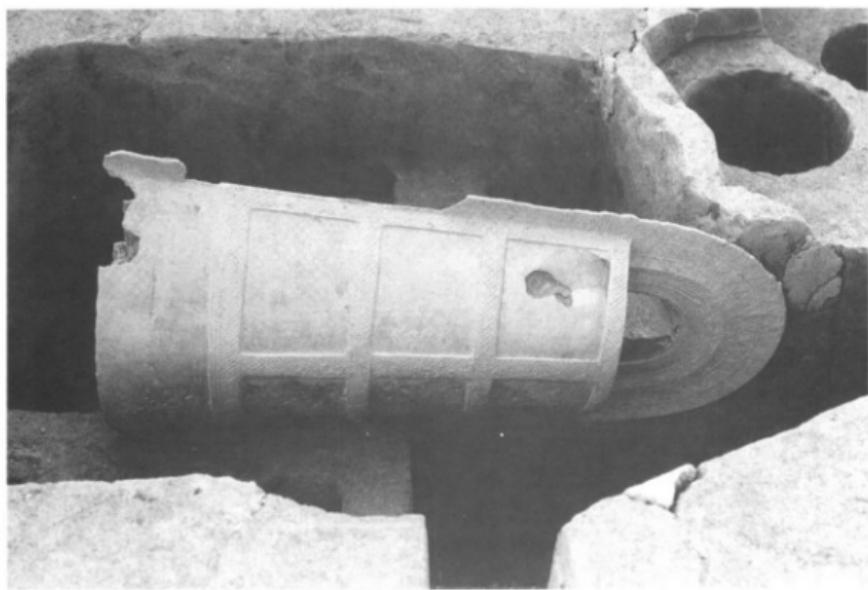
銅鐸検出状況

南より



銅鐸検出状況

南より



銅 鐘 出 土 状 況

南より



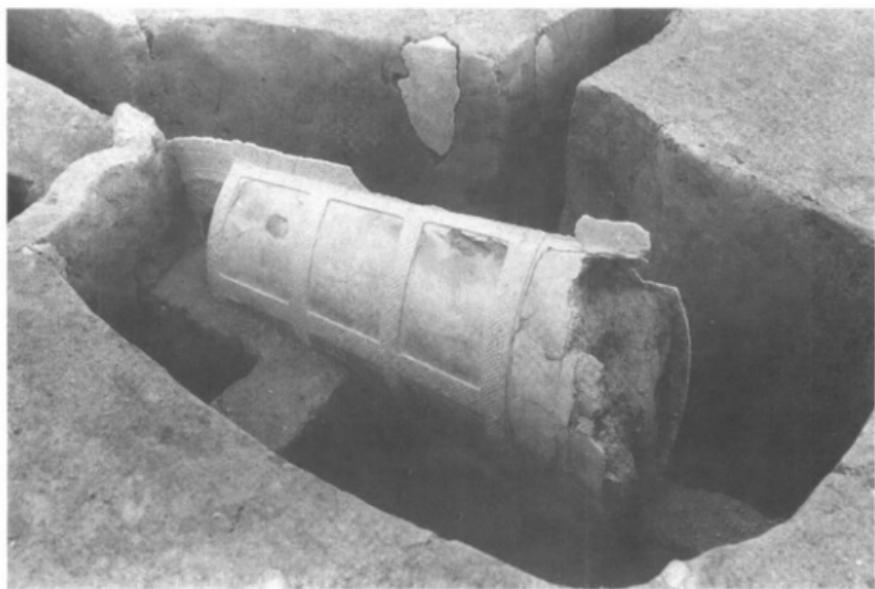
銅 鐘 出 土 状 況

南東より



銅 鐸 出 土 状 況

南西より



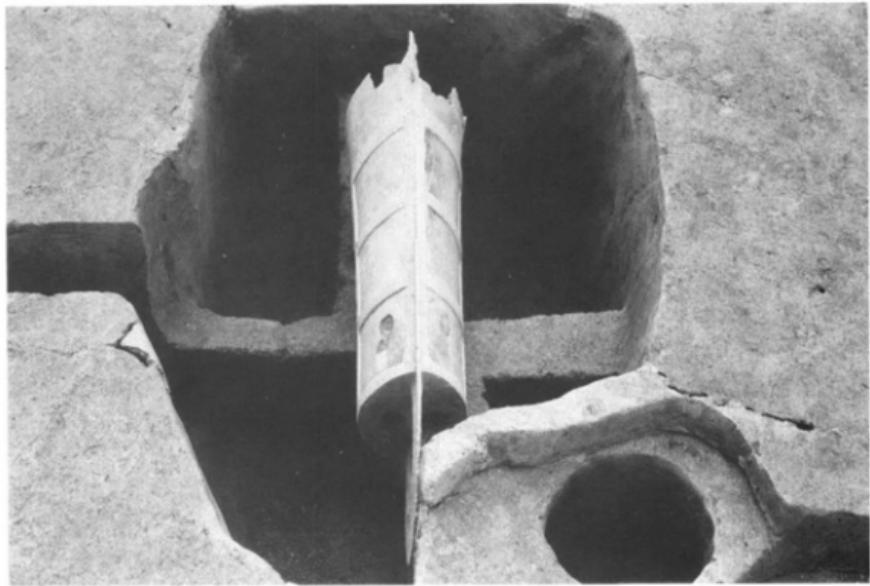
銅 鐘 出 土 状 況

北西より



銅 鐸 出 土 状 況

南より



銅 鐘 出 土 状 況

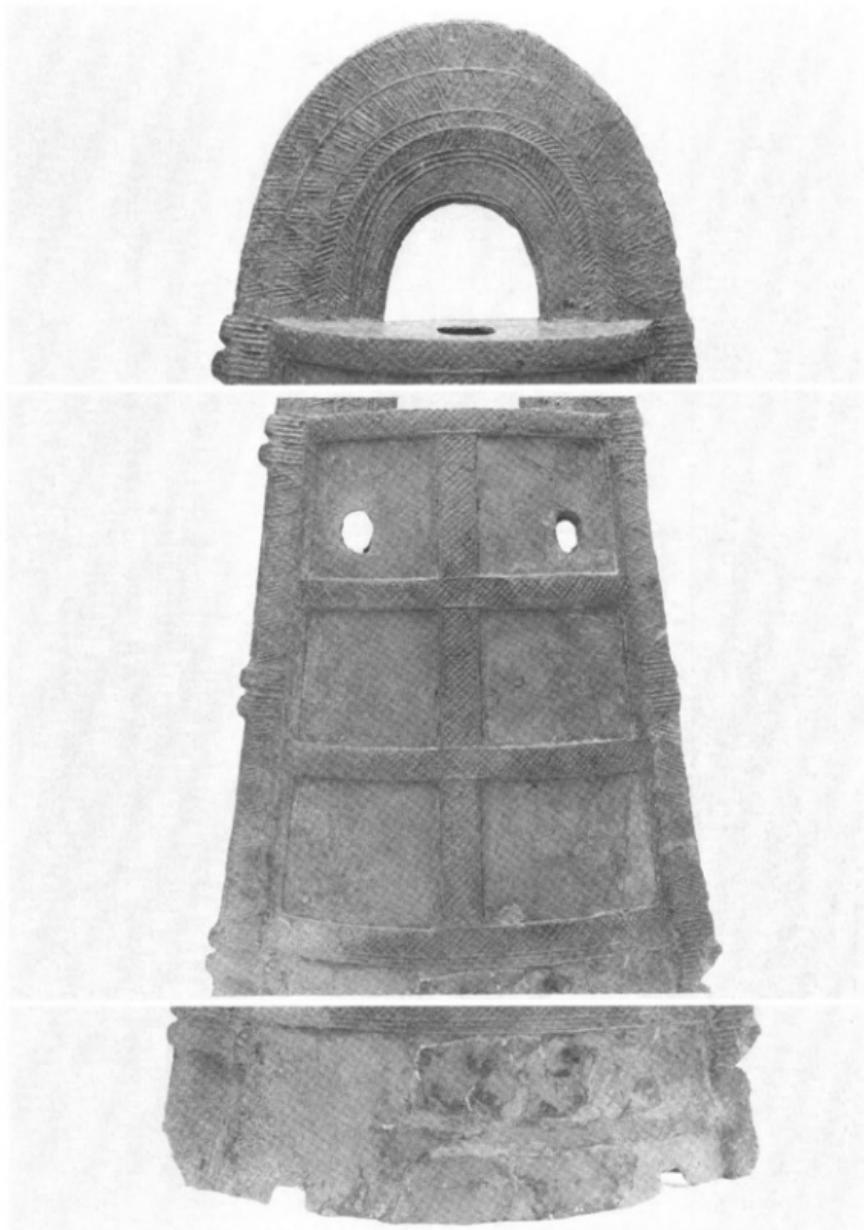
東より



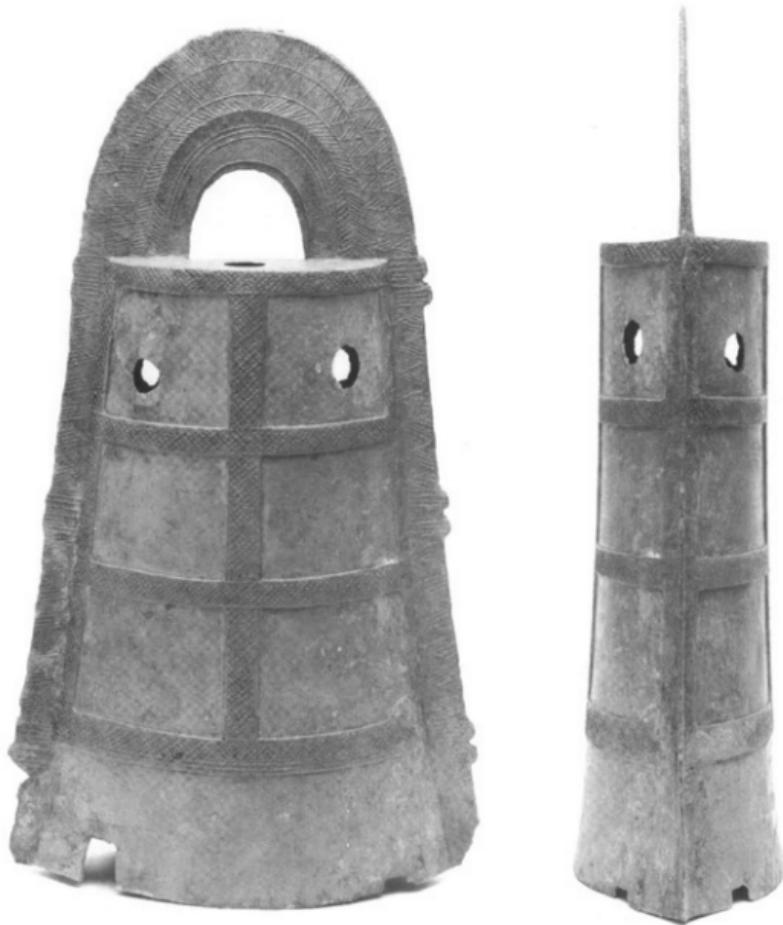
土壤 S K01 出土銅鐸 A 面



A - B 面



土壤 S K01 出土銅鐸 A 面



土壤 S K01 出土銅鐸 B 面

B - A 面



土壤 S K01 出土銅鐸 B 面



調査地II区 挖立柱建物

南西より



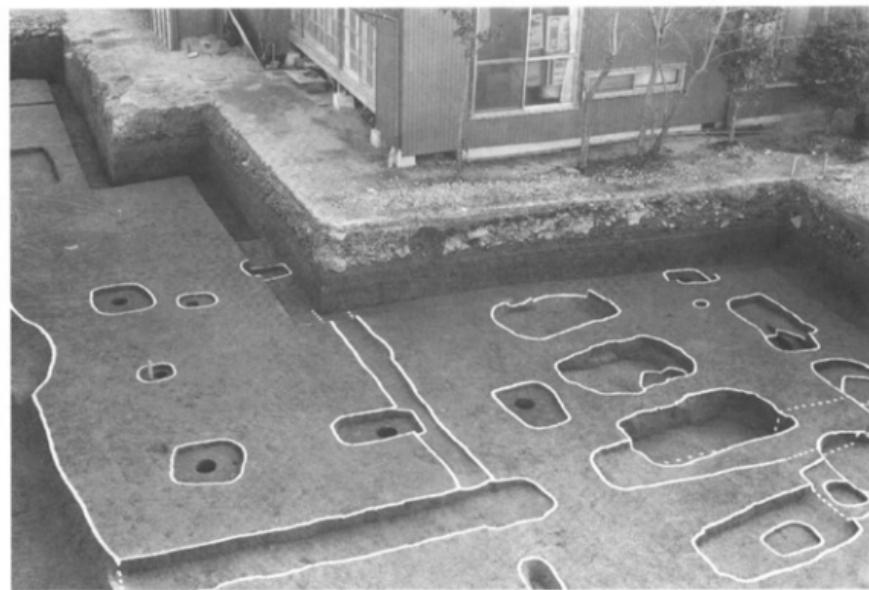
調査地II区 挖立柱建物

南東より



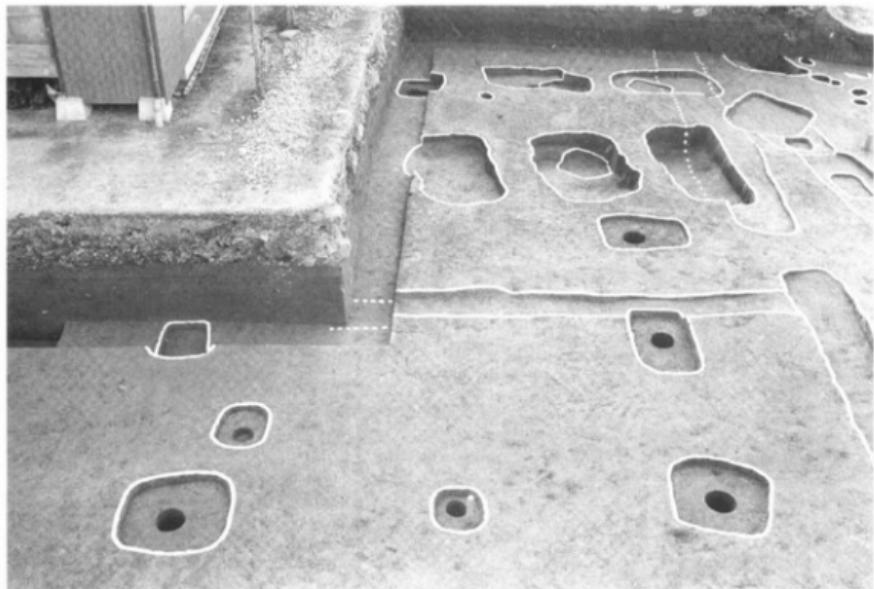
調査地III区 全景

北より



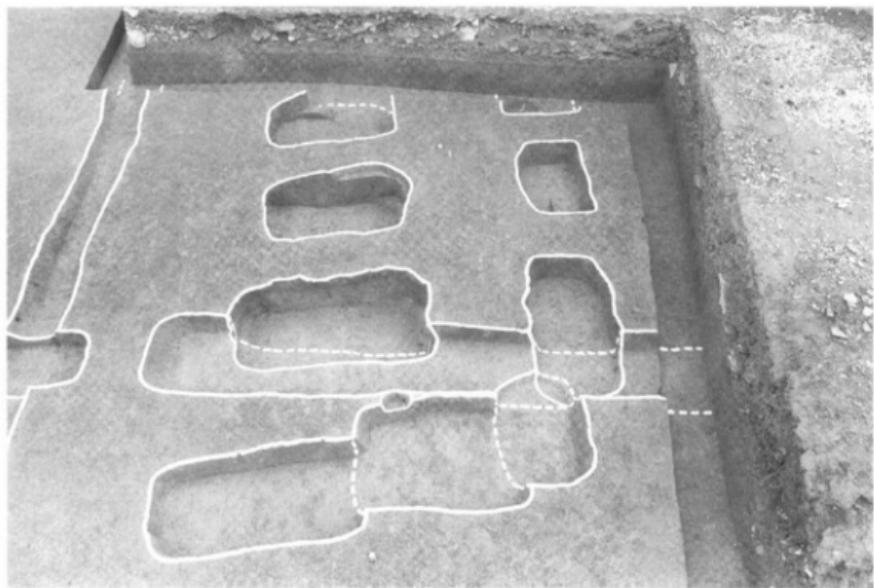
据立柱建物 S B 02

北東より



掘立柱建物 S B02

東より



調査地川区 土壙墓群

北より